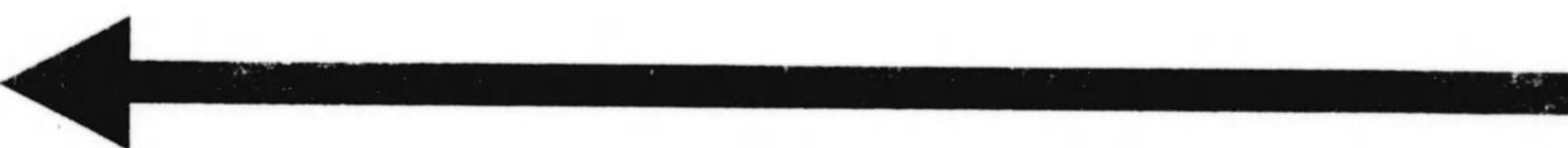


435  
69

6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

始



特 227  
157



解思  
和漢朔錄集





## 緒言

- 一、この「略解和漢朗詠集」は、一般用の参考書として著したものである。然し一面教科用としての注意をも怠らなかつたことを明記する。
  - 一、本書は、その題名の示す如く略解ではあるが、決して杜撰の粗解ではない。學的良好のもとに十分なる注意を拂つて結實したものである。
  - 一、本文は、拙著「和漢朗詠集新釋」の本文を流用した。元來和漢とも字句や作者に訛舛が相當にあるが、煩瑣の恐れを避けて、今は一々言及しない。
  - 一、註釋は、本文の句數が非常に多いので、成るべく簡明直截を主とし、種々の便法を執つた。即ち、  
語釋は、難解の辭句及び典故を旨として施し、時に便宜によつては、釋中に句意をも説明した。
- 但し重出のものはすべて再言の勞をはぶいた。



大意は、句意文意のむづかしいものを主として説明した。又すでに語釋によつて大意の了解せられる程度のものには、強ひて説明を與へない。

又常識的に一目瞭然たるものが多少ある。これは語釋も大意も略することとした。

一、頭註には、作者の小傳を掲げた。

一、更に精密なるこの集の研究を望まると學人は、進んで「和漢朗詠集新釋」を披讀せられたい。

昭和十八年二月

金子元臣 するす

解略和漢朗詠集 目次

卷上

春

立	春	一
早	春	四
春	興	七
春	夜	一〇
予	日附若菜	一一
若	菜	一二
三月三日	附桃	一三
桃	春	一六
暮	春	一六
三月	盡	一八
閏	三月	二〇

目次

首	更	夏	三
夏	衣	更	三
夏	更	更	三
藤	款	冬	四
躑	躑	躑	四
落	花	附落花	四
花	附落花	附落花	七
柳	梅	附紅梅	三
紅	梅	附紅梅	三
梅	附紅梅	附紅梅	元
雨	附紅梅	附紅梅	元
霞	附紅梅	附紅梅	元
鶯	附紅梅	附紅梅	元



八月十五夜附月	秋夜	秋晚	秋興	七夕	早秋	立秋	秋	扇	蟬	螢	郭	蓮	花	晚	納	端	夏
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
七	五	四	一	六	六	六	六	六	六	六	六	六	五	五	五	五	五

擣霧	露	鹿	蟲	歸	雁	落	紅	前	權	蘭	萩	女郎花	九月盡	菊	九月九日附菊	月
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	九	九	九	九	九	九	八	八	八	八	八

雲	風	雜	卷下	佛	霰	春	水	雪	霜	爐	歲	冬	初	冬
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
二九	二七	.....	.....	二四	二四	二三	二三	一九	二七	二六	一五	一四	一三	一三

田	山	仙	故	古	禁	水	山	山	酒	文	管	猿	鶴	草	竹	松	曉	晴
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
二七	二四	二〇	二六	二六	二四	二六	二五	二五	二五	二四	二四	二四	二四	二九	二七	二四	二四	二四



隣	山	佛	僧	閑	眺	餞	行	庚	帝	親	丞	將	刺	詠	王	妓	遊	老	
家	寺	事	居	望	別	旅	申	王附法皇	王附法皇	王附王孫	相附執政	軍	史	史	君	女	女	人	
二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六

交	懷	述	慶	祝	戀	無	白
友	舊	懷	賀	常	常	常	常
三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六

# 略解 和漢朗詠集

金子元臣著

## 卷上 春

### 立春

○立春は正月の節で、元日は正月の日の始、立春は正月の氣の始である。故に年により立春に運速を生ずるが、大體太陰曆では一月一日より三月末日までを春とし、夏秋冬、各三月で十二月に至る。これが曆の上の分ちである。

逐吹ヒテカセラ潜開カニイテ不待タ芳菲ハナ之候トキ

迎春ヘテ乍變チニシテ將希ニハムト雨露之恩ニ

内宴進花賦。紀淑望

【語釋】逐吹 風に従ふこと。吹は風。○芳菲之候 百花の芳ばしい時節。芳菲は草や花の香の芳ばしいのをいふ。○迎春乍變 梅が、立春の節となつて、忽ち生氣を帯ぶるをいふ。○雨露之恩 春になれば雨露が暖で、草木が生長するからいふ。又その裏には白氏文集の「君

紀淑望 中納言  
長谷雄の子。五  
位大學頭に至  
る。延喜十九年  
卒した。



恩若雨露」といふ意も含めた。

【大意】梅は百花の魁をなすものだから、今吹き初めたばかりの春風を慕うて、早く蕾を破り、百花の芳ばしい盛春の候を待たず、一陽來復の氣を迎へて、急に寒木の姿を變じて、漸次に花を開かうとして、雨露の潤ひを希はうとする。なほその裏には、官位卑く世に知られなかつた我が身が、今日この内宴に召されて、一篇の作を獻するを得たのは、寒木の春に逢つたやうなものである。されば、この後ますます君の御惠を待つこと、雨露の恩を希ふに異ならずとの意を含めた。

池凍束頭風度解。窓梅北面雪封寒。

立春日書懷呈芸閣  
諸文友篤茂

【語釋】○凍 氷の義。○束頭 頭はほとりの義。○芸閣 藏書の樓。芸香は蠶を辟ける、故に藏書の處をいふ。

【大意】春は東方を主とするので、風も東風が吹く、隨つて池の氷も東方は早く春風に當つて解け初めるが、北方は日陰の故に残雪がまだ消えず、窓前の梅も、北向の方は空しく雪に封ぜられて、まだ綻び初めない。

年の内に春は來にけり一とせをこそとやいはむ今年とやいはむ。元方

【大意】年が明けて春になるのが常であるのに、今年には年内に立春となつたから、この年の内

篤茂 藤原氏。  
圖書頭丹後守と  
なる。

元方 在原氏。  
業平の孫、棟梁  
の子。

を去年といはうか、それとも今年といはうか。

柳無氣力條先動。池有波文氷盡開。府西池。

【語釋】○無氣力 柳の始めてもえ出る頃は、枝がまだ強くないのでいふ。○波文 波のあや。

今日不知誰計會。春風春水一時來。白

【語釋】○計會 豫め計算して、物を計り會はすること。

【大意】前の句を合せて一首の絶句。今日見れば、そよ吹く風にしなやかな柳の枝が一番に動き、池の氷は解けて、水面に波文が立つてゐる。何者が立春の今日、春風と春水と一時に來り會ふやうに計らつたのであらう。

夜向殘更寒磬盡。春生香火曉爐燃。山寺立春。

良春道

【語釋】○殘更 更は時のかはる意。一夜を分つて五更とする。一更は今の午後八時、二更は午後十時、三更は午後十二時、四更は午前二時、五更は午前四時。殘更は即ち五更である。○向 なん／＼とするは成りなんとする、即ちならうとするの意。○寒磬 冬の寒氣を帯びた磬聲。磬は樂器の名、玉又石で造り、今は多く銅でつくる。打つて鳴らす。○香火 佛前

白 白居易をいふ、字は樂天。唐の大詩人。官刑部尙書に至る。會昌六年卒した、年七十五。

良春道 良岑氏。良はその略である。醍醐天皇の御代の人。



に焼く香。

【大意】 今夜限りで立春の節となるので、寺僧が五更にならうとする夜、夜の勤に打鳴らす磬の聲が盡きると共に、春は佛前の香火のぬくみから生じて来て、曉の香爐が燃える。

袖ひぢてむすびし水の氷れるを春たつ今日の風やとくらむ。 貫之

【語釋】 ○ひぢて 濡れひたつて。○むすぶ 手で水を掬ひ上げること。下の「とく」といふ語と縁がある。

【大意】 夏の頃、暑さに堪へかねて、我が袖の濡れるのも知らず、掬ひ上げた水が、冬となつて固い氷となつたのを、今日春が立返つて、のどかな風が吹きとがして、また元のやうな清い流となすことであらうか。

春たつといふばかりにやみ吉野の山も霞みてけさは見ゆらむ。 忠岑

【語釋】 ○いふばかりにや いふ程にやの意。○み吉野 大和國吉野郡吉野山。みは美稱。

早春

氷消田地蘆錐短。 春入枝條柳眼低。 寄樂天。元稹

【大意】 田面の氷はいつの間にか消えて、錐のやうな蘆の新芽があらはれ、柳の枝には春が来て、物の眼に似た新芽が垂れ下る。

貫之 紀氏。官木工頭に至り、天慶九年卒した書を善くし、最も文章和歌に長じた。古今集撰者の一人。

忠岑 壬生氏。右衛門府生。和歌に秀で、貫之等と名を均しくした。古今集撰者の一人。

元稹 字は微之。唐の詩人。累進して尚書左丞。大和年間卒した。年五十二。白樂天の親友。

保胤 慶滋氏。菅原文時の門に遊び、名聲當時第一であつた。のち出家した。

野相公 參議小野篁。嘗て清原夏野等と令義解を撰した。仁壽二年卒した。

て、物の眼に似た新芽が垂れ下る。

先遣和風報消息。 續教啼鳥說來由。 春生。白

【大意】 春は人界に向つて、まづ和らかに暖い風を吹かせて、春の來た消息を傳へさせ、續いて百鳥を囀らせて、その由來を説き知らせる。

東岸西岸之柳遲速不同。 南枝北枝之梅開落已異。 春生。保胤

【大意】 春は東方より來る故に、東岸の柳は早く萌え、西岸の柳は遅く芽ぐみ、又南の方は日向で暖いから、南枝の梅は早く咲いて早く散り、北の方は日陰で寒いから、北枝の梅は遅く開いて遅く散る。

紫塵嬾蕨人拳手。 碧玉寒蘆錐脫囊。 和早春晴。野相公

【語釋】 ○紫塵 蕨の萌え出た穂に、紫色の粉があるのといふ。○嬾 正しくは嫩の字を書く。○人拳手 蕨の萌えた形が、人の拳に似てゐる。○碧玉寒蘆 碧玉は蘆の芽を青い玉に譬へた。寒蘆は冬や早春の蘆。○錐脫囊 蘆芽の萌え出たのが、錐が囊を貫いて出たのに似てゐる。



郡良香 正五位  
下文章博士。晩  
年、陽成天皇の  
勅を奉じて、文  
德實錄十卷を撰  
した。

紀納言 中納言  
紀長谷雄をい  
ふ。文書に長じ  
た。延喜中、中納  
言に累進し、同  
十二年薨じた。

志貴皇子 又施  
基皇子とも書  
く。天智天皇の  
皇子、光仁天皇  
の御父。田原天  
皇と諡した。

正澄 古今集に  
は當純とある。  
菅大臣源能有の  
男。五位少納言。

兼盛 平氏。天  
曆中、駿河守に  
任じた。和歌の  
名手。正暦元年  
卒した。

劉禹錫 字は夢  
得。唐の人。會  
昌の初、檢校禮  
部尚書を加へて  
卒した。年七十  
二。

氣霽風梳新柳髮。 水消浪洗舊苔鬢。

春暖。郡良香

【語釋】 ○風梳ニ新柳髮。 柳の若枝の靡くさまが、美人の髪を梳るさまに似てゐる。

【大意】 天氣が晴れて、春の風は、若い柳の髪を梳り、氷も解けて、清らかな浪が、去年のま

まの苔の鬚を洗つてゐる。

庭増氣色晴砂綠。 林變容輝宿雪紅。

草樹晴迎春。紀納言

【語釋】 ○晴砂 乾いた砂。

【大意】 春晴の日、庭上は春の氣色を増して、乾いた砂も萌え出す草の爲に綠となり、枯れた

林も冬の姿態を變へて、花が咲くので残つてゐる雪も紅い。

岩そ、ぐたるひのうへの早蕨のもえいづる春になりける哉。

志貴皇子

【語釋】 ○たるひ 垂氷、所謂つらいで、岩の上に流れ注ぐものではないから、初二句は萬葉

集の「岩ばしるたるみの上の」に従ふがよい。「たるみ」は瀑布である。○さわらび さは美

【大意】 岩の上を走つて流れる瀑のほとりの早蕨が、やつと萌え出す春の時季になつたことよ。

と、出世の氣運に逢はれたことを懼ばれた御歌。

山風にとくるこほりのひまごとに打ちいづる波やはるの初花。

正澄

【語釋】 ○山風に 古今集には「谷風に」とある。谷風は詩經に見えて東風のこと。

【大意】 春風が吹きくるにつれて、そこごとく解けはじめた谷の水の隙間々々から、打ち出る

白波は、ちやうど花のやうに見える。これが恐らく春の最初の花といふべきであらうか。

見渡せば比良のたかねに雪きえて若菜つむべく野はなりにけり。

兼盛

【語釋】 ○比良のたかね 近江國滋賀郡にある。江州の連山中、雪最も早く降り、遅く消える。

春興

花下忘歸因美景。 樽前勸醉是春風。

酬哥舒大見贈。白

【大意】 美景を賞すとては、花下に遊び興じて家に歸ることを忘れ、春風に浮かれては、樽前

に盃をあげて酔を勤める。

野草芳菲紅錦地。 遊絲綠亂碧羅天。

春日書懷寄東洛白樂天。劉禹錫



【語釋】 ○遊絲 かげろふ。空中に閃めく水氣。その浮動する様が、絲の亂れたやうなので遊絲といふ。又その浮動する状から野馬ともいふ。春に多い。

【大意】 俯して見れば、野草芳ばしく茂り合うて花が咲いてゐるので、地は紅の錦を布いたやうであり、仰いで見れば、かげろふがもやくと結ばれ亂れて、天は碧色の羅を張つたやうである。

歌酒家々花處々 莫空管領上陽春

送令狐尚書赴東都白

【語釋】 ○管領 我が物と支配すること。○上陽 縣の名。即ち東都のある處。

【大意】 東都(洛陽)は、家々に歌舞遊宴の設があり、處々に花がある。どうか、東都の春興をわが物となして、上陽縣の春を支配する權を空しうし給ふな。

山桃復野桃 日曝紅錦之幅 門柳復岸柳 風統麴塵之絲

逐處花皆好序。紀齊名

【語釋】 ○幅 はたものは機物で、布帛の稱。○統 縮ねるの意。○麴塵 色の名、萌黃の黄ばんだもの。麴塵(麴の花)の色に似たる故にいふ。

紀齊名 橋正通に學び、一條天皇の御代、大内記で越中權守を兼ねた。長保元年卒した。

著野展敷紅錦繡 當天遊織碧羅綾

春生。野相公

【大意】 種々の草は、野に紅の錦や繡を展べ敷いた如く、立ち昇るかげろふは、天に碧色の羅や綾を處定めず織るやうである。

林中花錦時開落 天外遊絲或有無

上寺望聚落。田達音

【大意】 あちこちに見える林間の錦のやうな花は、時に開き又時に散り、晴れ渡つた空には遊絲の日に映じて、或は有るが如く或は無きが如く見える。

笙歌夜月家々思 詩酒春風處處情

【語釋】 ○笙 音セイ。浴にシャウ。樂器の名。

【大意】 面白い月夜に、笙を吹き歌をうたひなどして、家々に楽しみ遊ぶの思があり、又長閑な春風に、詩を作り酒宴などして、處々に風流を盡す情趣がある。

も、しきの大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふもくらしつ。 赤人

【語釋】 ○も、しき 宮の枕詞。○大宮人 朝廷に奉仕する百官有司。○いとまあれや 勤務の餘暇があることよ。○かざし 物を髪にはさむこと、又は物を頭の上にさしあぐるをいふ。

田達音 鳥田忠臣のこと。貞觀の初、越前權少掾となり、後美濃介に遷る。

菅三品 菅原文時をいふ。道眞の孫、高規の子。文章博士。天元四年卒した。

赤人 山部宿禰。元明・聖武兩天皇の頃の人。柿本人麿と名を齊しうした。



下句、萬葉集には「梅をかざしてこゝにつどへる」とある。

春はなほわれにて知りぬ花ざかり心のどけきひとはあらしな。  
【大意】 花盛りの頃は、明けくれ、それを翫ぶ方に心がいつて、却つて忙しい心地がすること  
を自分で知つた。恐らく世間に暢ん氣な人はあるまいな。

春夜

背燭共憐深夜月、踏花同惜少年春。  
【大意】 同人等とこゝに同居して、或時は燈火を背けて、共に深夜の月を賞し、或時は庭に落  
花を踏んで、わが青春も、この春のやうに空しく過ぎようとするのを、共に歎き惜しむ。

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくる。  
【大意】 春の夜の闇といふものは諱のわからぬ奴だ、闇がなんぼ梅の花を隠さうとしても、そ  
の花の色こそ見えないが、その香は隠されるものか。

朝恒 凡河内  
氏。甲斐少目。  
貫之・忠岑等と  
並べ稱せられ  
る。古今集撰者  
の一人。

子日 附若菜

○子日は昔子日遊といつて、人々野邊に出て小松を引いたり、若菜を摘んだりした。若菜を食へば、その人病なく、又邪氣を除くと稱したのである。

倚松樹以摩腰習風霜之難犯。和菜羹而啜口期氣味之克調。

菅 雲林院行幸。

【語釋】 ○摩腰 子日に松の木に觸れ、腰を摩でて祝する俗習があつた。○和菜羹 正月子日  
に七種の菜で羹を作つて食する。

【大意】 子日の祝に、松に倚りついてこれに觸れるのは、その木の風霜にも犯されぬに習はん  
が爲で、又七種の菜を和して羹として食ふのは、氣味よく調うて、無病健全ならんことを願  
ふ爲である。

倚松根而摩腰千年之翠滿手。折梅花而挿頭二月之雪落衣。

子日序。  
橋在列 尊敬

【語釋】 ○二月之雪 梅は陰曆二月を盛りとするからいつた。

【大意】 子日の祝に、松の根に寄つて腰を摩でると、その常磐の緑が手中に満ち、梅花を折つ

菅 菅原道真を  
いふ。是善の子。  
累進して、醍醐  
天皇の御代從二  
位右大臣に至  
る。延喜元年太  
宰權帥に貶せら  
れ、三年配所に  
薨じた、年五十  
九。

橋在列 彈正  
忠。後俗となり、  
尊敬と稱した。



て頭にかざせば、その花が散つて、時ならぬ二月の雪が衣に落ちる。

子の日してしめつる野べの姫小松ひかでや千代の蔭を待たまし。清正

【大意】 子日の遊びして、わが物と占めた野邊にある小松を、寧ろ引き取らないでそのままに置いて、千歳の後、生ひ茂つて緑の蔭をなすのを待たうか。

ねの日する野邊に小松のなかりせば千代のためしに何をひかまし。忠岑

【語釋】 ○千代のためしに云々 子日に千歳を祝ふ例に引くに、松を曳くを寄せた。

千歳までかぎれる松もけふよりは君にひかれてよろづ代やへむ。能宣

【語釋】 ○かぎれる松 千歳を壽命の限とした松。○ひかれて 最負されての意を含めた。

若菜

野中<sup>ニ</sup>若菜<sup>ニ</sup>世事推<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>蕙心<sup>ニ</sup> 爐下<sup>ニ</sup>和羹<sup>ニ</sup>俗人屬<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>萹指<sup>ニ</sup>。催粧序。

【語釋】 ○若菜 菜をえらんで抜き取る。○蕙心 婦人のやさしい心。蕙は香草の名。○萹指 婦人のたわやかな指。○催粧 婦人が粧をこらすこと。

【大意】 子日の遊びに、野外に出て若菜を摘むことは、世間の習、これを婦人のやさしい心に限るとして奨め、また爐に當つて羹にして調理することは、一般の人が、婦人のしなやかな手に任せる。

あすからは若菜つませむ片岡のあしたの原はけふぞやくめる。人丸

【大意】 あしたの原(大和國北葛城郡)は、今日、その野を焼いてゐるやうである。それでは若草ももえ出るであらうから、明日からは、若菜を摘ませよう。

あすからは若菜つまむとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ。赤人

【大意】 明日からは若菜を摘まうと、處を占めて置いた野に、寒さがさえ返つて、昨日も今日も雪が降り／＼してゐる。これでは、いつ若菜が摘めることやら。

行きて見ぬ人もしのべと春の野にかたみにつめる若菜なりけり。貫之

【語釋】 ○かたみ 菜葉の類を摘み入れる小籠。これに記念の意のかたみを通はせた。

【大意】 まだ野に出て見ぬ人も、春野の面白さを想ひ出せとて、その記念として、かたみの中に摘んだこの若菜であるぞ。

三月三日 附桃

春

人丸 柿本氏。  
持統・文武の兩  
天皇に仕へ、世  
に歌聖と稱せら  
れる。官位傳記  
共に詳でない。

能宣 大中原  
氏。祭主頼基の  
男。正四位下祭  
主に任ぜられ  
た。曾て勅を奉  
じて、源順等と  
共に萬葉集を調  
點し、後撰和歌  
集を撰した。い  
はゆる梨壺五人  
の一人。正暦二  
年卒した。

清正 藤原氏。  
中納言兼輔の  
子。五位左少將。



春來遍是桃花水、不辨仙源何處尋。桃源行。王維。

王維 唐の人。書畫に巧みに詩を善くした。官尚書右丞に至る上元の初年に卒した。年六十一。

【語釋】 ○桃花水 桃の花の咲く頃の出水。○仙源 武陵の人が谿水をたづねて、その山奥桃林のある仙境に、世離れた人里を發見したといふこと、桃源記に見える。

【大意】 春が来れば、四方の溪谷に漲るのは、盡く桃花水である。しかし嘗て見たあの桃源の仙境は、そのとも辨へ難いので、どうして、これを尋ねて行くことが出来ようぞ。

春之暮月、月之三朝、天醉于花、桃李盛也。我后一日之澤、萬機

之餘、曲水雖遙、遺塵雖絶、書巴字而知地勢、思魏文、以翫風流、蓋

志之所之。謹上小序。花時天似醉序。菅。

【語釋】 ○春之暮月 春の暮れる月で、陰曆の三月。○月之三朝 月の初三日をいふ。以上二句は三月三日のことをいつた。○天醉于花 桃李盛に開いて、天の色も映じて紅なのは、酔うて赤くなつたやうである。○一日之澤 君の御恩澤で、今日の宴を賜はるをいふ。○萬機 天皇の政治をみそなはずことの多端なのをいふ。○曲水 曲水宴。三月三日、曲折した緩い水流に臨んで、詩賦を作つて宴すること。支那では周公の時、わが邦では顯宗天皇の御代に始まるといふ。○遺塵雖絶 遺塵は遺跡といふに同じ。支那では魏の文帝以來、この事絶えたので、遺塵絶といつた。○書巴字 巴の字は水の象で、渦卷の形より出た。水の渦を成すは

即ち流水の曲折した所であるから、巴字を書いて、周代に曲水宴のあつたところの地勢を知るとの意。○思魏文 魏の文帝の時、曲水宴のあつたのを思つて、その遺跡を慕ふとの意。

菅丞相 菅原道真。前出。

煙霞遠近應同戶、桃李淺深似勸盃。同題詩。菅丞相。

【語釋】 ○煙霞 煙は霧などの水蒸氣。霞は空にたつ赤氣。○同戶 同じ程の酒量。支那では庶民を貧富によつて上戸・下戸に分ち、上戸は婚禮に酒瓶を多く供へ、下戸は少く供へることから轉じて、酒量の高いものを上戸、低いものを下戸といふ。

【大意】 遠近の空一面に霞みこめたのは、上戸も下戸も均しく酒に酔うて一様に見ゆるが如く、桃李の淡く濃く咲いた花の色は、酒盃を勸めて酔うたのに似てゐる。

水成巴字初三日、源起周年後幾霜。榮流送羽觴。菅。

【大意】 三月初三日、流の巴の字を成してゐる處に臨んで、曲水宴を行ふ。その源は周の時代より起つて、その後幾年を経たことであらう。

礙石遲來心竊待、牽流過手先遮。同上。菅雅規。

【大意】 曲水宴は、上流から盃を流して、我が前を過ぎない間に詩を作つて、さてその盃を取

菅雅規 菅原氏。道真の孫。從四位上、山城守、左少辨。



つて酒を飲む遊である。それで、盃が石に支へられなどして、流れて來ることが遅いと、既に詩の出來た人は早く流れて來ればよいと待つてゐるし、又盃が流に引かれて早くわが前を過ぐると、まだ詩の出來てない人は、手でまづ盃を遮り止めておいて詩を作る。

桃

夜雨偷濕曾波之眼新嬌。曉風緩吹不言之唇先咲。

桃始花詩序。紀納言。

【大意】 桃の咲き始めたさまは、昨夜の春雨に潤されては、恰も美人の二重まぶたの眼が新に媚を呈するが如く、曉の風緩やかに吹きくるにつれては、美人の不言の唇が笑み綻びるやうである。

みちとせになるてふ桃のことしより花さく春にあふぞ嬉しき。 躬恒

【語釋】 ○みちとせになるてふ桃 西王母が漢武帝に桃を獻じ、この桃は三千年に一度實るといつた事が列仙傳にある。

【大意】 宿の主を仙家の桃に比して祝うたのである。

暮春

拂水柳花千萬點。隔樓鶯舌兩三聲。

過元魏志襄陽樓二口占。元稹

【語釋】 ○柳花 色白く絮の如く飛ぶ。○鶯舌 鶯のさへづり。

低翅沙鷗潮落曉。亂絲野馬草深春。

晚春遊松山館。曾丞相

【語釋】 ○沙鷗 砂上に遊ぶ鷗。○野馬 陽炎のこと。遊絲に同じい。野馬とは、その早いこと。野に放つた馬の奔るやうなればいふ。

人無更少時須惜。年不常春酒莫空。

春光細賦。小野篁

劉白若知今日好。應言此處不言何。

深春好。源順

【語釋】 ○劉白 劉禹錫と白居易。

【大意】 劉禹錫と白居易との贈答の詩の第一首の初句に「何處春深好」とあるのをかりて詠じたので、即ちこの春興に乗じた詩筵の面白さを知らしめたならば、劉白の二人も、春興の最も好い處は、この詩席であるといつて、何れの處かなどとは言はないであらうとの意。

いたづらにすぐる月日はおほけれど花みてくらす春ぞ少なき。 興風

源順 大納言定の曾孫。始めて和歌所に萬葉集の訓詁に従ひ、又天曆五年、大中臣能宣等と後撰集を撰した。梨壺五人の一人。又和名類聚抄二十卷を著した。官能登守に至る。永觀元年卒した。

興風 藤原氏。參議濱成の孫。



三月盡 ○三月の盡くる日のこと。

留春春不駐、春歸人寂寞。厭風風不定、風起花蕭索。  
落花古調詩。

【大意】 春を留めようとすれど、春はいつしか過ぎ去つて、花を賞する人影もなくして物寂しく、又風を厭はしく思へど、風は思のままに静まらず、強風吹き起ると共に、花は散りはてて寂しく詰らない。

竹院君閑銷永日。花亭我醉送殘春。  
皇甫賓客。

【大意】 君は竹の茂つた屋敷の静かな處に、のどかに春の永い日を暮し、我は花の咲いた家の騒がしい中に酔うて、暮れ残つた春を送る。

惆悵春歸留不得。紫藤花下漸黃昏。  
題慈恩寺。

【大意】 春の歸り去るを悲しみ愁ふれど、ひき留める術もないまゝに、暮春を時と咲く藤の花蔭に、春の名残を惜しんで黄昏に至つた。

送春不用動舟車。唯別殘鶯與落花。  
送春。管丞相。

【語釋】 ○殘鶯 春に後れた鶯。次の二句と合はせた七言絶句である。

若使韶光知我意。今宵旅宿在詩家。  
管

【語釋】 ○韶光 春光に同じい。韶は美しいの意。

【大意】 春は人でないから、その別を送るに舟や車を用ゐる面倒なく、唯殘鶯と落花とに別るのみだ。然し若し春光に自分が名残を惜しむ情を知らせたならば、春も心あつて、その歸りぎはの今夜の宿は、我が詩の家であらう。

留春不用關城固。花落隨風鳥入雲。  
三月盡。尊敬。

【語釋】 ○關城 關所と城。城は土石で障壁に築きめぐらした處。

【大意】 春は人でないから、關城の固めも、これを留むる役には立たない。されば、花は風の誘ふまに散り、花に鳴いた鳥も雲間に入つて、春は跡方もなくなる。

今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかけかは。  
躬恒

【大意】 平生でさへも、花の木蔭は立ち去り難いものを、まして今日限りの春と思へば、一層名残が惜しまれて、容易に立ち去られる花の下蔭かは、なか／＼立ち去り難い。

尊敬 橋在列。前出。



花もみなちりぬる宿は行く春のふる里とこそなりぬべらなれ。 貫之

【語釋】 ○ふる里 花の散つた跡を、行く春の故郷といつた。○べらなり 古今集時代に行はれた特殊語で「べかり」といふに同じい。

【大意】 すべて故郷は住み荒されて寂しいものであるが、花も皆散つてしまつた我が宿は、ゆく春の故郷となりさうで、これからいかに寂しいことであらう。

またも來む時ぞと思へど頼まれぬわが身にしあれば惜しき春哉。 貫之

【大意】 春は復も來るべき季節であると思へど、壽命は當てにならぬ我が身だから、今日暮れゆく春がいよゝ／＼惜しく思はれるよ。

閏三月

○閏 太陰曆は一年を三百六十日として、これを十二箇月に分ち、餘の時日を生ずるのを積みて一月として、一年に加へて十三箇月とする、これを閏月といふ。

今年閏在春三月

剩見金陵一月花

陸侍郎 淮南李中丞行軍

【大意】 今年春に閏月があつて、春が長いので、君は名に負ふ金陵(今の南京)にゆかれて、餘計にかの地の名花を看賞することが出來、さぞ満足であらう。

歸谿歌鶯更逗留於孤雲之路 辭林舞蝶還翩翩於一月之

陸侍郎傳未詳。

花

今年又有春序。源順

【大意】 閏月の春のあるを聞いて、谿の古巢に歸らうとしてゐた鶯も、更に暫くの間、一片の雲路にとゞまつて歌ひ、林を辭して歸らうとしてゐた蝶も、再び一箇月の間、花間にひらひらと戯れ舞ふ。

花悔歸根無益悔 鳥期入谷定延期

清原滋藤

【大意】 閏月のあることを知つて、花は根もとに早く散つたことを悔ゆれど、今更益なく、鳥は、谷に歸らうと思つてゐても、大かた歸る期を延ばすであらう。

さくら花春くは、れる年だにも人のこゝろに飽かれやはする。 伊勢

【語釋】 ○春くは、れる 閏月があつて、春が常の年より一月多いのをいふ。

【大意】 常の年よりは春が殖えた閏年でも、どうして櫻の花が人に飽かれようぞ、飽かれはすまい。

鶯

鷄既鳴忠臣待旦

鶯未出遺賢在谷

鳳爲王賦。賈島

春

清原滋藤 天慶の亂に、征夷使軍監となつた。

伊勢 伊勢守藤原繼蔭の女。七條后の宮女で、天慶二年歿した。

賈島 唐の人。初僧となつたが、後韓愈の知を得、還俗して進士に擧げられ、會昌の初卒した、年五十六。



【語釋】○遺賢 在野の賢者。賢者は改正しからざれば山野に隠れ、改正しければ出でて朝廷に仕へる。○在谷 在野といふべきを、鶯によつて在谷といつたのである。○鳳爲王 鳳は鳳凰。格物論に「羽蟲三百六十、而鳳凰爲之長。」

【大意】 鳳凰を諸鳥の王とすれば、鶏の曉を告げるのは、恰も忠實なる臣下が、朝夙く起き出で、出仕の時の來るのを待つが如く、鶯のまだ出て來ないで谷に籠つてゐるのは、賢者の野に在つて出で仕へざるやうである。

謝觀 唐の人。

誰家碧樹鶯鳴、而羅幕猶垂。幾處花堂夢覺、而珠簾未卷。

謝觀 或張讀 春曉鶯 賦。

【大意】 春の曉方、誰が住む家か、緑の木に鶯が鳴いてゐるけれど、家の人は眼が醒めずして、羅の帳はまだ垂れ下つてゐる。又幾ヶ處もの立派な家々では夢はさめながら、床のうちで鶯を聞いて、珠の簾もまだ捲き上げない。

咽霧山鶯啼尚少、穿砂蘆笋葉纔分。

早春尋李校書 元稹

【語釋】 ○咽霧 霧の中に啼く聲のかすかなのをいふ。○蘆笋 蘆の芽。

【大意】 春がまだ浅いので、霧に籠つて聞える山陰の鶯は、啼く聲まだ少なく、汀の砂をおこして萌え出た蘆の芽は、やつと二葉を分つたのみである。

臺頭有酒鶯呼客、水面無塵風洗池。

和思黯題南莊 白

【大意】 臺のほとりには美酒の設があるから、それを勧めようと、鶯は聲をあげて客を呼び、水面には塵がなくて清く、風が池を洗うてゐる。

鶯聲誘引來花下、草色拘留坐水邊。

春江 白

【大意】 時としては、鶯の聲の面白いのに誘はれて、花の下に來り、或は、草の色の美しいのに引き留められて、水邊に坐する。

感同類於相求、離鴻去雁之應春轉。會異氣而終混、龍吟魚躍之伴曉啼。

鳥聲韻管絃一序 卷三品

【語釋】 ○感同類於相求 易經に「子曰同聲相應、同氣相求」。○離鴻去雁 春歸り去る雁の意で、春の曲とする。○春轉 鶯の春朝に啼くをいふ。○龍吟 笛のこと。笛の音が龍の鳴く音に似てゐるからいふと。○魚躍 琴をいふ。列子に「瓠巴鼓琴、而鳥舞魚躍」とある。

【大意】 同類相感するは天地の理であるから、殿上に奏する離鴻去雁の曲は、鳥の名である上に春の曲なので、林中の鶯の轉りと相應じてあはれに聞え、琴笛の一名となつた龍吟魚躍は名からいへば鶯とは異類なれど、發して聲調となつては固より同種であるから、鶯の曉の聲



に伴なひ、相和して面白い。

燕姫之袖暫收猜繚亂於舊拍。周郎之簪頻動顧間關於新花。

同題。昔三品

【語釋】○燕姫 前漢成帝の后趙飛燕のこと。舞の名手。○舊拍 二説ある。一は拍を樂器と見て、舊い拍が朽ちて、かう亂るゝかと疑ふ意とし、一は拍は調の拍子と見て、舊い拍子で忘れたのかと疑ふ意とする。○周郎 三國吳の名將、周瑜のこと。音樂に精しく、演奏に誤があると振返るので、その簪が動いた。○開關 鳥聲の高低屈曲して面白く聞えること。○新花 梅の初花。

【大意】樂の音は風にさへられて調はず、鶯の聲は露に咽んで亂るゝに至つて、昔の趙飛燕のやうな上手な舞妓は暫く舞をやめて、そのもつれ亂れたのを、舊拍のためかと疑ひ、昔の周瑜のやうに音律を解する人達は、簪の頻りに動くまで、鶯の節の誤を氣にかけて、その囀る聲を梅花の上にふりかへつて見る。

新路如今穿宿雪。舊巢爲後屬春雲。

鶯出谷。昔丞相

【大意】鶯の始めて谷間より出て來るその新路は、只今殘雪を穿つてつけ、古巢は春くれて再び歸る時のために、春の雲に托しておく。

西樓月落花間曲。中殿燈殘竹裏音。

宮鶯囀。曉光一詩。昔三品

【語釋】○西樓 霽景樓の一名。宮中豐樂院の西北。○花間曲 曲は聲音に曲節あるをいふ。○中殿 清涼殿をいふ。○竹裏 竹は清涼殿の前にある吳竹漢竹をいふ。【大意】宮中の曉方に、鶯は、月影の西に傾くと、そこにある花の間に節面白く鳴き、燈火が中殿にあけ残るとき、殿前の竹村のうちに聲を立てる。

素性 僧正遍昭の子。清和天皇の御代、右近將監となつたが、後父の勸により出家した。

素性

麗景殿女御 莊子女王。村上天皇の女御、寛弘五年薨せられた、年七十八。

麗景殿女御

中務 式部卿敦慶親王の御女。母は伊勢である。

【語釋】○あらたまの年・月・春などの枕詞。あたらたまの年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯のこゑ。淺みどり春たつ空にうぐひすの初こゑ待たぬ人はあらしな。

【語釋】○淺みどり 多く春の空にかけていひ、又すぐに春の空の事にもいふ。鶯のこゑなかりせばゆき消えぬやま里いかで春を知らまし。

霞

春



霞光曙後殷於火。草色晴來嬾似烟。

【語釋】○霞光云々 霞はその色が赤いので火に譬へた。○嬾似烟 若草の緑の色の烟りこめたのをいふ。嬾は嫩の俗字。

【大意】夜あけて、日光の雲に映じた（即ち霞）光は、火よりも赤く、又晴れ渡つた日、地上の草の色は、遠く望めば煙よりもぼつとして若々しい。

鑽沙草只三分許。跨樹霞纔半段餘。

【語釋】○鑽沙草 草の沙を穿つて萌え出るをいふ。○跨樹霞 霞の樹杪にかゝつて遠く連なつてゐるをいふ。○三分許・半段餘 共に僅少の意。早春で、草もまだ生長せず、霞もまだ多くない状である。

きのふこそ年はくれしか春がすみ春日の山にはや立ちにけり。

【語釋】○くれしか 「しか」は過去の助動詞。○春日の山 今の奈良市春日神社の背後の山。

【大意】昨日やつと年が暮れたと思つたのに、早もう春日山には霞が立ちそめて、春めいて来たよ。

春がすみ立てるやいづこみよし野の吉野の山に雪はふりつ。

赤人

【大意】春霞の立つてゐるのは一體何處であらうか、自分が住んでゐるこの吉野山では、まだ毎日雪が降り／＼して、とても春とは見えない。

朝日さす峯のしら雪むらきえて春のかすみはたなびきにけり。

兼盛

【語釋】○むらきえ 處々まばらに消えるをいふ。

雨

或垂花下潜増墨子之悲。時舞髮間暗動潘郎之思。

或云都在中

【語釋】○墨子之悲 墨子が嘗て練絲を見て、その黄にも黒にも染められるのを悲しんで泣いたといふことが、淮南子に出てゐる。墨子は名は翟。周代の人。○潘郎之思 潘岳の秋興賦序に「余春秋三十有三、始見三二毛」とある。二毛は黒髪と白髪である。潘岳は字は安仁。晋の人。美男子で才藻あり、中書令となつた。

【大意】春雨は時に花の下に滴つて、白い絲のやうなので、練絲を見て泣いた墨子の悲しみをまし、又時に髪髪の間降りかゝつて、白髪をやうに見え、人知れず二毛を歎じた潘郎の物思を動かす。

江以言 大江氏。晋人の玄孫。文章博士式部大輔。寛弘七年卒した。以言はコレトキとよむ。



李嶠 唐の人。  
景龍中、守兵部  
尚書同中書門下  
三品となつた。

長樂鐘聲花外盡。龍池柳色雨中深。

闕下贈閻舍人。李嶠

【語釋】○長樂 長樂宮。前漢の宮殿で長安に在つた。○龍池 唐の興慶宮にあつた池。

【大意】 曉を告げる長樂宮の鐘の聲は遠く響いて、花のあたりに消え、龍池のあたりの柳の色は、雨の中にいよ／＼濃やかである。

養得自爲花父母。洗來寧辨藥君臣。

仙家春雨。紀納言

【語釋】○藥君臣 神農本草に「上藥爲君、中藥爲臣、下藥爲佐使」とある。

【大意】 花の開くのは春雨の養ひによるのであるから、雨は花の父母である。又草の萌え出るのは春雨の潤ひによるものなれど、平等普遍に降つて來て、雨は君藥・臣藥の區別をするものか。

花新開日初陽潤。鳥老歸時薄暮陰。

春色雨中盡。營三品

【語釋】○初陽 朝日をいふ。○鳥老 晩春の鶯をいふ。○薄暮 日晩の迫つた時。

斜脚暖風先扇處。暗聲朝日未晴程。

微雨自東來。慶保胤

【大意】 暖風・朝日は共に東より來る意を表し、斜にふる雨の脚は暖かな東風の吹きあふあたりで、目に見えない雨は、朝日のまだ上らない内だ。

さくら狩雨はふりきぬおなじくは濡るとも花の蔭にかくれむ。

讀人不知

【語釋】○さくら狩 櫻の花を探り観ること。

あを柳の枝にかゝれるはる雨は絲もてぬける玉かとぞ見る。

伊勢

梅 附紅梅

白片落梅浮澗水。黃梢新柳出城牆。

春至香山寺。白居易

【語釋】○澗水 溪水に同じ。○城牆 支那の都市では、高い築牆を回らして外廓とする。

【大意】 梅の花は已に老いて、その白い花びらは、谷川に浮んで流れ、柳の梢は黄ばんで、その若枝が、高く城牆の上にさし出てる。

梅花帶雪飛琴上。柳色和煙入酒中。

早春初晴野宴。章孝標

【語釋】○帶雪飛琴上 淮南子にある、師曠が白雪之音を奏でると風雨が起つたといふ故事。【大意】 早春の候、野外に宴を張つて、琴を弄び、杯をあげると、亂れ散る梅花は雪を混へて

章孝標 字は道正。唐の人。



琴上に飛び、たをやかな柳の色は、野煙と共に、杯の中に映る。上句は師曠、下句は五柳先生  
の故事を踏んだのである。五柳先生のこととは、この頁の陶門柳を見よ。

村上天皇 天曆  
のみかどと申し  
上げる。

漸薰臘雪新封裏 儉綻春風未扇先

寒梅結早花  
村上御製

【大意】 この梅は、臘月(十二月の一名)新に降つた雪の封じこめたうちから、漸く薫り、春風  
のまだ吹き出さぬ前に綻びはじめた。

青絲繆出陶門柳 白玉裝成廈嶺梅

尋春花  
後江相公、或云菅三品

【語釋】 ○繆出 柳の風に靡くさまの、絲をくるに似てゐるのをいふ。繆は繰の俗字。○陶門  
柳 陶潜の門前の柳。陶潜は晉の陶淵明のこと。家の前に五本の柳があつたので、五柳先生  
と號し、自ら五柳先生傳を著した。○廈嶺 支那廣州なる大廈嶺のこと。梅の名所。

【大意】 家々の柳が芽ぐんで、緑の絲をくり出したのは、陶門の柳と見え、丘や山の梅花の咲  
き満ちて、恰も白玉を以て装うたのは、大廈嶺の梅と見える。

五嶺蒼々雲往來 但憐大廈萬株梅

同題  
菅三品

【語釋】 五嶺 支那廣州にある大廈嶺・始安嶺・臨賀嶺・桂陽嶺・楊陽嶺をいふ。次の句と一  
首の絶句。

誰言春色從東到 露暖南枝花始開

題同上

【大意】 五嶺は青々として雲の往き來するのみなれど、大廈嶺は、萬株の梅が咲き亂れて、と  
りわけ愛賞するに堪へた。日當りのよい南枝は露暖かで、花がまづ咲くから、春は南から來  
るやうに思はれるのに、昔誰が春は東方より到ると言ひ出したのであらう。

煙添柳色看猶淺 鳥踏梅花落已頻

菅三品

いにし年ねこじてうゑし我がやどの若木の梅は花さきにけり。 安倍廣庭

【語釋】 ○いにし年 去にし年。○ねこじ 草木を根ながら抜き取ること。

わがせこに見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降り、ば。 赤人

【語釋】 ○せこ 女が男を親しんでいふ詞であるが、轉じては、男どち、親しい間柄にもいふ。  
○降り、ば 降りてあればの約。

【大意】 庭前の白梅を、親しい人に見せようと思つてゐたのに、寒さが芽えかへり、雪が降り  
かゝつたので、どれが雪やら花やら解らぬやうになつて、かねての心構もむだになつた。

安倍廣庭 左大  
臣御主人の男。  
從二位中納言。  
天平四年卒し  
た。

後江相公 大江  
朝綱。晉人の孫。  
正四位下參議。  
天徳元年薨じ  
た。祖父晉人參  
議となり、江相  
公と稱せられた  
ので、朝綱を後  
江相公と稱し  
た。



香をとめてたれをらざらむ梅の花あやなし霞立ちなくしそ。 躬恒

【大意】 梅花を惜しんで、霞は立ち隠すのであらうが、香はとても隠せないから、誰だつてその香を尋ね求めて手折らぬものはなからう。益體もない、霞よ、初から花を立ち隠すな。

紅梅

梅含雞舌兼紅氣。江弄瓊花帶碧文。早春尋李校書元稹

【語釋】 ○含雞舌 雞舌は香の名。梅花の香氣高いのを雞舌香に譬へた。○弄瓊花 瓊は光彩ある玉の義。それに水上の泡或は波の花をたとへた。○碧文 碧の波文。

【大意】 梅は何ともいへない香を含んで、その上紅の色を帯び、江は波の花を弄んで、しかも緑の波紋を作つてゐる。

淺紅嬋娟仙方之雪魄色。濃香芬郁妓爐之烟讓薰。總上梅正開詩之序。橋正通

【語釋】 ○仙方之雪 漢武内傳に「仙家上藥有玄霜絳雪」とある。絳は紅。

【大意】 薄紅梅の美しい色には、彼の仙家の上藥といふ絳雪も顔色なく、その濃い芳ばしい香には、妓女が焚く香爐の烟も、その香を通るであらう。

橋正通 氏公六世の孫。正四位下少納言。久しく志を得ず、遂に遁世した。

有色易分殘雪底。無情難辨夕陽中。賦庭前紅梅。前中書王兼明

【大意】 庭前の紅梅は、殘雪の中に埋れても、色が違ふから分ち知り易い。しかし、その夕日の影に輝く時は、色が同じいから、風趣を解する者でなくては、どれが梅とも辨へがたいであらう。

仙白風生空簸雪。野爐火暖未揚烟。紅白梅花。紀齊名

【語釋】 ○仙白 仙家で藥を搗く白。○雪 仙藥玄霜丹の白きをいつて、白梅を譬へた。

【大意】 白梅の、風に吹かれて四散するさまは、仙人が玄霜丹を臼つく時、風が起つてその粉末を吹き散らす如く、また紅梅の盛に咲き出たさまは、野外の家の爐に、火が熾におこつて、まだ烟を立てぬに似てゐる。

君ならでたれにか見せむ梅の花いろをも香をも知る人ぞ知る。 友則

【大意】 今この折つた梅の花の、いふにいはれぬよい色と、よい香あるにつけて、その風趣をよく知つて居られる貴君をおいて、贈るべき人は他にはない。

いろ香をば思ひもいれず梅の花常ならぬ世によそへてぞ見る。 花山院  
【大意】 梅の花のめでたい色香も、自分は世人と違つて、思ひ入れて賞翫もせず、やがて色あ

春

前中書王兼明 醍醐天皇の皇子兼明親王。初姓を賜うて源朝臣と稱し、累進して左大臣に至る。後親王となり、中務卿に任ぜられ、永延元年薨せられた。世に前中書王と稱した。後中書王具平親王に對するのである。中書は中務の唐名。

友則 紀氏。貫之が姪。六位大内記。古今集撰者の一人。延喜五年に歿した。花山院 花山天皇の御事。



せ香消えると見るから、佛の世は皆無常と教へ給うたことわりも思ひ合はされて、却つてその世相に擬へて観する。

柳

林鶯何處吟箏柱。 墻柳誰家曝麴塵。  
天宮閣早春。白

【語釋】 ○箏柱 箏の絃を立てる柱。ことぢ。箏は樂器の名。

【大意】 林中の鶯は嬌音を弄し、ちやうど、何處かで箏を弾するやうに聞え、垣根の柳は萌えて出て風に靡くさま、誰の家でか、萌黄色の絲を曝すやうに見える。

漸欲拂他騎馬客。 未多遮得上樓人。  
喜小樓西新柳抽條。白

【大意】 先年植ゑた柳は、枝が漸く延びて、馬に騎つた人の頭を拂はうとする位で、その枝さのみ茂つてゐないので、まだ樓に上つて來る人までは遮り得ない。

巫女廟花紅似粉。 昭君村柳翠於眉。  
題峽中石上。白

【語釋】 ○巫女廟 巫山の神女を祀つた靈屋。楚の懷王が高唐に遊び、夢に巫山の神女に會したといふ故事。巫山は支那四川省にある。○粉 紅粉。○昭君村 王昭君の生れた村。支那

湖北省荊州府にあるといふ。昭君は前漢元帝の宮人で、後に匈奴に嫁した。

誠知老去風情少。 見此爭無一句詩。  
此詩絕句也。與前一首。

【大意】 上と一聯の絶句である。峽中に来て、その地の景物を見るに、巫女廟の花は、美人の紅粉よりも紅に、昭君村の柳は、美人の肩よりも色濃やかである。されば老衰して世間の興趣を覺えることの少い我が身も、この地の古來の歴史と、現在の景勝とに對して、どうして一句の詩なくしてすまされようか。

大庾嶺之梅早落誰問粉粧。 匡廬山之杏未開豈趁紅艷。  
内宴序。

停盃看柳色。紀納言。

【語釋】 ○匡廬山 支那江西省にある。略して廬山といふ。○紅艷 紅料を用ゐて粧ふをいふ。

【大意】 大庾嶺の梅は已に散り失せたから、誰かその白粉をつけたやうな色をも問はうぞ。廬山の杏花はまだ開かぬから、どうして紅艷な風情を尋ね返はうぞ。今は唯柳の翠色をのみ翫ぶべきであるとの意。

雲擎紅鏡扶桑日。 春嫋黃珠懶柳風。  
同達音。

【語釋】 ○擎紅鏡 紅鏡は朝日の昇るさまの、紅の鏡に似たるをいふ。擎はさし上ぐ。さし上げ



ること。○扶桑 淮南子に「日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、是謂晨明」とあり、註に「扶桑、東方野也」とある。又わが國の一名とする。○翳黃珠 翳は柳の若枝の風にたわむ趣をいひ、黃珠は柳の花の萌え出たのを譬へた。

【大意】 晴れた春の空に、扶桑の旭日の雲を衝いて立ち昇るさまは、恰も大きな紅の鏡をさし上げたのに似、又なよ／＼とした若い柳枝の風に靡くさまは、恰も黄色の聯珠をたわめたやうである。

嵇宅迎晴庭月暗。陸池逐日水烟深。

柳影繁初合詩。後中書王具平

【語釋】 ○嵇宅 嵇康の家。邸内に一株の柳があつて、甚だ茂つてゐたといふ。嵇康は晉の人。所謂竹林七賢の一人。○陸池 陸慧曉の池。陸慧曉は南齊の人。隣家との間に池があり、その水が異味があつたので、常に酌んで飲んだといふ。

【大意】 柳が漸く茂りゆくにつれ、嵇康の家は、晴れた空にも月影庭の面を照らすことなく、陸慧曉が池は、日ましに水煙が濃やかになつてゆく。

後中書王具平具平親王。村上天皇の皇子。二品中務卿。世人前中書王兼明親王と並べ稱して後中書王といつた。寛弘六年薨去。

潭心月泛交枝桂。岸口風來混葉蘋。

垂柳拂綠水一詩。晉三品

【語釋】 ○桂 月中にあるといふ桂。○蘋 大きな浮草。

【大意】 枝垂柳の水面をなぶる時、その潭のまん中に、月の影が映れば、月中の桂と枝を交すが如く、また岸の額にそよ吹く風が来れば、水上の浮草とその葉を混する。

青やぎの絲よりかくる春しもぞみだれて花はほころびにける。 貫之

【語釋】 ○春しもぞ ぞの辭の力強さに、却つての意を生ずる。

【大意】 絲をより合はせては、物の綻びも縫ひ合はすべき筈なのに、青柳の枝が緑の絲を繰りかけてゐる春の頃は、却つて木々の梢の花が綻び初めて、此處にも彼處にも咲き亂れた。

青柳のまゆにこもれる絲なれば春のくるにぞいろまさりける。 兼輔

【語釋】 ○まゆにこもれる絲 まゆは蠶の繭。まゆから絲をくり出すのを本に、柳の芽は蠶の繭の形によく似て、それから萌え出て、緑の絲と見えるやうになるからいふ。○春のくる

くるは、來るに、絲を繰る意を兼ねた。

【大意】 緑の絲とも見える柳の枝は、もと蠶のまゆのやうな柳の芽の中に籠つてゐるので、春の繰るといふ來るにつれて、いよ／＼そのたけを延ばし、その色を増し加へる。

花 附落花

花明上苑輕軒馳九陌之塵。猿叫空山斜月瑩千巖之路。 張讀

張讀 唐の人。傳未詳。



【語釋】 ○上苑 上林苑の略。前漢時代の禁苑の名。○輕軒 輕くて奔ることの速い車。○九陌 九條の街路。○空山 木の葉枯れ落ちて、物さびしい山。

【大意】 上の二句は、上林苑の花の盛な頃、花見の士大夫が、輕い車を驅つて、都の街の塵を起して行き通ふと、盛春の長閑なさまをいひ、下の二句は、木の葉落ち盡してさびしい山中に叫ぶ猿の聲がいと哀れなのに、西に傾いた月の光が、重疊した巖石の面を照して、磨いたやうであると、清秋の閑寂なさまをいつた。

池色溶々藍染水。花光焰々火燒春。

早春招張賓客。

【語釋】 ○溶々 水のなみ／＼と盛なこと。

遙見人家花便入。

不論貴賤與親疎。

尋春題諸家園林。

【大意】 遙かに人家を見て、その家に花があれば、立ち寄つて見る。その家の貴いのや賤しいのや、自分と親しいか親しくないか、そんな事には一切かまはない。

瑩日瑩風高低千顆萬顆之玉。染枝染浪表裏一入再入之紅。

花光水上浮序。昔三品。

【語釋】 ○瑩日瑩風 花を玉に比して、風日に瑩かるといつた。○千顆萬顆 その數の多いのをいふ。顆は丸く小さな物を數へるにいふ。○表裏 表は枝上の花、裏は水に映じた花。○一入再入 一しほ二しほの意。しほは、物を染料に入れる度數をいふ。

【大意】 樹々の花、日光に風にみがかれて、高く枝上にあるもの、低く水面に映つたものが、千顆萬顆の白玉と見え、或は枝と浪を染めて、表は濃く裏は薄い紅の絹と見える。

誰謂水無心濃艷臨兮波變色。誰謂花不語輕漾激兮影動唇。

同上。

【語釋】 ○水無心・花不語 白氏文集に「落花不語空辭樹、流水無心自入池」とあるので「誰謂」といつたのである。○輕漾 さゝやかな浪。

【大意】 これは前句の續きで、水は無心のもので誰がいつたぞ、心があるからこそ、色濃やかに艶な花の映る時、忽ち波の色を變するのである。又花は物いはぬと誰がいつたぞ、物いへばこそ、小波のたつ時、これに映つた影がゆらいで、花の唇を動かすのである。

欲謂之水則漢女施粉之鏡清瑩。欲謂之花亦蜀人濯文之錦

粲爛。同題序。



【語釋】 ○漢女 漢水の遊女。○蜀人濯文之錦 蜀江の錦とて、蜀(今四川省)の成都の名産。文は、あやで、織模様。つまり濯文は錦を洗ふこと。

【大意】 花光水上に映じて、波靜かな時は水にして水にあらず、影亂れる時は花にして花にあらず、若し強ひてこれを水といはうとすれば、まさに漢女がこれに對して紅粉を施すところの清く磨いた鏡であり、又これを花といはうとすれば、蜀人が蜀江に洗ふところの彩文の燦爛たる錦である。

織ル自ニ何絲唯暮雨。裁無ニ定ニ樣任春風。花開如散錦。昔三品。

【語釋】 ○唯暮雨 夕暮の雨を絲として織つたとの意。○定樣 一定した樣式。  
【大意】 花を錦と見て、雨を絲として織り、風を缺として裁つと作つた。

花飛如錦幾濃粧。織者春風未疊箱。同。源英明

始識春風機上巧。非唯織色織芬芳。同上。

【大意】 前の句と合はせて絶句である。亂れ飛ぶ花の美しさは恰も錦で、どれだけの濃やかな粧を施したものか。さてこの錦を織つたものは春風であるが、その錦をまだ箱の内にも疊み入れないで、織りかけたまゝと見える。この花の錦を見て、始めて春風の機織に巧みであることを知つた。それは單に花の美しい色を織り出すだけでなく、芳ばしい香氣までも、その

源英明 齊世親  
王の御子、母は  
菅原道眞の女。  
四位左中將。

源相規 從五位  
上攝津守。

業平 在原氏。  
阿保親王の御  
子。天長中、兄  
行平と共に在原  
姓を賜うた。世  
に在五中將と稱  
した。和歌の名  
手。元慶四年卒  
した。

うちに織りこめてゐるからである。

眼貧蜀郡裁殘錦。耳倦秦城調盡箏。花少驚稀。源相規

【語釋】 ○眼貧 春の暮れるまゝに、眼に花を見ることの乏しくなつたのをいふ。○蜀郡 今の四川省の地。○秦城調盡箏 文選註に「秦多善箏者」とある。  
【大意】 春の暮れるにつれて、蜀郡の錦と見えた花は散つて、わづかにその裁ち残しばかり留り、秦城の箏と聞かれた鶯は稀になつて、耳に聞くのも物うくなつたのは、その調べ盡した餘聲である。

よの中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし。業平

【語釋】 ○たえて 絶無の意。○春の心 春の人心。

わが宿の花見がてらにくる人は散りなむのちぞ戀しかるべき。躬恒

【大意】 わが宿に花見がてらに尋ねて來られた貴方は、自分を訪ふのが本意でないから、花が散つてしまへば、また元のやうに無沙汰されるであらう。さらば、その時になつては、定めて貴方を戀しう思ふことであらう。

見てのみや人にかたらむ山ざくら手ごとにをりて家づとにせむ。素性



【大意】 誘ひ合はせて花見に來たに、このまゝ歸つて、面白かつたことを人に話すだけでは物足りまい。銘々に山櫻の枝を折り、家へのみやげとして、この花の美しいところを見せよう。

落花

落花不語空辭樹。流水無心自入池。過元家贖信宅。

【大意】 故人の舊宅を過ぐれば、折しも春の末の事とて、落花は舊事を語ることもなしに、徒に梢より散り、庭中に流るゝ水も何の心もなく、昔のまゝに自ら流れて池に入る。

朝踏落花相伴出。暮隨飛鳥一時歸。春來頻與李二賓客、郭外同遊、因贈長句一白。

春花面々闖入酣暢之筵。晚鶯聲々豫參講誦之座。春日侍前、西都督大王、讀史記序。後江相公。

【語釋】 ○面々 一々に同じ。○闖入 亂れ入る。○酣暢 酒に心を暢べ樂む。○豫參 參與に同じい。

【大意】 史記講演の竟宴に、落花はおのゝ、お客顔して酒宴の席に亂入し、晚春の鶯は聲々に、文士氣取で講誦の席に參與する。

落花狼藉風狂後。啼鳥龍鍾雨打時。惜後春。後江相公。

【語釋】 ○狼藉 亂れ散らかること。○龍鍾 つかれ衰へること。しほくとすること。

離閣鳳翎憑檻舞。下樓娃袖願階飛。落花還繞樹詩。管三品。

【語釋】 ○鳳翎 鳳凰の羽。○娃袖 舞姫の翻す袖。娃は美女。

【大意】 落花が木の間に翻るさまは、恰も一たび閣を離れて空に上つた風が、再び檻に憑つて舞ふやうであり、又樓を下りた美女が階をふり返つて、重ねて袖を翻すに似てゐる。

さくらちる木の下風はさむからで空に知られぬ雪ぞふりける。 貫之

【語釋】 ○空に知られぬ雪 落花をいつた。晴れた春の空に降るのであるから、「さむからで」とも「空に知られぬ」ともいつた。

とのもりのとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝きよめすな。 公忠

【語釋】 ○とのもりのとものみやつこ 殿守の伴の御奴。主殿寮の下部をいつた。

【大意】 禁中の櫻紫宸殿前。左近の櫻。の庭上に散つてゐるのが餘り面白い風情だから、主殿寮の下部たちよ、この春に限つて、禁庭の朝掃除を止めて、思ふ存分に賞翫させてくれ。

公忠 源氏。光孝天皇の御孫。右大辨となり、滋野井辨と稱した。



躑躅

晚藥尙開紅躑躅。秋房初結白芙蓉。

題元十八溪居。白。

【語釋】○晚藥 おくれて咲く花。藥は花しべ。○秋房 秋の花房。○白芙蓉 白蓮の花。

【大意】元十八が住ひは谷間であるから、初夏の花である躑躅が紅になほ開き、又早く秋氣を催して蓮花が白い花房をつける。

夜遊人欲尋來把。寒食家應折得驚。

山石榴燭似火。源順。

【語釋】○寒食 荆楚歲時記に「去冬節一百五日、即有疾風甚雨、謂之寒食、禁火三日、造餲大麥粥。」

【大意】躑躅の花があかいので、誤つてまことの火と思ひ、夜遊の人は、尋ね把つて燭としようとし、火を斷つた寒食の家では、火種に折つては驚くことであらう。

思ひいづるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しきものを。

平貞文

【語釋】○思ひいづるときはの山 思ひ出づる時を、常磐山にいひかけた。山は山城國太宰の北にある。○岩躑躅 常磐の山より岩つゝじまでは「いはねば」といふ爲の疊音の序詞。○

いはねばこそあれ 口へ出していひこそしないが。

平貞文 從五位上左兵衛佐。延喜元年卒した。

款冬

○款冬は藨の漢名、冬花咲く。我が邦では古より山吹としてゐる。こゝも山吹である。

點著雌黃天有意。

款冬誤綻暮春風。

清慎公

【語釋】○雌黃 繪具の名。黄赤色。往時文字を點するに用ゐた。

【大意】款冬がその名の通りならば、冬咲くべきを、誤つて春に咲いたので、天も心あつてか、かう雌黄を以て點つけたぞの意。山吹の花の黄色が、雌黄で書に點つけたやうに見えるからいつた。

清慎公 藤原實子。關白忠平の孫。累進して從一位太政大臣に至る。天祿元年薨じた、年七十。

書窓有卷相收拾。

詔紙無文未奉行。

題黄花。保胤。

【語釋】○有卷 昔は書冊に黄紙を用ゐたので、書窓の下の山吹の花を譬へた。○詔紙無文 書言故事に「唐太宗用黄麻紙寫詔敕文」とある。山吹の花の黄なのを詔書用紙の黄麻紙に見立てた。

【大意】讀書の窓の下に山吹が咲いてゐるのは、黄紙の書をよせ集めた如く、また黄麻紙の詔書に文字を書かず、まだ執り行はずしてある如くである。

かはづ鳴くかみなひ川にかげ見えて今や咲くらむ山ぶきの花。

厚見王

【語釋】○かはづ 河鹿のこと。○かみなひ川 大和國生駒郡神南山の下を流るゝ川。

厚見王 從五位下。傳未詳。



【大意】今頃は、あの蛙鳴く神南備川に、影を映して、山吹が咲くことであらうか。

わがやどのやへ山吹はひとへだにちり残らなむ春のかたみに。 兼盛

【大意】わが宿の八重山吹は、春の日数のたつと共に、残りなく散つてしまはうとするが、暮れゆく春の記念として、せめてその八重の内の一重だけでも残つてくれよ。

藤

悵望慈恩三月盡 紫藤花落鳥關々 關々 見寄。白

【語釋】○悵望 愁を帯びて遠くながめる貌。○慈恩 慈恩寺のこと。長安にあつた。○關々 鳥の音の相和するをいふ。

【大意】慈恩寺の春色も三月盡となつて、藤の花の散つて、鳥の空しく囀る、物あはれなさまを悵望する。

紫藤露底殘花色 翠竹烟中暮鳥聲 四月有餘春二詩。源相規

【大意】殘春の趣を作つた。烟はモヤ。

紫茸偏奪朱衣色 應是花心忘憲臺 於御史中丞亭一詠藤。順

【語釋】○紫茸偏奪朱衣色 紫茸は藤の一名。この句は論語の「惡紫之奪朱也」とあるによつた。○朱衣 大寶令の服色の制によれば、四位五位は緋衣。○憲臺 漢の御史府の一名。非違を檢察し、風俗を肅清することを掌る。わが邦の彈正臺に當る。

【大意】藤の花の紫が朱衣の色を奪つてゐるのは、花の心に非違を檢察する憲臺のあることを忘れたものであらう。主人が彈正大弼で朱衣の身分だから、庭の藤の花の紫を取り合はせて藤の花を賞翫したのである。

たこの浦をこさへにはふ藤なみをかざしてゆかむ見ぬ人のため。 繩丸

【語釋】○たこの浦 越中國射水郡。今は陸田となつた。○藤なみ 藤のこと。○かざして頭に挿して。

ときはなる松の名だてにあやなくもかゝれる藤のさきてちる哉。 貫之

【語釋】○名だて 悪しき名をたてにの略。名折れ。

【大意】常磐の松に懸つてゐる藤は、松にあやかつて、おなじく常磐のものであらうと思つたに、その松の名折となるやうに、咲くや否や早くも散ることよ。

繩丸 天平勝寶頃の人。傳未詳。



夏

更衣

○更衣は四月と十月にある。こゝのは四月で、春の衣をぬいで夏の衣に更へるのである。

背壁燈殘經宿焔

開箱衣帶隔年香

早夏曉興。

【大意】 壁を背にした燈火は、三月盡日の宵から一夜を過ぎて、この立夏の曉まで燃え残りの焔を立て、更衣のため箱から取り出した衣は、去年焼きしめたまゝの香をもつてゐる。

生衣欲待家人著

宿釀當招邑老酣

讚州作。

【語釋】 ○生衣 生絹の衣で、夏衣である。○宿釀 秋からかもして置いた酒の、春になつて熟したのをいふ。

【大意】 更衣の節になつたので、生絹の夏衣は、家人が裁ち縫ふのを待つて著かへようと思ひ、又かねて醸しておいた酒は、丁度熟したから、村里の父老を招いて飲ませよう。

花の色にそめしたもとのをしければ衣かへうき今日にもある哉。 重之

重之 源氏。從五位上相模守。長保三年卒した。

【語釋】 ○花の色にそめしたもと 櫻色の衣をいふ。

首夏

甕頭竹葉經春熟

階底薔薇入夏開

薔薇正開、春酒初熟。

【語釋】 ○甕 モタヒ。酒を入れる土器。○竹葉 酒の一名。尺牘双魚の註に「釀酒、竹葉を以てその中に雜ふ、極めて清潔なり。故に酒を謂つて竹葉となす」。○經春熟 酒は多から造つて、春になつて熟するのでいふ。○階底 階下をいふ。

苔生石面輕衣短

荷出池心小蓋疎

首夏作。

【大意】 夏季に入つて、石面に苔の薄く生じたのは、人が薄く軽い夏衣を裾短かに著たやうであり、又池の底から生え出た蓮（荷）の葉は、まだ初夏の頃だから、恰も小さな蓋をまばらにかざしたやうである。

わがやどのかきねや春をへだつらむ夏きにけりと見ゆる卯の花。 順

【大意】 垣は隣を隔てるものとはかり思つてゐたに、わが家の垣は春の季節までも隔てるのであらうか、夏が來たと知られる垣のこなたの卯の花よ。

物部安興 傳未詳。



夏夜

風吹<sup>タ</sup>枯木<sup>ツ</sup>晴<sup>ニ</sup>天<sup>ア</sup>雨<sup>フ</sup>。月照<sup>ツ</sup>平<sup>セ</sup>砂<sup>バ</sup>夏<sup>ニ</sup>夜<sup>ノ</sup>霜<sup>ユ</sup>。

江樓夕望。

【大意】江樓の夕、風が庭の古木を吹き鳴らせば、晴れた空にも雨が降るかと思え、月が河邊の砂原を照らせば、夏の夜ながら霜のおいたのかと見える。

風生<sup>ル</sup>竹<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>窓<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>臥<sup>シ</sup>。月照<sup>ル</sup>松<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>臺<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>行<sup>ク</sup>。

早夏獨居。

空<sup>コ</sup>夜<sup>ノ</sup>窓<sup>ノ</sup>閑<sup>カ</sup>螢<sup>ノ</sup>度<sup>ノ</sup>後<sup>ト</sup>。深<sup>シ</sup>更<sup>ニ</sup>軒<sup>ノ</sup>白<sup>ク</sup>月<sup>ノ</sup>明<sup>キ</sup>初<sup>メ</sup>。

夜欲<sup>レ</sup>歸<sup>ル</sup>房<sup>ニ</sup>。紀納言。

【語釋】○空夜 月がまだ上らないで寂寥たる程をいふ。

夏の夜をねぬに明けぬといひおきし人は物をや思はざりけむ。人丸

【大意】夏の短い夜も、人戀しさに物を思ひ續けると、なか／＼長くて明かしかねるのを「寝ぬにあけぬ」といひ置いた昔の人は、自分のやうに、人戀しく思ふことはなかつたのであらうか。

時鳥なくやさつきの短夜もひとりしぬればあかしかねつも。同

【語釋】○なくや やは閑投の助辭。○さつき 陰曆五月の異名。○短夜も 短夜でさへも。

○ひとりし しは強辭。○あかしかねつも もは歎辭。

夏の夜はふすかとするればほとゝぎすなく一聲にあくるしのゝめ。貞之

【語釋】○しのゝめ もと、明く・明しの枕詞であるが、後には直ちに明方の意に轉用した。

【大意】夏の夜は、大層短いので、今寝たかと思ふ間もなく、時鳥の鳴く一聲に、ふと目さむれば、もう明方となつてゐた。

端午

○端ははじめの義で、端午は五月の初めの午の日をいふ。昔はこの日節會があつて、菖蒲を用ゐられた。後には午の日に限らず、五月五日を用ゐるやうになつた。

有<sup>ツ</sup>時<sup>ハ</sup>當<sup>ツ</sup>戸<sup>ニ</sup>危<sup>ニ</sup>身<sup>ヲ</sup>立<sup>テ</sup>。無<sup>シ</sup>意<sup>ニ</sup>故<sup>ノ</sup>園<sup>ニ</sup>任<sup>セ</sup>脚<sup>ヲ</sup>行<sup>ク</sup>。

懸<sup>ニ</sup>艾<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>。

【語釋】○有時 五月五日をいふ。○危身立 艾人を門戸の上に懸けて置いたのが、あぶなげに見えるのをいふ。○故園 艾人はもとが庭園に生育したものであるから、その初め生じた園を故園といつた。○艾人 よもぎで作つた人形。毒氣をはらふ爲に戸上に懸けた。

【大意】艾草は端午の節に人形に造られ、衣冠を装束して、うれしさに堪へず、それでその身は門戸に懸けられて、あぶなさうに立てど、これを捨て、脚に任せて、もとの園に遁げて行かうとも思はない。



額基 大中臣  
氏、四世神祇大  
祐。天慶二年卒  
した。

わか駒とけふにあひくる菖蒲草おひおくる、やまくるなるらむ。

【語釋】 ○けふにあひくる 競馬は五月五日に行はれ、菖蒲もこの日に用ゐるものだから、馬と菖蒲とが今日出會し來るとの意。○おひおくる、菖蒲の生ひ後ると、競馬の追ひ後るとを兼ねた。

【大意】 今日競馬の若駒は、同列を追ひ越すのを勝とし、後るゝを負とするが、同じくこの日の祝に用ゐられる菖蒲も、今日の間には生ひ後れたものを、負とするであらうか。きのふまでよそに思ひし菖蒲草けふわが宿のつまとみるかな。 能宣

【大意】 五月五日の節供に、池の汀の菖蒲を引いて來て、軒の端にかけるにつけて、昨日までよそ／＼しく思つてゐた菖蒲なれど、今日はよその物とは思はれないといふ意を、ツマの詞の同じいところから、わが宿の妻と見るといつたのである。

納涼

青苔地上消殘雨。 綠樹陰前逐晚涼。

池上逐涼。

【大意】 殘雨は文集に殘暑とあるがよい。或は青苔の生えた地上にぶら／＼して殘暑を消し、或は綠樹の蔭のあたりを歩いて、晚涼を逐ふ。

露簾清瑩迎夜滑。 風襟蕭灑先秋涼。

池上夜境。

【語釋】 ○露簾 簾は竹席。夜に入れば露がおくので露簾といつた。

【大意】 涼み臺に腰かけて晚涼を食るに、露のおいた簾は清く光つて、夜になると滑らかになり、風を含んだ衣の襟は自ら爽快で、まだ秋とならないのに涼しい。

不是禪房無熱到。 但能心靜即身涼。

恒寂禪師。

【大意】 人々暑熱を苦しむ頃、恒寂禪師は獨り禪房即ち禪室を出ないで行ひすましてゐる。これは炎暑が禪房に侵入しないのではないが、唯その禪定に入つて心が安靜なので、身もまた涼しいのである。

班婕妤團雪之扇代屏風兮長忘。 燕昭王招涼之珠當沙月兮自得。

班婕妤の怨歌行

【語釋】 ○班婕妤 前漢、成帝の宮人。婕妤は當時の妃妾の稱。○團雪之扇 班婕妤の怨歌行に、團扇が秋風の吹けば棄てられるのに自身を喩へてある。團雪とは白い絹で團扇を作るに、團い雪の如くなればいつた。○燕昭王 周末戰國時代の燕國の王。○招涼之珠 昭王が嘗て鳥の啣んで來た珠を得て、常に身につけてゐると、盛夏の候も、體が自ら涼しかったので、

匡衡 大江氏。  
維時の孫。長德  
中、東宮學士、式  
部大輔となる。  
長和元年卒し  
た、年六十一。



銷暑招涼之珠と名づけた故事。

【大意】 水邊の風が極めて涼しいから、屏風を立てるので、彼の團扇の扇も長く忘れて用ゐず、砂石を照らす月影が白いので、それをかの招涼の珠に當てゝわが物とする。

臥見<sup>シテハ</sup>新圖臨水障。行吟<sup>キテハズ</sup>古集納涼詩。

屏風納涼畫也。

【語釋】 ○新圖臨水障 水邊の景色を新に描いた障子。この障子は襖障子。

【大意】 清風の通ふ處に臥しては、新に水邊の景を畫いた障子を眺め、綠樹の蔭に漫歩しては古人の詩集中の納涼の詩句を吟詠して暑さを忘れる。

池冷<sup>スミシクシテニ</sup>水無<sup>ニ</sup>三伏夏。松高風有一聲秋。

夏日閑避暑。源英明

【語釋】 ○三伏夏 夏至より後の、第三の庚の日より十日間を初伏とし、第四の庚の日を中伏とし、立秋後の初の庚の日を後伏として、これを三伏といふ。暑熱の最も盛んな頃である。

【大意】 池は涼しくて三伏の暑さを覺えず、松は高く、さつと吹きおろす梢の風の一聲、いかにも涼しく聞えて、そのうちに秋が籠つてゐる。

すゞしやと草村ごとに立ちよればあつさぞ増るところなつの花。 貫之

【大意】 涼しげなと叢毎に立ちよつて見れば、常夏の花トコナツ（瞿麥のこと）が盛りに咲いて居る、

したくゞる水に秋こそかよふらしむすぶ泉の手さへ涼しき。 中務

【大意】 木の葉の下をくゞつて流れ出る水には、早くも秋の季節が通うてゐるらしい。この泉の水を掬ぶと、手までこゞえる程なので。

松かげの岩井の水をむすびあげて夏なき年とおもひけるかな。 惠慶

【語釋】 ○岩井 石を疊んで作つた井。

晩夏

竹亭陰合偏宜夏。水檻風涼不待秋。

夏日遊永安水亭。白

【大意】 竹林の邊の四阿に竹が陰を作つて茂り合うて、ひたすら夏に適し、水に臨んだ亭舎の欄檻に風が涼しく吹いて、秋を待つまでもなく涼しい。

夏はつるあふぎと秋の白露といづれかさきにおかむとすらむ。 中務

【大意】 夏も早く盡きて、扇も不用になり、又秋と共に露もおく頃だから、扇と露とはどちら

惠慶  
寛和頃の



が先におくのであらうと、扇をうちおくと、露の草葉におくとを通はして詠んだ。

ねぎこともきかずあらぶる神だにも今日はなごしのはらへなりけり。

齋宮

【語釋】 ○なごしのはらへ 六月晦日に行はるゝ大破。八雲御抄に「邪神を拂ひなごむる被ゆゑに、なごしといふなり。」  
【大意】 六月晦日の被は、常には諸人の願ごとも聞かないで荒びすさむ邪神さへも、今日は和むといふ被である。

花橋

○花橋とは、橋を花についていつたのである。

盧橘子低山雨重、 柗欄葉戰水風涼。

西湖晩歸望孤山寺。

【語釋】 ○盧橘 夏蜜柑の類か。

【大意】 西湖で孤山寺を回望するに、盧橘の實が山の雨に垂れ下つて重やかに見え、柗欄（ユロの木）の葉は、水面を吹き來る風にそよいで、いと爽涼である。

枝繫金鈴、春雨後、 花薰紫麝、颿風程。

花橋詩。 後中書王。

【語釋】 ○紫麝 麝香。その色赤黒なので紫といつた。○颿風 南風をいふ。

【大意】 橘の實は春雨の潤ひを経て後黄熟して、枝上に黄金の鈴をかけたやうであり、その花は夏の南風の吹く程香り高くて、麝香の薰するやうである。

さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする。

【語釋】 ○さつきまつ 橘は五月になつて花の咲くものだからいつた。○袖の香 昔は衣袂に香を焚きこめる習慣があつた。

【大意】 五月を待ちうけて咲く花橘の香を嗅げば、昔馴染の人の袖の香がするよ。

ほとゝぎす花橋に香をとめて鳴くはむかしの人やこひしき。 夏之

【語釋】 ○花橋に 本によつては「花橋の」とある。その方がよろしい。

【大意】 時鳥よ、この橋の花の香を尋ねて來て鳴いて居るのは、おまへもこの花の香故に、昔の人を思ひ出して、それが戀しい故なのか。

蓮

風荷老葉蕭條綠、 水蓼殘花寂寞紅。

縣西郊秋、寄贈馬造階下。白

【語釋】 ○風荷 風に靡く蓮。○蕭條 さびしい貌。○水蓼 水邊に生ずる蓼。

齋宮 式部卿重明親王の女御子女王。はじめ伊勢の神宮の齋宮となり、のち天曆三年村上天皇の女御となられたので、齋宮女御と申した。寛和元年薨じた。



葉展影翻當砌月。

花開香散入簾風。

階下蓮。白。

【語釋】○砌 階。

【大意】階下の蓮は、その葉漸く展びては、階を照らす月に、葉の影が翻り、その花開いては簾内に吹き入る風に、花の香がばつと匂ふ。

烟開翠扇清風曉。

水泛紅衣白露秋。

題雲陽驛亭蓮。許渾。

【語釋】○白露秋 立秋後五日に白露降るといふ。

【大意】蓮の葉は、清風の吹き渡る曉、水烟の中に緑の團扇を開いたやうに立ち、蓮の花は、白露のおりる秋、水の上に紅衣を浮べたやうに咲いてゐる。

許渾 字は仲晦。唐の人。  
延喜 醍醐天皇の御事。

緣何更覓吳山曲。

便是吾君座下花。

亭子院法皇御賀、吳山千葉蓮華屏風詩。延喜御製。

【語釋】○覓吳山曲 法華傳に、流水大臣が罪を犯した時、吳山の池にある青蓮花を得たなら

宥さうといはれたが、その青蓮花は龍が護つてゐて近づくことが出来ぬ。大臣は吳山の羅漢から、南無佛と稱へれば龍神が害しないと教へられ、吳山に往つて、南無佛と稱へると、果して龍神はこれを避けた。大臣即ち青蓮花を探り、王に獻じて罪を宥されたといふ話がある。

【大意】宇多法皇の五十の御賀の時の御製で、屏風の畫蓮は吳山の青蓮花であるから、彼の流水大臣のやうに、辛苦して遠くその花を求むるに及ばない。その尊い青蓮花は、既に佛果を

得給うた法皇の御法座の邊にあるからである。

岸竹枝低應鳥宿。

潭荷葉動是魚遊。

池亭晚望。紀在昌。

【語釋】○潭荷 潭は水の深い處。

經爲題目佛爲眼。

知汝花中植善根。

石山寺池蓮。源爲憲。

【語釋】○經爲題目 佛經中で蓮花を題目としたのは妙法蓮華經である。題目とは典籍の首題をいふ。○佛爲眼 佛の卅二相に佛眼を青蓮花にたとふ。○善根 善き果報を受くる善因。

【大意】蓮花の、或は經文の題目となり、或は佛の眼に譬へられるによつて、多くの花の中で、獨り汝は、前世より他に勝れた善根を植ゑておいたといふことを知つた。

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく。

良僧正

【語釋】○にごりにしまぬ 法華經に「不染世間法、如蓮華在水」とある。○なにかは 何故にか。

【大意】蓮華は泥中より出て、その濁に染まない奇特なものでありながら、何故にその葉の上の露を玉と欺いて見せるか。

紀在昌 長谷雄の孫。從四位上東宮學士。

源爲憲 源順の高弟。

良僧正 僧正遍昭のこと。俗名良岑宗貞。花山の元慶寺に住んでゐたので花山僧正ともいふ。和歌の名匠。寛平二年寂した。享年七十六。



郭公

○時鳥のこと。郭公また霍公鳥とも書くは誤に出づ。

一聲山鳥曙雲外。萬點水螢秋草中。

曉發三幽居一將一尋同志。許渾

【語釋】山鳥 時鳥をいふ。○水螢 水邊に群がる螢。

さつきやみおぼつかなきに時鳥なくなる聲のいとゞはるけき。

明日香皇子

【大意】五月の曇空の闇い夜の、物のあいろも不明なのに、而も時鳥の鳴いてゐる聲が、甚だ

遙かなことよ。

ゆきやらで山路くらしつ時鳥いまひとこゑのきかまほしさに。

公忠

【語釋】○ゆきやらで 往き敢へずに。○山路くらしつ 山路で日を暮らしたの意。

さよふけてねざめざりせば時鳥人づてにこそ聞くべかりけれ。

忠見

【大意】かく夜更けて寢覺しなかつたならば、今年の時鳥の初音は、人傳にばかり聞くべきであつたものを、偶々寢覺したのが、おのづから時鳥を聞き得る幸となつたの意。

明日香皇子 桓武天皇の皇子。三品上野太守。承和元年薨じた。

忠見 壬生氏。忠岑の子。六位攝津大目。

螢

螢火亂飛秋已近。辰星早沒夜初長。

夜坐。元稹

【語釋】○辰星早沒 辰星は、今の午後四時に現はれ、午前八時にその光を失ふ。秋分の後、

夜が長くなる時は、日出も自然おくれるから、夜があげて間もなく、辰星はその光を没する。これを早沒といつた。

蒹葭水暗螢知夜。楊柳風高雁送秋。

常州留二與楊給事。許渾

【大意】蒹葭が生ひ茂つて水面の暗くなつたのに、螢は夜であることを知つて光を放ち、楊

柳に風が高く吹くにつれて、雁は北の方から秋を送つて来る。

明々仍在誰追月光於屋上。皓々不消豈積雪片於床頭。

秋螢照レ映賦。紀納言

【語釋】○追月光於屋上 南齊書に、江泌が貧乏で、夜は月光を追うて、屋上に昇つて書を読

んだとある故事。○積雪片於床頭 蒙求に、晉の孫康が家貧しくして油が買へず、雪に映じて讀書したとある故事。

【大意】螢の光が明々皓々として、書冊を照らして明かであるから、江泌や孫康のやうな貧生も、讀書するのに、月光を追うて屋上に昇つたり、床のほとりに雪を積む必要はない。



山經卷裏疑過岫

海賦篇中似宿流

同題。橋直幹

【語釋】○山經 山海經の山部である。○岫 クキ。山の洞。○海賦 木華の書いた有名な文章。文選に出てゐる。

【大意】 螢の光を以て、山經を照らせば、螢が山の岫を飛び過ぐるかと疑ひ、又海賦を照らせば、螢がその海流に宿るやうに思はれる。

草ふかきあれたる宿のともしびの風にきえぬは螢なりけり。 赤人

つゝめども隠れぬものは夏蟲の身よりあまれる思ひなりけり。

【語釋】 ○夏蟲 こゝは螢をいつた。○思ひ おもひのみに、螢の火を通はした。

【大意】 あの螢が物に包まれながら、光の爲に隠れることのないやうに、身の内に包み隠しながらよう隠しおほせないのは、わが心の思ひの火であつたよ。

蟬

遅々兮春日玉登暖兮溫泉溢 嬋々兮秋風山蟬鳴兮宮樹紅

驪山宮賦。

【語釋】 ○遅々兮 春の日のうららかに長閑なのをいふ。兮は置字。○玉登 玉で飾つた石だ

たみ。○溫泉 驪山の溫泉。○嬋々 風のそよ吹くをいふ。○驪山宮 驪山は支那陝西省西安府にある。唐代華清宮を置く。

千峯鳥路含梅雨 五月蟬聲送麥秋

【語釋】 ○千峯鳥路 千峯は連山をいひ、鳥路は山の上の路をいふ。○梅雨 梅の實の黄ばみ落つる頃に降る雨。○麥秋 麥は陰曆四月に熟する故に、四月を麥秋といふ。又蟬は陰曆五月の候に入つて鳴くので、麥秋を送るといつた。

鳥下綠蕪秦苑靜 蟬鳴黃葉漢宮秋

【大意】 さしも壯麗を極めた秦の(始皇帝の咸陽宮の)苑囿も、綠の草原となつて、夕暮には、鳥が伏處を求めており立ち、豪華を極めた漢の(長安の都の)宮室も、寂寞として、秋の黄ばんだ梢に、蟬があはれに鳴く。

今年異例腸先斷 不是蟬悲客意悲

【大意】 今年は何時もと違つて、腸が早くも千切れる思がする。これは初蟬の聲が悲しいばかりではない、流浪者の意が悲しいからである。

李嘉祐 唐の人。天寶中鄜陽の宰となつた。



歳去歳來聽不變。

莫言秋後遂爲空。

听初蟬一紀納言

【大意】 年々歳々年は改まれど、蟬の聲は毎年少しも變らない。さればその蟬は、毎年秋暮れて後に空しくなるものとはいへない。

夏山のみねのこずゑの高ければ空にぞ蟬のこゑはきこゆる。

人丸

これを見よ人もとがめぬ戀すとしてねをなく蟲のなれる姿を。

大納言重光

【語釋】 ○ねをなく蟲 蟬をさす。ねをなくは、聲を立てはげしく鳴くこと。

【大意】 人も取り合はぬかひない戀をするとして、獨りこがれ思うて、遂にこの蟬の脱殻のやうに、やつれ果てた我が身の姿よ。

大納言重光氏。醍醐天皇の皇孫。大納言檢非違使別當。長徳四年薨じた、年七十六。

扇

盛夏不消雪。

終年無盡風。

引秋生手裏。

藏月入懷中。

白

【語釋】 ○不消雪 扇を雪に譬へるのは團雪の扇の心。○引秋生手裏 扇を手にすれば、自然秋の涼しさも、手中にあるやうなのをいふ。○藏月入懷中 その製、自由に開閉されるから、明月の形と見えた扇も、忽ちをさめて懐中に入れることが出来る。

不期夜漏初分後。

唯翫秋風未到前。

輕扇動明月一管三品

【語釋】 ○夜漏初分 日暮れて、夜の初更に入るをいふ。漏は水時計、昔の時刻を計る道具。【大意】 扇の月は夜になるを待たず、何時も翫ぶことが出来、明月を翫ぶ秋風の立たぬ前、即ち夏の頃にはや翫ぶ。

天の川かは瀬すゞしきたなばたにあふぎの風を猶やかさまし。

中務

【語釋】 ○かさまし たなばたに物を手向くるを貸すといふ。

【大意】 二星の相逢ふ七夕は秋の初だから、天の川の河の瀬毎に吹く風は、もとより涼しからうけれど、なほ扇の風を棚機様に貸してやらうか、そしたら一しほ涼しいであらう。

あまの川あふぎの風にきりはれて空すみわたるかさゝぎの橋。

元輔

【語釋】 ○かさゝぎの橋 白氏六帖に、七夕の夜は鵲が天の川を填め、橋となつて棚機つめを渡すとある。かさゝぎは鳥の名。形鳩ほどの大きさで、翅に黒と白との斑點があつて尾が長い。○空すみわたる わたるは橋の縁語。

【大意】 七夕の頃は、秋のならひで、天の川に霧が立ちこめるけれど、この扇の風で霧が晴れて、空もよくすみ、鵲のわたすといふ橋もよく見えるは。

元輔 清原氏の内藏允深養父の孫。肥後守。大中臣能宣等と和歌所に候し、萬葉集の訓詁に従ひ、又後撰集を撰した。梨壺五人の一人。正暦元年卒した、年八十三。



君が手にまかする秋の風なればなびかぬ草もあらじとぞ思ふ。 中務

【大意】 我が君の御手のまに／＼、この扇からあふがれ出る風には、なびかぬ草木もあるまいと思ふと、論語の「君子之徳風、小人之徳草、草上之風、必偃」を本として、草木を臣民にたとへて、天皇の御稜威を稱へたのである。

秋

立秋 ○立秋は、天の運行の、秋の季節に入る日をいふ。

蕭颯涼風與衰鬢。誰教計會一時秋。 立秋日登樂遊園。

【大意】 さつと吹くさびしい涼風と、老いて衰へた鬢髪とを、誰が數へ合はせて、一時にこの立秋に逢はせるのであらう。

鷄漸散間秋色少。鯉常趨處晚聲微。 於菅師匠舊亭賦一葉  
落庭時詩。保胤

【語釋】 ○鯉常趨處 鯉は孔子の子。鯉が孔子の庭に立つてゐる前を過ぎ、注意されて詩や禮を學んだといふ故事により、保胤が師匠の舊亭で、その教を受けたことをいつた。

【大意】 初秋の夕、群れ居た鷄も、いつか塹に歸つた程、まだ秋景色は十分でなく、孔鯉のやうに、わが立ち走つた舊師の庭に、晩方の落葉の音がかすかに聞かれる。

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞ驚かれぬる。 敏行

敏行 藤原氏。  
刑部卿。書を善  
くした。



うちつけに物ぞ悲しき木の葉ちる秋のはじめをけふぞと思へば。 能宣  
【語釋】 ○うちつけに さしあつて。出しぬけに。

早秋

但喜暑隨三伏去。不知秋送二毛來。 早秋答蘇六。 白

【大意】 暑さの過ぎ去つたことばかり喜んで、悲しい秋の廻つて来て、頭髮の胡麻鹽にならうとするのを願みないはかなさよ。

槐花雨潤新秋地。桐葉風涼欲夜天。 早秋。 白

【大意】 槐の花の地に落ちたのが、初秋の雨に潤ひ、桐の葉を吹く風は、夜に向ふ宵のほど新涼を催して来る。

炎景剩殘衣尙重。晚涼潛到簟先知。 立秋後作。 紀納言

【語釋】 ○炎景 炎暑の景氣。○衣尙重 殘暑の候で、薄い夏衣も、なほ重く思はれる。○簟先知 流石に新秋の晩は簟に冷かさを感じるのを、簟がまづ知るといつた。

安貴王 施基皇子の御孫。從五位上。

秋たちていくかもあらねどこのねぬるあさけの風は袂涼しも。 安貴王

【語釋】 このねぬるあさけ 寝て起きたこの明方。

七夕

○七月七日の夜をいふ。この夜は、牽牛・織女の二星が一年に一度相逢ふ夜といつて、星祭をする。

憶得少年長乞巧。竹竿頭上願絲多。 七夕。 白

【語釋】 ○乞巧 七月七日の夕、男兒女兒が、二星に種々の物を捧げて、文筆・音楽・裁縫などの上手になることを乞ひ祈るをいふ。○願絲 五色の絲を竿の先にかけて、針に絲を通し、梶の葉などにさし、その葉に我が願を書いて二星にいひのる。

【大意】 この夕、竹竿の上に、願絲の多いのを見るにつけて、わが少年の時、乞巧したことを憶ひ出した。

二星適逢未敘別緒。依々之恨。 五夜將明。 頻驚涼風颯々之

聲。 代牛女惜殘更詩序。 小野美材

【語釋】 ○別緒依々之恨 別緒は別離の心、依々の恨は別れ難い恨。○五夜 夜の五更、今の

小野美材 參議 篁の孫。延喜二年卒した。



午前四時頃。

【大意】牽牛・織女の二星、今夕たまく相逢うて、別れてゐた間の依々の恨をもまだ叙べ盡くさないに、夜は明けようとして、頻りに曉の涼風の颯々たる聲に驚く。

露應別淚珠空落。雲是殘粧髻未成。代二牛女二惜曉更。

【大意】曉の露は、牽牛の別れを惜しむ涙の珠と落ちたのであらう。朝の雲は、織女の身の粧をまだ整へかねて、髪のもとよりも取りあげすうち亂したやうである。

風從昨夜聲彌怨。露及明朝淚不禁。代二牛女二惜曉。後江相公。

【大意】逢うて嬉しいと思ふ間もなく、悲しい別れをするので、昨夜から風の音さへ哀れに聞えたが、いよ／＼明けの朝となつておく露は、別れの悲しみに堪へずこぼれる涙である。

去衣曳浪霞應濕。行燭浸流月欲消。七夕舍レ媚渡レ河橋一詩。菅三品。

【語釋】○行燭 道を行く時に携へる燈火。

【大意】七月八日の明方、織女は、牽牛の許を別れ去る時の衣を天の川の波に曳けば、そのしぶきに、空の霞もしめるであらうし、又天の川の流にひたる行燈の光には、月の影も薄れるであらう。

菅輔昭 菅原氏。文時の第二子。大内記。

詞託微波雖且遣。心期片月欲爲媒。代二牛女二待夜。菅輔昭。

【大意】牽牛・織女の二星は、天の川の岸まで來ながら、まだ夕方にならないから、空しく天の川の小波に言づけして、想ふことをいひかはしながらも、心には片われ月の出るのを待つて、これを媒として相逢ふことを希ふ。

あまの川遠きわたりにあらねども君がふなでは年にこそまで。人丸

【大意】天の川は遠い渡りではないけれど、牽牛の君の船出は、一年がかりで、やつと待ち得ることよ。

ひと、せにひと夜と思へど七夕のあひみる秋のかぎりなきかな。貫之  
年ごとにあふとはすれど七夕のぬる夜の數ぞすくなかりける。躬恒

秋興

林間煖酒燒紅葉。石上題詩拂綠苔。題二仙遊寺。白。

【語釋】○題詩 詩を物に書き付けること。

秋



【大意】時は恰も暮秋なので、林の蔭で酒を煖めるには、散つた紅葉を集めて焚き、輿に入つて石上に作つた詩を書きつけるには、石に著いてゐる緑の苔を掃ひ取る。

楚思森茫雲水冷。商聲清脆管絃秋。於黃鶴樓宴罷望。

【語釋】○楚思 楚の囚人の思。楚囚は、楚の伶人鐘儀といふものが囚人となつて繫がれた故事。○清脆 秋は氣すみて清らかな上に、萬木皆凋んで脆く落ちるのでいふ。○商聲 宮・商・角・徵・羽の五音のうち、商の聲は方角で西、四季で秋に配する。○管絃 管は吹物、絃は彈き物。

【大意】わが他郷にある悲しみは茫々として、はてない雲や水が面白からず、わが爲に酒宴を設け、管絃をして慰めてくれる、その秋の聲は、耳に澄み渡つて愁思を催す。

大底四時心愴苦。就中腸斷是秋天。暮立。

【語釋】○腸斷 腸がちぎれる。悲しみの甚しいのいふ。○秋天 こゝでは秋の時候の意。

【大意】大抵春夏秋冬の四時を通じて、自分の心はすべて切ないけれど、その中でも特に悲しいのは秋の季節である。

物色自堪傷客意。宜將愁字作秋心。客舍秋情。野相公。

【大意】秋はすべての物の景色、自然旅にある人の心を傷ましめるものだから、秋心の二字を合はせて愁といふ字を作るのは、尤もなことである。

由來感思在秋天。多被當時節物牽。秋日感懷。田達音。

【語釋】○當時節物 當時は秋の季節をさし、節物は季節の景物。

第一傷心何處最。竹風鳴葉月明前。同。

【大意】上と續けて一首の絶句。由來物毎に哀を感じるのは秋の習で、昔から、折節ごとの景物に、心のひかれることが多かつた。殊に最も心を傷ましめるのは何處かといへば、澄みわたつた月の前に、秋風の竹の葉をそよがした景色である。

蜀茶漸忘浮花味。楚練新傳擣雪聲。暑往寒來詩。江相公、一云相規。

【語釋】○蜀茶 蜀の茶は支那で最上の茶である。蜀は四川省。○浮花 茶の泡だつて、碗に浮ぶのをいつた。○楚練 楚は練絹の名所。楚は湖南省。○擣雪聲 擣衣の聲をいふ。絹の色の白いのを雪に譬へた。

【大意】暑さの頃は、蜀茶に苦熱を忘れたが、暑氣の去るにつれて、やう／＼その泡だつ味を忘れ、秋の季節に入つて、家々は防寒の用意に忙しく、雪のやうな楚練をうつ聲が、新に傳はつて聞える。



丹後國人 萬葉集によれば、この歌は豊浦寺の尼の作。

義孝少將 藤原氏。伊尹の男、行成の父。右近衛少將。天延二年卒した、年二十六。

うづらなくいはれの野べの秋萩をおもふ人とも見つるけふ哉。 丹後國人

【大意】 秋風が吹いて、鶉の群がり鳴く磐余野(大和國磯城郡)に、咲き出た萩の花のたをやかなのを見るにつけ、わが思ふ美しい人の姿がよそへられて、しみくとその花を見入つた。

秋はなほ夕まぐれこそたゞならねをぎのうは風萩のした露。 義孝少將

【大意】 秋はやはり夕暮こそ尋常でなく哀深い。それは、萩の上葉に風がそよぎ、萩の下葉に露の亂れるなど、何ともいへぬ風情だからである。

秋 晩

相思夕上松臺立。 菘思蟬聲滿耳秋。 題李十一東亭。 白

【語釋】 ○松臺 松のあるほとりの臺。○菘思 菘も思ふことがあつて鳴くと見ていつた。

【大意】 李十一を思うて、その東亭の松臺の上に晩方立つて眺めるに、菘の人をしのぶやうな聲、蟬の悲しみを含んだやうな聲が耳に満ちて、秋のあはれを告げた。

望山幽月猶藏影。 听砌飛泉轉倍聲。 法輪寺口號。 菅三品

【大意】 山を望めば、月はまだ幽かに、影をかくして出でず、砌にきけば、瀧の水音は次第に

高く聞える。

小倉山ふもとの野邊の花す、きほのかに見ゆる秋の夕ぐれ。 貞之

【語釋】 ○花すゝき 薄の穂に出たのをいふ。○ほのか 薄の穂の縁語。

【大意】 小倉山(山城國葛野郡嵯峨)の麓の野邊になびく薄の白いのばかりが、かすかに見える秋の夕暮よ。その風情は何ともいへない。

秋 夜

秋夜長。 夜長無眠天不明。 耿耿殘燈背壁影。 蕭々暗雨打

窓聲。 上陽人。 白

【語釋】 ○耿耿 光の少しく明らかなのをいふ。

【大意】 秋の夜長の時節になれば、眠られぬのに夜も明けず、かすかな殘燈に、壁に映つた影がさびしく見え、物さびしい暗夜の雨が、頻りに窓を打つ聲あはれに聞える。と、唐の玄宗の時、楊貴妃に妬まれて上陽宮に移された宮人の情を歌つた。

遲々鐘漏初長夜。 耿耿星河欲曙天。 長恨歌。 白

秋



【語釋】○遅々鐘漏 夜が長くて、容易に時の鐘を打つ時刻の移らぬをいふ。鐘漏は、宮の内  
に鐘をかけ、時刻に打ち鳴らすといふ、時の鐘。○星河 天の川。

【大意】深い思に沈んで夜も眠ることが出来ず、初めて漏刻の移ることの遅いを知り、光か  
すかな天の川のおあたりから、漸く曙光の見え初めようとするのを見る。と、楊貴妃を失つた  
玄宗の情を歌つた。

燕子樓中霜月夜。秋來只爲一人長。燕子樓 白

【大意】唐の張僕射の妾關盼々の住んでゐるこの燕子樓に、霜繁く降つて月明らかな夜、孤衾  
冷やかにして終夜眠ること出来ず、秋の夜の長さは、この一人の爲に長いやうな思がする。  
と、張僕射の死後の盼々の情を歌つた。

蔓草露深人定後。終宵雲盡月明前。秋夜詠 祖廟二詩 野相公

【大意】祖廟に参るに、夜深く、人寝静まつた時、露は生ひ蔓つた草の上に繁く、月は明らか  
にさえ渡つて、終夜一點の雲もない。

兼葭洲裏孤舟夢。榆柳營頭萬里心。秋夜雨 紀齊名

【大意】兼葭の茂つた河の洲に、唯一つ舟がかりしてゐる舟の中の人、浪の枕に故郷を夢み

るであらう。また夷を防ぐ爲に、邊塞を守る軍兵たちは、榆や柳の茂つてゐる軍營のほとり  
に、思を萬里の外に馳せて、望郷の念に堪へないであらう。

足引の山鳥の尾のしだり尾のながくし夜をひとりかもねむ。人丸

【語釋】○足引の 山の枕詞。○しだり尾の 末垂尾の如く。初句よりこゝまでは、長しとい  
ふ爲の序詞。

【大意】長い秋の夜を、たゞ獨り寂しく寝ようとするのかなア。

睦言もまだつきなくに明けにけりいづらは秋の長してふ夜は。躬恒

【大意】互の睦び言もまだ語り盡さないのに、夜は明けてしまった。秋の長いといふ夜は、一  
體何處にあるのか。

八月十五夜 付月 ○八月十五夜は陰曆仲秋の満月の夜に當る。

秦甸之一千餘里、凜々氷鋪。漢家之三十六宮、澄々粉飾。長安 八月

公乘僮 字け壽  
仙。唐の人。

【語釋】○秦甸 天子の都に近い畿内の地。漢の都長安は昔の秦の地にあつたからいふ。○漢

家之三十六宮 前漢時代には離宮別殿など三十六の宮殿があつた。



【大意】一輪の明月、長安の空にかゝつて、清くすさまじい光に、一千里の外まで氷を鋪きつめたる如く、三十六の宮殿も、その澄みわたる光を受けて、蟹も鼈も胡粉で塗り飾つたやうである。

織錦機中已辨相思之字。擣衣砧上俄添怨別之聲。 同

【語釋】○相思之字 晉の蘇萼が、夫を思ふ情を綴つた廻文の詩を、錦に織り込んだといふ故事。○砧 衣を擣つ臺。石又は木でつくる。

【大意】長安の月明らかであるから、外征の夫を思つて織り成す廻文の詩も、早くあざやかに、その相思の文字を機の上に辨へ知ることが出来、衣を擣つ婦女は、月光の凄凉たるまゝに、その夫と久しく別れて怨に堪へない聲を、急に砧の音に添へる。

三五夜中新月色。二千里外故人心。 八月十五日夜、禁中獨直對月憶元九。白

【語釋】○新月 光のいゝ月。初月ではない。○故人 白樂天と元稹(九)とは舊友だからいふ。

【大意】八月十五夜の夜中、禁中に宿直して、新月の光に對して、二千里外の遠地にある故人の心を思ひやる。

嵩山表裏千重雪。洛水高低兩顆珠。 八月十五日飯月。白

【大意】限なき月が中天に懸つて、嵩山(河南省)の表裏を照らしてゐるさまは、恰も幾重も雪の降り積つたやうであり、またその月光の洛水(河南省)に映つてゐるのを見れば、天上の月と水上の月と、高低二處にちやうど二つの明玉を懸けたやうである。

十二廻中無勝於此夕之好。千萬里外皆爭於吾家之光。 秋高月

明序。紀

紀。紀納言に同じ。前出。

【語釋】○十二廻中 月が十二回轉して一年となる間。

【大意】一年十二ヶ月の中、この八月十五夜の今夜ほど、月光の勝れて面白い夜はない。されば千萬里の外までも、皆この月の光を我が家のものとして争ひ賞する。

碧浪金波三五初。秋風計會似空虛。 月影滿秋池。詩。菅淳茂

【大意】八月十五日の初夜の月光が、池の面に満ちて、碧浪金波を生ずるさまは、恰も秋風と明月とが一緒になつて、一點の雲もない空虛を現はすに似てゐる。この句は次の三つと續いた律詩である。

自疑荷葉凝霜早。人道蘆花過雨餘。 同題。同人

【大意】月光の蓮の葉に眞白く照るのを、まだ秋の半ばなのに、早くも霜の降つたのかと自分

菅淳茂 菅原氏。道真の子。式部權大輔。



は疑ひ、また蘆の葉を白く照らすのを、蘆の花が雨後に残つてゐるのかと人は云ふ。

岸白還迷松上鶴 潭融可算藻中魚 同題

【語釋】○潭融 淵の底まで見え透くをいふ。

【大意】月光の爲に、兩岸が皆白いから、却つて松上の鶴も尋ねかねるさまであり、月光が池底を透して、藻の中の魚をも數へられさうである。

瑤池便是尋常號 此夜清明玉不如 同題

【大意】支那で瑤池といつて稱美する西王母の住んだ仙宮の池も、この景色に比べては尋常の物であらう、この明月の池上に映つた景色は、眞に珠玉も及ばない。

金膏一滴秋風露 玉匣三更冷漢雲 同題

【語釋】○金膏 水銀をいふ。膏は鏡を磨くあぶら。○玉匣 はこ。玉は美稱。○三更 今夜の十二時。○冷漢 冷やかな空。

【大意】満月の明かなこと鏡のやうであるが、この鏡を磨いた膏は、秋風に滴り落つる露で、この鏡を入れる匣は、夜深のつめたい空の雲である。

楊貴妃歸 唐帝思 李夫人去 漢皇情 對雨戀月 源順

【語釋】○楊貴妃 唐の玄宗の寵妃。歸は死するをいふ。下の去も同じい。○唐帝思 玄宗が楊貴妃を慕うた情思。○李夫人 漢の武帝の寵妃。

【大意】今宵自分が雨に對して月の光を戀ふのは、彼の玄宗と武帝とが寵妃を失うて戀々の情に堪へなかつたのと同様である。

水のおもにてる月なみを數ふればこよひぞ秋のもなかなりける 順

【語釋】○月なみ 月次の義、それに月の光の映つた波といふことを通はせた。

【大意】月の光の殊にさやかに、水の面に輝いてゐるのを見るにつけて、月次を數へると、實に今宵は八月十五夜で、秋のまん中であつたよ。

月

誰人隴外久征戍 何處庭前新別離 秋月 白

【語釋】○隴外 隴山の外。隴は支那陝西省にあり、支那の本國と胡國との境。

【大意】如何なる人が、隴外萬里の地に久しく遠征して、この月に對して故郷を思ふであらう。又いかなる處にか、出征者が庭前に新しい別れを惜しんで、この月に袖を絞るであらう。

秋



鄧展 傳未詳。

秋水漲來船去速。夜雲收盡月行遲。

汴水東歸即事。鄧展

【語釋】○月行遲 雲が收つてしまつた空は、月がいつも同じ處にあるやうに見えるのをいふ。

不醉黔中爭去得。磨圍山月正蒼々。

送蕭處士遊黔南。

【大意】君が行かうとする黔中（支那湖南省）は詩人を感傷させる景趣が多いから、君も大いに酔はなければ、その地を去ることは出来なからう、その折から磨圍山の月光は正に清くすさまじくて、いよく遊客の心を傷ませるであらう。

天山不辨何年雪。合浦應迷舊日珠。

禁庭歌月。三統理平

【語釋】舊日珠 合浦の海に多く珠玉を生じたが、貪吏の在つた時、その珠玉が交趾の境に移り去つたといふ故事。

【大意】禁中の月は光珠にさやかで、雪の如く珠の如くであるから、流石の年中雪が消えぬといふ天山（新疆省）でも、こんな淨い雪は降らないから、何れの年の雪ぞと辨へがたく、又合浦（廣東省）では昔交趾の境に去つたといふ珠にまぎれて見分け難いであらう。

欲和豐嶺鐘聲否。其奈華亭鶴警何。

夜月似秋霜。前中書王

三統理平 三代實錄・延喜格の撰に與つた。式部大輔。延長四年卒した、年七十四。

【語釋】○豐嶺鐘聲 河南省の豐山に九つの鐘があつて、霜が降れば、その鐘が自然に鳴つたといふ故事。○華亭鶴警 丁令威といふものが道を學び、鶴に化して華表において鳴いたが、霜が降れば警めて鳴かなかつたといふ故事。

【大意】月光地に敷いて、霜の降るのに似たのは、かの豐嶺の鐘をして、自ら鳴らしめようとするのであらうか、されどあの華亭千年の鶴は、却つて警めて聲を出さないのを如何にしよう。

鄉淚數行征戍客。棹歌一曲釣漁翁。

山川千里月。保胤

【大意】月が山川千里に亙つて明らかであるから、遠く故郷を離れて邊塞を守る人は望郷の涙留め難く、又孤舟に棹さす漁翁は、興に入つて一曲の舟歌をうたふ。

あまの原ふりさけ見れば春日なるみかさの山に出でし月かも。

仲滿

【大意】大空遠くふり仰いで見れば、あの澄みわたつた月は、昔故郷で見た春日（奈良の）の笠山から出たその月であるかまゝ。と、支那にゐる日本を憶うた歌。

しら雲にはねうちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋のよの月。

躬恒

世にふれば物思ふとしもなければも月に幾度ながめしつらむ。

後中書王

仲滿 ナカマロ。安倍氏。靈龜二年十六歳で遣唐留學生となり、姓名を朝衡と改め、唐朝に仕へ祿賜となつた。勝寶中、歸朝せむとし、海上風に遭うて果さず、寶龜元年唐で卒した、年七十。



【語釋】 ○ながめ 心に思ふことあつて、つくんとその物に見ほるゝをいふ。  
【大意】 世に生存してゐれば、人は必ず物思ふと定まつたのではないが、限なき月影ゆゑには、幾度物思に明かしたことであらう。

九月九日 付菊 ○九月九日、この日を重陽の節とする。

燕ハハツテ知ラシテ社ヲシテ日ヲシテ辭ヲシテ集ヲシテ去リ。菊ハハニ爲ニ重陽ノ冒シテ雨ヲシテ開ク。  
秋日東郊作。皇甫冉

【語釋】 ○社日 土の神を祭る日で、春秋の二度ある。○重陽 九月九日。九は陽の數の極、二つ重なるので重陽といふ。

【大意】 燕は秋の社日を知つて、寒さを恐れて辭し去り、菊は重陽の佳節に會はうとして、寒い雨を冒して咲き初める。

採レバ故事ヲ於テ漢武ニ則テ赤黃ヲ挿シ宮人ノ之ノ衣ニ。尋ニ舊跡ヲ於テ魏文ニ亦ニ黃花ヲ助ス。  
彭祖ノ之ノ術ヲ。  
魏武帝群臣菊花詩序。紀納言

【語釋】 ○採故事於漢武 漢の武帝の宮人は、九月九日に茱萸を佩びて、邪氣を拂うたといふ。○尋舊跡於魏文 魏の文帝は、人に菊花を與へて、大いに菊花が長壽に效能あるを説いた。○彭祖之術 長生の術。彭祖は仙人の名。七百歳を超えて少しも衰へなかつたといふ。

【大意】 今日重陽の宴に、群臣に菊花を賜ふ故事を尋ねるに、漢の武帝の時、宮人が赤い萸を衣に挿んで邪氣を拂ひ、魏の文帝の黃菊を臣下に賜うた如く、この花を酒に和して、彼の彭祖が長壽を得んことを希ひ給ふ、厚い御仁心であらう。

先ニ三ニ遲ニ兮ニ吹ク其ノ花ヲ如シ曉ノ星ノ之ノ轉ル河漢ニ。引ニ十ニ分ニ兮ニ蕩ク其ノ彩ヲ疑シ秋ノ雪ノ之ノ廻ル洛川ニ。  
同

【語釋】 ○三遲 宴席の遅刻に三等をわがち、罰杯を飲ませること。

【大意】 菊花酒を酌むとて、遅刻者にかまはず杯中の花を吹き動かす時は、曉の星の空に轉ずる如く、また満々と杯について花の色を漂はせる時は、秋雪の洛川のほとりに舞ふやうである。

谷水洗花ノ波ヲ下リ流ル而シテ得ル上ノ壽者三十餘家。地脉和味ヲ飡シ日精ヲ而シテ駐ル年者五百箇歲。  
同

【語釋】 ○谷水洗花云々 南陽酈縣の山中に甘谷の水がある。谷の上方に菊があつて、その花や露が水中に墮ちる。その地の民は甘谷の水を飲むために、皆長壽するといふ。○上壽 百二十歳をいふ。○地脉和味 土の性の物の味の味をたすけるをいふ。劉生といふもの菊花を食うて五百歳の壽を得たといふ故事。○日精 菊の異名。○駐年額 年の積ると共に顔色の衰

皇甫冉 唐の  
人。官右補闕に  
至つた。



へるのを駐める。

【大意】かの酈縣の人民は甘谷の水を呑んで百年も長生したものの三十餘家に及び、劉生は菊花を食うて、五百歳の壽を保つたのは、皆菊花の徳である。

わがやどの菊のしら露けふごとにかくよ積りて淵となるらむ 元輔

【大意】わが宿の菊の露は、この重陽の節毎に、幾代の間積り積つて、あの甘谷の水のやうに淵となるであらう。

菊

霜蓬老鬢三分白 露菊新花一半黄

九月八日酬皇甫十見贈

【語釋】○霜蓬老鬢 霜枯の蓬のやうな老人の鬢髪。○三分白 十中の三は白髪。○露菊新花 露をおびて新に咲いた菊の花。○一半黄 黄菊の花が半分だけは咲いた。

不是花中偏愛菊 此花開後更無花

十日菊花 元輔

嵐陰欲暮 契松柏之後凋 秋景早移 嘲芝蘭之先敗

秋禁庭 菊一紀

【語釋】○嵐陰 嵐はもや。陰はくもり。○秋景 秋の日影。○芝蘭 靈芝と蘭と。

【大意】秋も暮れようとして、萬木凋落する中に、菊花のみは松柏の如く、諸木の後に凋まんとことを契り、昔から靈草といふ芝蘭の早く衰へ敗れるのを嘲る。

酈縣村閭皆潤屋 陶家兒子不垂堂

菊數一叢金 三善清行

三善清行 式部大輔。法律に精かに、算術に精しく、傳く經史子孫に通じた。延喜十八年卒した、年七十二。

【語釋】○酈縣村閭 南陽酈縣の村里。前出(八五頁)。○潤屋 論語に「富は屋を潤す」。○陶家兒子 陶淵明の子供たち。陶淵明は東籬に菊を植ゑて愛賞した。○不垂堂 史記に「千金の子は垂堂せず」。垂堂は家の端近に出ること。○大意 黄菊を黄金に譬へて、菊の名所酈縣の一村は悉く富み榮え、又菊花を植ゑた淵明が家の子供達は、金持の子だから、家の端近に出て危きに近よることはしなかつたであらう。

蘭苑自慙爲俗骨 權籬不信有長生

菊是草中仙 保胤

【大意】花中の蘭は名花なれど、その花久しからねば、菊の風霜に逢うて、久しくその色を變へざるを見て、自ら尋常普通の俗物たるを慙ぢ、又籬の權は朝に開いて夕に萎む花だから、世に菊花のやうな長生の花のあることを信じないであらう。

蘭蕙苑嵐摧紫後 蓬萊洞月照霜中

花寒菊點 叢書三品



【語釋】 ○蘭蕙 共に香氣ある草。○摧紫 蘭も蕙もその花は紫である。○蓬萊洞 仙人の住む所。

【大意】 蘭蕙の花は早く秋氣の爲に摧かれた後、寒氣は益々加はつて、月は霜を照らす中に、菊は獨りその色を失はず、處々に咲き残つてゐた。

ひさかたの雲の上にて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける。 敏行

【語釋】 ○ひさかたの 天・雲などの枕詞。○雲の上 禁中をいふ。

【大意】 雲の上といふ禁中の御庭にて見る白菊は、空の星と見まちがへられた。

心あてにをらばやをらむ初霜のおきまどはせる白ぎくの花。 躬恒

【大意】 白菊の咲いた上に、初霜が置いて、どれが花か霜かとまどはれるのを、まあ當推量にこれが菊と推量して、折らば折られようか。

九月 盡 ○九月晦日をいふ

縦以嶠函爲固難留蕭瑟於雲衢。 縦令孟賁而追何遮爽籟於

風境。 寺山惜秋序。

【語釋】 ○嶠函 支那古代の秦の地に入る關所の地。○蕭瑟 秋風のさびしいさま。○雲衢 雲路。

○孟賁 支那古代の勇士。○爽籟 さわやかな秋聲。○風境 風の吹き交ふ境。

【大意】 秋は空を過ぎゆくものだから、たとへ嶠函のやうな嚴しい關の固めがあつても、さびしい秋を留めることはむづかしく、又孟賁のやうな勇士でも、そのさわやかな秋を追ひとめることはむづかしくあらう。

頭目縦隨禪客乞。 以秋施與太應難。 山寺九月盡。

【語釋】 ○頭目云々 法華經に、釋迦が法華經を求むる爲には、頭目も、髓腦も、身肉も、手足も惜しまぬ、といったとあるによつた。

【大意】 我が頭や目は、よしや佛道修行の僧の乞ふに任せて與へようとも、今日一日のこの秋を施し與へるには忍びない。

文峯按轡白駒景。 詞海艤舟紅葉聲。 秋未出詩境。

【語釋】 ○文峯 作文などする場所。下の詞海に對する。○白駒景 日影。白駒は光陰の早く經つのを白駒の隙間を通るにたとへるより、日影をいふやうになつた。○詞海 文人が作詩の境。

【大意】 秋も自ら別れを惜しむのか、日の影は文峯の上に轡を控へて、暫く秋の姿を残し、風



に替たてゝ散る紅葉は、詞海の水際に舟の用意をして、將に秋を乗せ去らうとして、まだ漕ぎ出さない。

山さびし秋もくれぬとつぐるかもまきの葉ごとにおける初霜。 千里

【大意】 紅葉も散つてしまつて、遽に山はさびしく、秋も盡きたと告げるのか、眞木の葉毎に、おいた初霜よ。

くれてゆく秋のかたみにおく物はわがもとゆひの霜にぞありける。 兼盛

【語釋】 ○もとゆひ 髻の事だが、こゝは頭髮をさした。

【大意】 くれゆく秋の記念として遺し置くものは、わが頭に置いた霜のやうな白髪である。

女郎花

花色如蒸粟俗呼爲女郎。 聞名戲欲契偕老恐惡衰翁首似霜。

詠ニ女郎花一順

【大意】 女郎花の花の色は、蒸した粟のやうに黄色に美しく見えて、その名も俗に女郎花といふから、その名によつて、夫婦偕老の契を結ばうと思へど、恐らくは花の方で、我がこの老

いぼれた翁の頭の霜のやうに見えるのを厭ふであらう。

女郎花多かる野べにやどりせばのやなくあだの名をや立たまし。 美材

【語釋】 ○名をや立たまし 「を」を敷衍として解する。

【大意】 女郎花の多く咲いてゐる野邊に、日を暮らして宿つたならば、女といふ名の爲に、世間に、自分が好き心で宿つたやうに、譯もなしに無實の評判が立つかも知れぬ。

をみなへし見るに心はなぐさまでいとむかしの秋ぞ戀しき。 清慎公

【大意】 をみなへしの花を見て心慰むべき筈なれど、最愛の妻に先立たれた不幸の身には、少しも心は慰まないで、却つて昔の、その人の生きてゐた時のことが思ひ出されて、追慕の情に堪へない。

萩

曉露鹿鳴花始發。 百般攀折一時情。 新撰萬葉集詩。

【大意】 曉の露が置いて、鹿の鳴くと共に萩の花が咲き初めたが、時の興に入る出来心から、幾度も／＼その枝を折るわ。



秋の野に萩かるをのこなはをなみねるやねりその碎けてぞ思ふ。 人丸

【語釋】 ○ねるやねりその ねりそは練麻の義で、薪などを束ねる爲に、木の細い枝などをおしまげたもの。こゝまでは「碎けて」といふ爲の序詞。

【大意】 秋の野に、枯れた萩刈り取る男の、それを束ねる繩がなさに、木の小枝などをおしまげて束ねようとする時、その碎けるやうに、心を碎いて思ひ焦れる。

うつろはむ事だにをしき秋萩を折れぬばかりにおける露かな。 伊勢

【大意】 花の色が衰へるのさへ惜しまれる萩なのに、その枝の折れる程に多く露の置いたことよ。

秋の野の萩のにしきをふるさとに鹿の音ながら移してしがな。 元輔

【大意】 秋の野に錦を織り成したやうな萩の下蔭に、鹿の鳴いてゐるさまを見るにつけて、この景色をそつくり、我が住む里に移して見たいものだな。

蘭

前頭更有蕭條物。老菊衰蘭三兩叢。 白 抄秋獨夜。

【語釋】 ○前頭 わが前數歩の處。頭はホトリの義。

【大意】 秋は物思ふこと多いに、前我には更に物寂しげに、哀を催す物がある。それは即ち、老い衰へた蘭菊などの、二つ三つ残つた叢の有様である。

扶桑豈無影乎浮雲掩而忽昏。叢蘭豈不芳乎秋風吹而先敗。

菟裘賦。前中書王

【語釋】 ○扶桑 山海經その他に東海中の神木とし、又太陽の出る處とす。こゝは太陽の意。

【大意】 天日に光らないではないが、浮雲これを掩ふために、忽ち昏くなり、蘭はその香芳しからぬではないが、秋風の爲に、まづ推き敗られる。

凝如漢女顔施粉。滴似鮫人眼泣珠。 紅蘭受露。都良香。

【語釋】 ○鮫人眼云々 鮫人は水中に居るといふ怪物で、泣けば涙が珠となるといふ。

【大意】 紅蘭に露の凝る時は、漢水の邊の美女が、紅粉を施したやうで、その露の滴り落つる時は、鮫人が泣いて珠を滴らすやうである。

曲驚楚客秋絃馥。夢斷燕姬曉枕薰。 蘭氣入輕風。直幹。

秋



【語釋】○曲。幽蘭の曲。○楚客。楚國の人。○燕姬。鄭の文公の妾。夢に天より蘭を授けられたといふ故事。

【大意】蘭の芳ばしい香は、そよ風と共に、幽蘭の曲を奏する楚客を襲うて、秋の琴の緒もかうばしく、燕姬が夢を驚かしては、さめての後も、餘香曉の枕上に薫る。

ぬし知らぬ香はにほひつゝ、秋の野に誰がぬぎかけしふぢ袴ども。素性

【語釋】○香はにほひつゝ。古今集には「香こそ匂へれ」とある。

【大意】この藤袴は、誰がこの秋の野に脱いでかけた藤袴であるぞ。いゝ香が頻りにして、その主がゆかしく思はれる。

槿 ○槿はムケゲ。又アサガホと訓む。

松樹千年終是朽。槿花一日自爲榮。放言詩。

【大意】松は千年の壽を保てども、しまひには朽ちてしまふし、槿の花は、朝に開いて夕に萎むけれど、これも亦一日の榮で自足する。

來而不留、薤藪有拂晨之露。去而不返、槿籬無投暮之花。

願文。前中書王

【語釋】○薤藪。薤はニラ、藪は丘。○投暮。夕暮まで保つ。

【大意】この世に生まれ來る人、永久に留まることの出來ないのは、岡の上の薤に置いた曉の露が忽ち乾き消える如く、また死んだ人の、還つて來ないのは、槿の籬に、夕までもつ花のないのに等しい。

おぼつかなたれとか知らむ秋霧のたえまに見ゆる朝がほの花。道信

【大意】さてもはつきりしないことよ、誰と見定めようか、明けゆく空にたなびく秋霧の絶え間から、かすかに見えるあの朝顔は、と、朝顔を人の顔に取りなした。

朝がほをなにはかなしと思ふらむ人をも花はさこそ見るらめ。同

【大意】夕を待たぬ朝顔の花を、人は何ではかないものと思ふであらう。人の世にあるも朝夕を待たぬ習だから、朝顔の花の方でも、人をはかないものと見るであらう。

前栽 ○庭前の植木。また植込み。

多見栽花悦目儔。先時豫養待開遊。栽秋花。菅三品

秋

道信 藤原氏。太政大臣爲光の子。左近衛中將。正暦五年卒した。



【語釋】この句は次の句と合はせて、一篇の絶句である。

自吾閑寂家僮倦 春樹春栽秋草秋 同

【大意】多く世上の花を賞翫する人を見るに、その時節に先だつて培養し、花の咲くを待つて遊ぶ。併し、自分は閑寂を事とし、家の召使の者も事に倦んでゐるから、その花の咲く折々即ち春の樹は春、秋の草は秋に移し植えて翫ぶのみである。

閑思看汝花紅日 正是當吾鬢白時 初植花樹詩 保胤

【大意】今この樹を植ゑるが、これが盛に紅の花を開く頃は、わが髮の毛の白くなる頃であらう。

曾非種處思 元亮 爲是花時供 世尊 我種菊 菅

【語釋】○種處 菊を栽ゑた處。東籬の下か。陶潛は菊を東籬の下に植ゑた。○元亮 陶潛の字。○世尊 釋迦佛のこと。

【大意】今この菊を植ゑるのは、陶淵明の風流を思つて、愛翫する爲ではなく、この花の咲く時、採つて佛に奉るためである。

塵をだにすゑじとぞ思ふうゑしよりいとわがぬる常夏の花 射恒

【大意】とこなつの花といへば、わが妻と共に寝る床のやうに、この花を植ゑてから、塵さへもすゑまいと秘藏する花だから、折角の御所望なれど、折つては差上げられない。

花により物をぞおもふ白露のおくにもいかゞあらむとすらむ。

【大意】花を大切に思つて、露のおくにも、色がかはりはしまいか、どうであらうと、花故にさまざまと心づかひがされる。

紅葉 附落葉

不堪紅葉青苔地 又是涼風暮雨天 秋雨中贈元九 白

【大意】青苔の蒸した地上に、紅葉の散り積つたさまが物あはれなのに、その上冷やかな風が吹きすさんで、暮れゆく空に、雨さへ降り添うたのが、わりなく慰めがたい。

黄纈纈林寒有葉 碧瑠璃水淨無風 泛太湖書寄微之 白

【大意】太湖の四面の木葉は、色づいて恰も黄のしほり染の林の如く、寒いけれどなほ多少の葉を残し、湖上の水は碧い瑠璃のやうな色をなし、清淨で風も立たない。



洞中清淺瑠璃水。庭上蕭條錦繡林。

瓶池頭紅葉。保胤

【大意】 洞の中には浅く清らかな、瑠璃のやうな水を湛へ、庭前には秋色物さびしく、錦や繡に似た林がある。

外物獨醒松澗色。餘波合力錦江聲。

山水唯紅葉。以言

【語釋】 ○外物 紅葉以外の草木。○獨醒 屈原の漁父辭に「衆人皆醉、我獨醒」とあるをかりて、衆木の皆紅なのは衆人の酔へる如く、松の獨り緑なのは屈原の獨り醒めたるに似てゐるとの意。○松澗 松に圍まれた澗水。○餘波合力 紅葉を散らした風のなごりが、波を起して、紅葉の散る音と互に力を合はせる。○錦江 蜀の成都にあり、蜀人の錦を洗ふ名所。【大意】 山水皆紅葉だから、その外に獨り醒めて見えるのは、緑の松澗の色のみである。又その水の餘波の紅葉を洗ふのは、蜀人に力を合はせて、錦江に錦を濯ぶ聲と聞える。

しら露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず紅葉しにけり。 貫之

【大意】 もる山（近江國野洲郡）といふだけあつて、此處の紅葉は、よそと違つて、露や時雨が漏つて、梢ばかりか下葉までも、みな色づいた。守山に漏るをいひかけたもの。

むらくの錦とぞ見るさは山のは、その紅葉きり立たぬまは。 清正

【語釋】 ○むらくの錦 ちらは端・匹などを訓む。紅葉の盛んな色が、何匹何端とも知れぬ錦を晒すやうに見える意。○は、そ 柞の木をいふ。○きり立たぬ 霧立たぬに、錦を切り裁たぬを通はせた。

【大意】 佐保山（大和國添上郡）の柞の森の紅葉したのを、まだ霧の立ちかくさぬ間に見渡せば、恰も裁ち切らぬ錦を幾反も晒したやうである。

落葉

三秋而宮漏正長空階雨滴。萬里而鄉園何在落葉窓深。 愁賦

【語釋】 ○三秋 秋になつての三月目、即ち九月。○空階 人影もない寂しい階段。

【大意】 秋更けて、宮中の漏刻は時の移るを示せど、夜は明けないうで、獨りつくづく物思ふ折しも、空階にしめやかな雨の滴る音がし、又萬里の他郷に在つては、故郷の地を望めども、そことも見えず、空しく落葉の窓をうつ聲を聞く時、實に憂愁に堪へない。

秋庭不掃携藤杖。閑踏梧桐黃葉行。 晚秋閑居。

白

【大意】 時々閑に乗じて、藤の杖を携へ、掃除しない庭の、梧桐の落葉を踏み鳴らして散歩する。



城柳宮槐漫搖落

秋悲 不到貴人心

早入皇城一贈王留守僕射

【大意】 宮城の柳や槐も秋風にむやみに揺られ落つれど、時めく貴人の心には、秋の悲哀も感じないであらう。

梧楸影中一聲之雨空灑 鷓鴣背上數片之紅纔殘

葉落風枝疎

【語釋】 ○一聲之雨 梧楸の葉の落ちる音を雨に譬へた。○空灑 音ばかりで眞の雨でないから空しくいつた。○鷓鴣 廣東地方に棲む鳥。○背上數片之紅 鷓鴣は甚だ霜露を畏れ、飛ぶ時は必ず木の葉を啣んで、自ら背を蔽ふといふ。

【大意】 梧や楸などの、風に散る影の閃々と共に、その音は雨の降るやうに聞え、木々の梢は散り落ちて、鷓鴣の背に載せた數片の木の葉の紅ばかりが、やつと残つてゐる。

樵蘇往反杖穿朱買臣之衣

隱逸優遊履踏葛稚仙之藥

落葉

山中路一序

高相如 高丘 氏。天德・應和 の間の人で、慶 滋保胤と並び稱 せられた。

【語釋】 ○樵蘇 木を伐り、草を刈る賤の男。○朱買臣之衣 漢の朱買臣が立身して錦を着て故郷に歸つた故事によつて、錦繡を朱買臣の衣といつた。○隱逸 世を遁れて山谷に隠る人。○葛稚仙之藥 葛稚仙は葛洪字は稚川といふ。晉人。羅浮山に在つて七年丹藥を煉つた

といふ。丹藥の色は赤いから、紅葉によそへた。

【大意】 落葉の散り積つた山中の路は、見渡す限り眞紅で、木こりや草刈の往復にも朱買臣の錦の衣を、杖の先に穿つて往來し、隱者が心まかせの散歩するには、葛稚仙が七年も煉つた丹藥の上を踏み歩く。

隨嵐落葉含蕭瑟 澗石飛泉弄雅琴

秋色變山水

【大意】 山風のまゝに散る紅葉の葉は、秋のさびしさを含み、石に流れそゞぐ瀧の音は、みやびた琴を弄ぶに似てゐる。

逐夜光多吳苑月 每朝聲少漢林風

秋葉隨日落 後中書王

【語釋】 ○吳苑 戰國時代の吳王の園苑。○漢林 漢の上林苑。  
【大意】 秋風に、日を逐うて落葉する故に、吳苑の月光も夜を追うて地上に映ること多く、漢林の風も、朝毎にその音をきくことが稀になつてゆく。

あすか川もみぢばながるかづらきの山の秋風ふきぞしぬらし。

【語釋】 ○あすか川 大和國高市郡飛鳥川。○かづらきの山 大和・河内に跨がる葛城山。



神無月しぐれとともにかみなびの森の木はふりにこそふれ。 貫之

【語釋】 ○神無月 陰曆十月。○かみなびの森 神名備山と同所にある。○ふりにこそふれ 時雨の縁で、木の葉の散るのを降るといつた。

見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり。 貫之

【語釋】 ○よるの錦 朱買臣が會稽太守に任ぜられて、天子に拜謁した時、天子が、立身して故郷に歸らないのは、錦を着て夜行くが如しといはれたといふ故事。人も見ずに散つてしまふ深山の紅葉をそれに譬へた。

鴈 附歸雁

萬里人南去。 三春鴈北飛。 不知何歲月。 得與汝同歸。

南中詠鴈。 韋承應

【大意】 三春の候、雁が北に歸る時、自分は遠く南方に行かうとする、何れの歲月になつたら、汝歸雁のやうに、再び故郷に歸ることが出来るであらうか。

潯陽江色潮添滿。 彭蠡秋聲鴈引來。登江州清輝樓。 劉禹錫

韋承應 唐の人。黃門侍郎となつた。

【大意】 樓に上つて遙かに望めば、潯陽江(江西省)の水色は、潮がさし添へて滿々と湛へ、彭蠡湖(江西省鄱陽湖のこと)上の秋風の聲は、鳴き渡る雁が持つて來る。

四五朶山粧雨色。 兩三行雁帖雲秋。雋陽道中。 杜荀鶴

【語釋】 ○四五朶山 四つ五つの山。朶は枝。○帖雲 雲に文字を點した。

【大意】 前方に見える四つ五つの連山は、雨に霑されてあざやかな色を呈し、空を飛びゆく兩三行の雁が、恰も雲に文字を書きしるす秋である。

虛弓難避未抛疑。 於上弦之月懸。 奔箭易迷猶成誤。 於下流之

水急。寒雁識秋天。 後江相公

【語釋】 ○虛弓 上弦の月の形の弓に似て、眞の弓ならぬをいふ。○上弦之月 陰曆八九日頃の月。弓張月。○未抛疑 雁が弓張月を見て、弓でないかとの疑をまだ捨てない。○奔箭易迷 山川の疾く流れるのを箭の飛ぶのかと迷ひ思ふ。

【大意】 秋夜一點の雲もない空に飛ぶ雁が、上弦の月と、奔流とを見て、我を射ようとする弓と箭かと、疑ひ迷うて行くであらう。

雁飛碧落書青紙。 隼擊霜林破錦機。秋暮傍山行。 田達音

秋

杜荀鶴 唐の人。九華山人と號した。



【大意】 雁の大空に飛びつれてゆくさまは、青い紙に文字を書いたやうで、隼が霜枯の林に羽ばたきすると、紅葉がはら／＼と散つて、錦の機を破るに似てゐる。

碧玉粧箏斜立柱 青苔色紙數行書

天淨識三賓鴻。管三品。

【語釋】 ○青苔色紙 水中の青い苔を以て作つた色紙。

【大意】 晴れ渡つた秋の空に、雁の連なりゆくのを見れば、青い玉で飾つた箏に、柱を斜に並べ立てたやうであり、又青苔の色紙に數行の文字を書いたのに似てゐる。

雲衣范叔羈中贈

風櫓瀟湘浪上舟

賓雁似故人。後中書王。

【語釋】 ○范叔羈中贈 魏の須賈が范雎の貧しげな姿を憐み綈袍を贈つたといふ支那古代の故事。○風櫓 櫓聲の風に響くをいふ。○浪上舟 楚の屈原が讒にあひ退けられて、澤畔にさまよつた時、漁夫がこれを憐み忠告したといふ故事。

【大意】 雲の雁をつゝんで衣のやうに見えるのは、須賈が范雎に贈つた綈袍かと疑はれ、又その鳴き渡る聲の風に響いて櫓聲のやうに聞える時、瀟湘(川の名)に棹さして、屈原に忠告した漁夫の舟を想ひ起す。

秋風にはつかりがねぞ聞ゆるたが玉づさをかけてきつらむ。

友則

【語釋】 ○玉づさ 書簡。雁に書簡を託した事は漢の蘇武の故事。

【大意】 秋風に、はや雁の聲が聞えるが、この雁は誰の書簡を持つて來たのであらう。

歸 鴈

山腰歸鴈斜牽帶 水面新虹未展巾

春日閑居。都在中。

【大意】 山のあたりを連れ立つて飛んでゆく雁は、山の腰に斜に帯をしたやうで、新に立つた水上の虹は、まだ小さくて、十分には手巾を展げないやうに見える。

春がすみたつを見すて、ゆく鴈は花なき里にすみやならへる。伊勢

【大意】 春霞のたつを見すて、歸つてゆく雁は、花もない土地に住みならつて、今に花が咲くといふことを知らぬのであらうか。

蟲

切々暗窓下 嚶々深草裏 秋天思婦心 雨夜幽人耳

秋蟲。白。

【語釋】 ○切々 蟲の切りに鳴くをいふ。○嚶々 蟲のすだくをいふ。

秋



【大意】 暗い窓の下深い草の裏などに鳴く蟲の音は、秋の空に物思ふ女や、雨の夜に世をはかなむ人の耳には、いかに聞えるであらうか。

霜草欲枯蟲思苦。風枝未定鳥栖難。答夢得秋夜獨坐見贈。

【大意】 霜に惱める草の枯れようとするにつれて、蟲の鳴く音は、いよ／＼苦しげになり、木枯の風に木の枝が揺られて定まらないので、鳥が塒を占めかねる。

床嫌短脚蝻聲鬧。壁厭空心鼠孔穿。秋夜。野相公。

【大意】 臺脚の短い臥床は、鳴く蝻の聲が近くやかましく聞えていやであり、又中のうつろな壁は、鼠が孔を穿ち易く、夜寒の風が吹き通して厭はしい。

山館雨時鳴自暗。野亭風處織猶寒。蝻聲入微館。直幹。

【大意】 山中の館舎に雨の降る時、蝻は鳴いても微かにして、野中の亭に風吹く處、蝻が頻りに機を織れど、なほ夜寒に堪へない。蝻の鳴く聲は機織る聲に似てゐるから、織るといつた。

叢邊怨遠風聞暗。壁底吟幽月色寒。同前題。

【大意】 叢のほとりに、蝻が秋を怨んで鳴く聲が風にはのかに聞えて暗く、壁の下に蟲の鳴く聲はかすかで、月の色も寒さうである。

今こむと誰たのめけむ秋の夜をあかしかねつ、まつ蟲のなく。

【語釋】 ○誰たのめけむ 誰が頼みにさせたのであらう。○まつ蟲 今の鈴蟲。まつに待つをかけた。

【大意】 誰が今來るよと頼ませたのであらう、松蟲はそれを待ち續けて、夜通しあはれに鳴いてゐる。

きり／＼すいたくな鳴きそ秋の夜の長きうらみは我ぞまされる。忠房

【語釋】 ○秋の夜の長きうらみ 秋の夜のやうな長い怨。

鹿

蒼苔路滑僧歸寺。紅葉聲乾鹿在林。宿靈林寺。溫庭筠。

【大意】 青苔の路は滑かで、それを踏んで寺に歸る僧の影が見え、散り布いた紅葉のかさ／＼と鳴る音に、鹿の林中にさまよふのが知られる。

秋

溫庭筠 字は飛卿。唐の詩人。琴笛にも巧みであつた。

忠房 藤原氏。



暗遣食萍身色變

更隨加草德風來

魏西府獻白鹿詩。紀新言

【語釋】○食萍云々 詩經に鹿が野の草を食ふとある。○加草德風來 孝經に、德鳥獸に及べ

ば白鹿が現はれるとある。又論語に、君の德化は風の草を吹き靡かすが如しとある。

【大意】この白鹿は我が君の聖德の廣大なのに感じ、白い萍を食うて、いつとなくその身を變じ、更に我が君の德風を慕うて來たものである。

もみぢせぬ常磐の山にすむ鹿はおのれ鳴きてや秋を知るらむ 能宣

【大意】紅葉してこそ始めて秋は知るべきであれど、常磐山はその名のやうに紅葉しない處だから、この山に住む鹿は、自分が鳴いて、始めて秋になつたのを知るであらう。

ゆふづくよをぐらの山になく鹿の聲のうちにや秋はくるらむ 貫之

【語釋】○ゆふづくよ 小暗といひかけた小倉山の枕詞。

【大意】今日は九月晦日で、この小倉山に鳴く鹿の聲の、まだ終らないうちに、秋は暮れてゆくであらうか。

露

可憐九月初三夜 露似眞珠月似弓 暮江吟。白

【大意】九月の月初の三日の夜、露は眞珠のやうに輝き、三日月は弓のやうに天に懸つてある景色は、眞に愛すべきである。

露滴蘭叢寒玉白 風銜松葉雅琴清 秋風風然漸。源英明

【大意】露は蘭の叢に滴つて、冷やかな玉のやうに白く、風は松の葉に籠つて、琴を弾するやうに、その聲が澄んでゐる。

さをしかの朝たつをの、あき萩に玉と見るまでおけるしら露 家持

【語釋】○さをしか 牡鹿。さは美稱。○をの 野。「を」は美稱。

霧

竹霧曉籠銜嶺月 蘋風暖送過江春 度庾樓曉望。白

【語釋】○銜嶺月 殘の月の、山の端に落ちかゝつた形。○蘋風 水邊の風。

【大意】竹林の霧は、山の端に入らうとする有明の月を立ち籠め、水草のあたりを吹く風は暖かで、江を渡る春を送つて來た。

家持 大伴氏。大納言旅人の干。中納言、持即征東將軍。延暦四年薨じた。



雖愁夕霧埋人枕。猶愛朝雲出馬鞍。山居秋晚。後江相公。

【大意】 山中の住居は深い夕霧が、人の枕を埋めるばかり立ち昇るのはいぶせく思はれるけれど、又山路をゆく馬の鞍のあたりから、朝の雲の立ち昇る景色はやはり面白い。

秋霧のふもとをこめてたちぬれば空にぞあきの山は見えける。深養父

誰がための錦なればか秋霧のさはの山べをたちかくすらむ。友則

【大意】 一體誰に見せようとして織り出した紅葉の錦なのでか、秋霧は佐保山のあたりを立ち籠めて隠すのであらう。

擣衣

八月九月正長夜。千聲萬聲無了時。開夜砧。白

【語釋】 ○千聲萬聲 砧の音である。

誰家思婦秋擣帛。月苦風淒砧杵悲。開夜砧。白

【語釋】 ○帛 絹の總名。○砧杵 砧は衣を擣つ臺の石、杵は打つ槌。

【大意】 秋の夜衣をうつのは、誰が家の遠地にある夫を思ふ婦人であらう。わけて、今宵は月さえわたり、風の音もすこいから、砧の杵の音はいよゝゝ悲しい。

北斗星前横旅雁。南樓月下擣寒衣。同前。劉元叔

【語釋】 ○南樓月 晉の庾亮が南樓に登つて月を翫んだ故事。

【大意】 北斗星の輝く前を、北から來た雁が飛びゆき、南樓の下に、月光を浴びて冬の衣を擣つ。

擣處曉愁聞月冷。裁將秋寄塞雲寒。風疎砧杵鳴。曹篤茂

【大意】 胡國の戌で久しく歸らぬ夫に贈る爲に、衣を擣つて曉になるまゝに、聞の内を照らす月光のすさまじいのを愁へ、胡國は北方がから、そのとりでに靡く雲も秋から寒からうと、衣を裁縫して贈る。

裁出還迷長短製。邊愁定不昔腰圍。擣衣詩。直幹

【大意】 胡塞にある夫の爲に、衣を裁ちはじめたが、夫は邊鄙の軍中の苦勞のため、身體も瘦せ細つたであらうから、昔の腰まはりの寸法ではどうであらうかと、長短の製法に迷うた。

秋

劉元叔 唐の人。高宛縣の令。

深養父。フカヤブ。清原氏。内蔵允。



風底香飛雙袖舉、月前杵怨兩眉低。惜衣詩。後中書王

【大意】 風につれて衣を掃つ袖のあがるたび毎に、焚き染めた袖の香が四邊に匂ひ散り、又月に向つては遠人を懐うて、打つ杵の音も物悲しく、兩方の眉も垂れて、力なき風情である。

年々別思驚秋雁、夜々幽聲到曉鷄。同前。後中書王

【大意】 秋となつて、夫のゐる胡國の方から雁の來る頃となれば、毎年別離の情に驚かされ、秋の夜々を眠りもやらで、砧を掃ちつゝ、曉の雞を聞くに至る。

から衣うつこゑきけば月きよみまだねぬ人を空にしるかな、買之

【語釋】 ○から衣 からは美稱。○空にしる 推し量つて知る。

【大意】 夜更けにはからず衣掃つ音の聞えるので、自分の外に、この月のよさに、まだ寝ない人もあつたよと推しはかり知るよ。

冬

初冬

十月江南天氣好、可憐冬景似春華。早冬。白

【大意】 時ははや十月で冬の季節なれど、江南(揚子江の南方の總稱)の天氣は殊によく、冬ながら野邊はまだ草も枯れはせず、春のやうにうるはしいのが面白い。

四時零落三分減、萬物蹉跎過半凋。初冬即事。延喜御製

【語釋】 ○零落 物の衰へること。○三分減 四時のうち、春夏秋は過ぎて、冬ばかり残つてゐるのをいふ。○蹉跎 時を失ふこと。

床上卷收青竹簟、匣中開出白綿衣。驚冬。菅三品

【大意】 夏の、床の上に敷いてゐた青々とした竹簟を巻き收め、衣箱の中から白い綿入れ衣を取り出して、寒さの用意をする頃となつた。



神無月カミナふりみふらずみ定めなきしぐれぞ冬のはじめなりける。 賈之  
【大意】 十月頃の習ひで、降つたり晴れたりして定まりのないこの時雨こそは、やがて冬のはじめと思ひ知つた。

冬夜

一盞寒燈雲外夜。 數盃溫酎雪中春。

和季中丞與季給事、山居雪夜同宿小酌白。

【語釋】 ○雲外夜 雲の上遙かに住む山中の夜。 ○溫酎 あたゝめた酒。

【大意】 山が高く、雲が脚下に生ずる處、一皿の燈光の影寒い夜、故人相會して數盃の燭酒を飲めば、雪の中にも春にあつた氣がする。

年光自向燈前盡。 客思唯從枕上生。

冬夜獨起。 尊敬。

【大意】 歲月の移りゆく影は寒夜の燈と共に盡きたのにひきかへ、旅中の感傷はひたすら臥床の中にあつて起る。

思ひかねいもがりゆけば冬のよの河かせ寒みちどり鳴くなり。 賈之

【大意】 冬の夜、思ひに堪へかねて、妻の許に出てゆくと、その道は川邊傳ひで、川風の寒さに、千鳥が物寂しく鳴くわ。

歲暮

寒流帶月澄如鏡。 夕吹和霜利似刀。

江樓宴別。

【語釋】 ○和霜 霜まじりに吹いて。

風雲易向人前暮。 歲月難從老底還。

花下春。 良春道。

【語釋】 ○風雲 時節の意。 ○老底 老後。

【大意】 時節は人の前路に向うて暮れ易く、光陰は、一たび老境に入つては、再び還ることはない。

ゆく年のをしくもあるかなます鏡見る影さへに暮れぬと思へば 賈之

【語釋】 ○ます鏡 ますみ鏡の約。磨き澄ました鏡。

【大意】 年ばかりか、鏡にうつる我が姿までが、老いさらばうて、わが一生ももうお仕舞だと思はれるにつけて、暮れゆく年の惜しくも思はれることよ。



爐火

黃醅綠醕迎冬熟、絳帳紅爐逐夜開。

戲招諸客白

【語釋】○黃醅 濁酒。○綠醕 清酒。○絳帳 赤い絹のとばり。○紅爐 火のもえる爐。

○逐夜開 夜毎に爐を開いて客を招く。

看無野馬聽無鶯、臘裏風光被火迎。

火是臘天春。管三品

【語釋】○臘裏 十二月の内。次と合はせて一首の七言絶句。

此火應鑽花樹取、對來終夜有春情。

同。管三品

【語釋】○此火 この春情を生ずる爐火。○鑽花樹 昔は木を鑽つて火を出した。

【大意】十二月は、野外を見ても、春のやうに、かげろふの燃えるのもなく、花の枝に鶯の囀ることもないが、只熾んに焼く爐火に對つて居れば、終夜春の心地するによつて見れば、この火は大方春の花の木を鑽つて出したものであらう。

多時縱醉鶯花下、近日那離獸炭邊。

火是臘天春。

【語釋】○多時 他時に同じい。いつか。○獸炭 獸の形に作つた炭。

【大意】春の頃には鶯や花を愛玩して木蔭に酔ひ臥したこともあつたが、この頃の寒空では、どうして、爐邊の獸炭を離れて、野外に遊ぶことが出来ようぞ。

埋火のしたにこがれし時よりもかくにくまるゝをりぞ悲しき。樂平

【語釋】○かくにくまるゝ かく悪まるゝに、爐の角に組まるゝをかねた。

【大意】埋火が炭の下にあつて燃えるやうに、心の内で思ひ焦れた悲しみよりは、そのことを言ひ出した甲斐もなく、却つてその人にかう嫌ひにくまれる時は、一入悲しさを増す。

霜

三秋岸雪花初白、一夜林霜葉盡紅。

般若寺別成公。温庭筠

【語釋】○花初白 蘆荻の花の白いのである。○葉盡紅 櫛の葉の紅である。

萬物秋霜能壞色、四時冬日最凋年。

歲晚旅望。白

【大意】秋の霜が降つては、草木悉く生色をそこなはれ、多となれば四つの時のうち、一番の歲月の窮まりで、人を悲しませる。



聞寒夢驚或添孤婦之砧上。山深感動先侵四皓之鬢邊。

青女司霜賦。紀納言。

【語釋】○四皓 前漢の時の四人の老賢者。皓は白髪をいつた。

【大意】夜寒の間に夢の覺めた時、霜は、獨り家に残つてゐる婦人が、夫の爲に搗つ砧の上に、ふと降り添ひ、又深山で寒氣の動く時、霜はまづ彼の四皓の鬢髪をおかして眞白にする。

君子夜深聲不警。老翁年晩鬢相驚。

早霜。晉。

【大意】夜深うして、霜がひどいから、君子の鶴は聲を飲んで鳴かず、老翁は歳まさに暮れようとするに當り、霜の眞白なのを見て、わが鬢髪もこんなであらうと驚く。

聲々已斷華亭鶴。歩々初驚葛履人。

寒露凝霜。晉三品。

【大意】段々と華亭の鶴の、霜をいたみて聲を立てず、葛の履をはいた人の、歩むにつれて、履が冷やかかのに、初めて霜の降つたのを知つて驚く。

晨積瓦溝鴛變色。夜零華表鶴吞聲。

同前題。紀納言。

【語釋】○瓦溝 瓦で葺いた屋根の溝。その棟は雄瓦と雌瓦と並べて葺く故に、鴛鴦瓦といつ

た。○零華表 華表は鳥居。遼城の華表に鶴の居た故事。

【大意】晨に霜が瓦溝の上に積れば、鴛鴦の瓦も色を變じて白く、夕に遼城の華表に降り積れば、鶴も聲を呑んで鳴かぬ。

夜を寒みねざめてきけばをしぞなく拂ひもあへず霜やおくらむ。

【大意】夜が寒さに目覺めてきけば、鴛鴦が鳴くわ、大かた拂ひも切れぬ程霜がひどく置くからであらうか。

雪

謝觀 廣の人。

曉入梁王之苑雪滿群山。夜登庾公之樓月明千里。

白賦。謝觀。

【語釋】○梁王之苑 漢の梁の孝王の兔園。○群山 兎園には天下の名山を擬して多く山を築いた。○庾公之樓 晉の庾亮が月夜南樓に上つた故事。

銀河沙漲三千界。梅嶺花排一萬株。

雪中即事。白。

【語釋】○三千界 廣大な形容。もとは佛語。三千大千世界の略。

【大意】野も山も見える限り雪で、恰も天の川の白砂が三千世界に漲りわたる如く、又、大庾

全



嶺（梅嶺）に萬株の梅花が咲き亂れたやうである。

雪似鵝毛飛散亂。人被鶴毳立徘徊。白 酬令公雪中見贈。

【語釋】 ○鵝毛 鵝鳥の羽毛。○鶴毳 鶴の羽毛で作つた裘。鶴のけごろも。

或逐風不返如振群鶴之毛。亦當晴猶殘疑綴衆狐之腋。春雪賦。

紀納言

【大意】 雪の風を逐うて、紛々として飛んで返らないさまは、多くの鶴が羽毛を振ふやうで、又空の晴れた後に、あちこちと消え残つてゐるのは、多くの狐の白い腋毛で綴つた裘かと思はれる。

翅似得群栖浦鶴。心應乘興棹舟人。池上初雪。村上御製。

【大意】 雪の降り積つた時は、池に棲む白鶴の翅は、多くの友を得て浦に栖む鶴かと思はれ、又この雪を賞する人の心は、雪の夜興に乗じ、舟に棹さして故人を訪うた晉の王子猷の氣持であらう。

立於庭上頭爲鶴。坐在爐邊手不龜。客舍對雪。

【語釋】 ○頭爲鶴 雪が降りかゝつて、頭が鶴のやうに白くなる。○手不龜 手がかじかまな

班女閨中秋扇色。楚王臺上夜琴聲。題雪。尊敬。

【語釋】 ○楚王臺 楚の襄王が遊んだ雲夢臺。○夜琴聲 楚王は雲夢臺で琴を弾じて廻雪の曲を奏した。

【大意】 雪の眞白なのは、班女が秋扇にたとへた團雪の色ともいふべく、又風の爲に翻る聲は、楚王が雲夢臺で奏する夜琴の聲に似てゐる。

都にてめづらしく見る初雪のよしの、山にふりにけるかな。景明

【大意】 都では初雪といつて、皆人の珍しがる雪も、この吉野は深山で雪が早いから、何の珍しげなく、こと舊りたながめである。と、雪の降るに物の舊る意を通はせた。

みよしの、山のしら雪つもるらし古郷さむくなりまさるなり。是則

【語釋】 ○古郷 故京の地をいふ。こゝは奈良をさす。

雪ふればきごと花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし。友則

冬

景明 源氏。

是則 坂上氏。  
延長二年加賀介  
となつた。



【語釋】 ○きごと 萬の木毎。○わきて 區別して。

氷 附春氷

氷封水面聞無浪。雪點林頭見有花。

臘月獨興。

霜妨鶴唳寒無露。水結狐疑薄有氷。

狐疑氷閉波聲。相如。

【語釋】 ○狐疑 狐は疑深いから、氷の張つたのを見ると、汀によつて水音を聞き、水音がせぬと、氷の厚いことを知つて渡り、さうでないかと渡らないといふ。

【大意】 寒氣が烈しい爲に、露も悉く鶴の唳く音を止むる霜となつて形を見ず、水も狐が疑ふほどの氷となつたれど、さすがにまだ薄い。

おほぞらの月のひかりのさむければ影見し水ぞまづこほりける。

【語釋】 ○影見し水 夏の頃その影をうつして、涼しく見えた水。

春氷

氷消見水多於地。雪霽望山盡入樓。

早春憶遊思歸南莊。

【大意】 氷が消えて、湛へた水を見たならば、地よりも廣いやうに見え、又雪が霽れて、遠い山々を望んだならば、常よりも近く見えて、悉く樓中の物のやうに見えるであらう。

氷消漢主應疑霸。雪盡梁王不召枚。

早春雪氷消。尊敬。

【語釋】 ○漢主應疑霸 漢主は後漢の光武帝。霸はその將王。王覇が滹陀河の氷が堅いといつて光武帝を護つて氷上を渡り、その難を濟うた故事。○梁王不召枚 梁の孝王が、枚乗を召して共に雪を賞した故事。

【大意】 春寒が去り、氷が全く消えたから、今日では、たとひ王覇が氷が堅いといつても、光武帝はこれを疑ふであらうし、又雪も悉く消え盡したから、梁王も觀雪に枚乗を召す事はあつまい。

胡塞誰能全使節。滹陀還恐失臣忠。

雪消氷亦解。相規。

【語釋】 ○胡塞 へびすのとりで。○全使節 蘇武が故事。○滹陀還恐云々 王覇が故事。【大意】 蘇武は胡國に使用して囚はれた時、雪を噛んで飢を凌ぎ使節を全うしたが、今日のやうに雪が全く消えては、それは出來ないであらう。又王覇は滹陀河で氷が堅いといつて大功を建てたが、今日のやうに氷が全く解けてしまつては、却つて不忠の名を得んことを恐れる。

やまがはのみぎはまさされる春風にたにの氷はけふやとくらむ。

惟正

惟正 藤原氏。中納言兼輔の子。刑部卿。



【語釋】 ○みぎはまされる 汀の水量の増したのをいふ。

霰

塵牙米、簸聲々脆、龍領珠投、顆々寒。

雪化爲霰。

【語釋】 ○塵牙米 塵は獸の名、くじか。塵の牙のやうな白米。

【大意】 霰の降るのは、塵牙のやうな白米を箕で簸るやうで、はらくと音がして脆く碎け、又龍の領の下にあるといふ珠を投げうつ如く、一つ一つ寒氣を覚える。

みやまには霰ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり。

【語釋】 ○みやま 奥山。○外山 入口の端山。○まさきのかづら 葛の一種。

【大意】 この頃外山のまさきの葛が、大層色づいて來た。これから察すると、深山の方は霰が降つてゐるらしい。

佛名

○佛名會のこと。三世諸佛の名を唱へて罪を滅す法會。

香火一爐燈一盞、白頭夜禮佛名經。

獻贈禮經老僧。

【語釋】 ○佛名經 諸佛の名號を列記したもの。

【大意】 一爐の香を焚き、一盞の燈をかゝけて、白髮の老僧が、夜なく佛名經を誦して禮拜してゐる。

香自禪心無用火、花開合掌不因春。

懺悔會作。

【大意】 煩惱を拂ひつくした我が禪心を香に代へるから、世の常の火を用ゐる煩ひなく、また花はわが合掌を以てこれに代へれば、必ずしも春を待たない。

あらずの年もくれなばつくりつる罪も残らずなりやしぬらむ 兼盛

【大意】 年の暮れゆくと共に、懺悔會の功德によつて、犯した諸々の罪も残らず消え盡すであらう。

かぞふればわが身につもる年月をおくりむかふと何いそぐらむ 兼盛

【大意】 數へて見れば、自分の身に老の積る年月なのを、何で人々は忙しげに舊年を送り新年を迎へる準備をするのであらう。

年の内につくれる罪はかきくらしふる白雪と共にきえなむ 貫之



【語釋】○かきくらし かき曇り。

卷下

雜

風

春風暗剪庭前樹，夜雨偷穿石上苔。

春日山居。輔昭。

【大意】春風が吹いて來れば、庭前の樹は知らぬ間に梢が新になり、一夜の雨は石上のいつしか新しく生えた苔に滴つて穴をあける。

入松易亂欲惱明君之魂，流水不歸應送列子之乘。

風中琴。紀納言。

【語釋】○入松 風入松の略。琴曲の名。○惱明君之魂 明君は王昭君のこと。王昭君が匈奴に適く途中、馬上に琵琶を弾じて恨を寄せた。○列子之乘 列子はよく風に御して行つたといふので、風をいつた。

【大意】琴の音の風にまじるを聞けば、松の風に似てゐる、されば入松の曲のやうで、その調



亂れやすく、王昭君の琵琶も弾き合はせ難くて、その魂を惱ますであらう。又流水の曲のやうで、そのまゝ音の行いて歸らないのは、列子の乗物である風を送らうとしてであらう。

漢主手中吹不駐。

徐君塚上扇猶懸。

北風利如劍詩。行葛。

行葛。ユキヤフデ。藤原氏。從五位下大内記。

【語釋】○漢主 漢の高祖。三尺の劍を持つて天下を取る」といふ高祖の語がある。○徐君塚 上 吳の季札が、徐君の墓に、その寶劍を懸けて去つた故事。

【大意】 北風の鋭いこと劍のやうであるが、もとより風の劍だから、漢主の手の中にも駐らぬ。しかし季札が寶劍を懸けたといふ徐君の塚の上には吹きあふつて、今も樹に懸つてゐる。

班姬裁扇應誇尙。

列子懸車不往還。

清風何處隱。慶保胤。

【語釋】○班姬 班婕妤。○懸車 車を廢して用ゐないこと。

【大意】 風が何處にか去つて、人々暑さに苦しむ故に、あの團雪の扇を作つた班女は定めし誇りたかぶるであらうし、列子は乗物がなくなつて、自由に往來することが出来ないであらう。

あき風の吹くにつけてもとはぬかな萩の葉ならば音はしてまし。

中務

【大意】 秋風の吹きくるにつけ、わが思ふ人の音づれぬことよ。その人がもし萩の葉ならば、必ず音は立てようものを。

ほの／＼とあり明の月の月かげに紅葉ふきおろす山おろしの風

信明

信明 源氏。公忠の子、陸奥守。

雲

竹斑湘浦雲凝鼓瑟之蹤。

鳳去秦臺月老吹簫之地。

愁賦。張說。

【語釋】○竹斑湘浦・鼓瑟之蹤 舜が崩じた後、その二人の妃が歎き悲しんだ涙を湘浦の竹に灑ぐと、竹が斑を生じ、又心を慰める爲に瑟を弾じたといふ傳説。○鳳去秦臺 簫史夫婦が簫を吹くと、鳳凰がその屋に來て止まつた、秦の穆公がその爲に鳳臺(即ち秦臺)を作つた、後夫婦は共に昇天した、といふ傳説。

【大意】 湘浦の竹は昔のやうに斑で、二妃が悲哀の記念を留め、暗澹たる雲は、二妃が瑟を弾じた跡に凝つて、哀れにもさびしい。簫史が鳳臺の跡は、たえて吹簫の音を聞くこともなく、只その臺を照らした月影のみが、昔のまゝに照り輝いて、寂しい光を放つてゐる。

山遠雲埋行客跡。

松寒風破旅人夢。

愁賦。紀齊名。

盡日望雲心不繫。

有時見月夜方閑。

幽栖。元稹。



漢皓避秦之朝望、礙孤峯之月。陶朱辭越之暮、眼混五湖之烟。

視雲知隱處賦。江以言。

【語釋】○漢皓 漢の四皓。既出(一一八頁)。○陶朱辭越 陶朱は范蠡。越王勾踐の臣。范蠡は功成つて後、五湖に浮び去つた。

【大意】 漢の四皓が、秦の亂を避けて商洛山に入るや、雲は起つて、その山上の月を碍へ、范蠡が越を辭して吳の五湖に泛ぶや、雲はその水烟にまがうて隠く。雲は昔から隱士の所在に伴なうて、その英氣を表はすといふから、いつたのである。

暫借崎嶇非戴石、空儉峻嶮豈生松。

夏雲多奇峯。都在中。

【大意】 夏雲の立ち昇るさまは、一寸さかしい山路、けはしい峯のやうに見えるけれど、眞の山でないから、石も戴かず、松を生ずることもない。

漢帝龍顏迷處所、淮王雞翅失留連。

秋天無片雲。以言。

【語釋】 ○漢帝龍顏 漢帝は漢の高祖。その居る處にはいつも雲氣があるので、呂后はそれを見て高祖の居處を知つたといふ。龍顏は天子の顔の稱。○淮王雞翅 漢の淮南王劉安が昇天した後に、棄て置いた仙藥を煉つた鼎を雞が舐めて、雲中に鳴いた故事。

【大意】 秋の空よく晴れて、天に一片の雲もないから、漢の高祖は、所在を知ることむづかしく、雲中に鳴いた淮王の雞は、空中に留り居ることが出来ないであらう。

よそにのみ見てややみなむかづらきやたかまの山の峯の白雲。 讀人不知

【語釋】 ○たかまの山 葛城山中の最高峯。

晴

鄭師丹 傳未詳

烟消門外青山近、露重窓前綠竹低。

晴爽。鄭師丹。

【大意】 門外を見れば、烟は漸く消えて、青山は常よりも近く見え、窓前を見れば、露がまだ乾かぬので、綠竹は潤うて低く垂れてゐる。

紫蓋之嶺嵐疎、雲收七百里之外。瀑布之泉波冷、月澄四十尺之餘。

山晴秋望多序。藤惟成。

【大意】 紫蓋の嶺(湖南の衡山の一峯)の嵐は淡く、七百里の外まで雲は晴れ渡り、飛泉の水は冷たく、四十餘尺の高さに月光が澄みわたつてゐる。

惟成 藤原氏。藏人左中辨となつた。花山天皇遣世し給ふに及び、從ひ奉つて僧となり、永延元年卒した、年三十七。



雲消碧落天膚解。風動清漪水面皺。

梅雨新霽。都良香。

【語釋】○天膚解 雲を皮膚に見立て、その消えゆくのをいつた。

【大意】雲は青空に散つて、天の膚があらはれ、風は清い細波を動かして、水面に皺が出来る。

雙鶴出臯披霧舞。

孤帆連水與雲消。

高天澄遠色。管三品。

【大意】高くは一雙の鶴が、沼澤(臯)の間を出て、雲霧を拂うて舞ひ上るのが見え、遠くは一つの帆船が、水天相接する邊に、雲と共に消えるのが見える。

歸嵩鶴舞日高見。

飲渭龍昇雲不殘。

晴後山川清。江以言。

【語釋】○歸嵩鶴 王子喬が白鶴に乗つて嵩山に歸つた故事。○飲渭龍 黒龍が南山から出て、渭水の水を飲んだ故事。

【大意】嵩山に歸らうとする王子喬が鶴は、今天高く舞ひ上つて、その爲に日が益々高く見え、南山を出て渭水に降つた龍は、已に天に昇つて、伴なうた雲も見えない。

かすみはれ緑の空ものどけてあるかなさかにあそぶいとゆふ。

【語釋】○いとゆふ かげろふ。遊絲。

曉

佳人盡飾於晨粧。魏宮鐘動遊子猶行於殘月。函谷雞鳴。

曉賦。賈島。

【語釋】○魏宮鐘動 昔齊王が宮中に鐘を置いて、晨に鳴らし、宮人に化粧させた。魏とあるのは誤であらう。○函谷雞鳴 函谷關は河南省にあり、秦の時代この關では、朝雞が鳴いてから、關門を開く定であつた。

【大意】魏王宮中の美人が、早く化粧する頃、曉の鐘が響き、函谷關を旅人が残月にゆく頃、

雞が鳴いて曉を告げる。

幾行南去之雁。一片西傾之月。赴征路獨行之子。旅店猶扃。

泣孤城百戰之師。胡笳未歇。

曉賦。謝觀。

【語釋】○赴征路獨行之子 旅路をゆく獨旅の人。○泣孤城云々 百戰を経て勞れきつた軍勢は、胡の境の孤城に留つて、望郷の念に堪へずして泣く。○胡笳未歇 胡人が吹き鳴らす笛は、曉になつてもまだやまず、哀れに覺える。

嚴粧金屋之中。青蛾正畫。罷宴瓊筵之上。紅燭空餘。

同賦。同作。



【大意】 裝飾を立派にした華麗な殿中で、美人はその青娥のやうな形の眉を描き、宴が終つた莊麗な席上に紅い燭火が残つてゐる。曉のさまを敍べた。

五聲宮漏初明後、一點窓燈欲滅時。禁中夜作。

【大意】 宮中の漏刻は五更を報じ、一點の窓の燈火は明滅して、夜はまさに明けんとしてゐる。

あかつきのなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや。 貫之

【語釋】 ○白露の 白露の如くの意。○おきて 露の置くといふに起くをいひかけた。女の許を曉に辭する趣である。

松

但有雙松當砌下、更無一事到心中。新昌坊閑居。

青山有雪諳松性、碧落無雲稱鶴心。寄殷堯藩。

【大意】 山々に雪が降り積つて、始めて松の霜雪に携まぬ本性を知り、空に一片の雲もなく暗

れて、立ち舞ふ鶴の心にかたよ。

養忠 藤原氏。  
木工権頭。

琴商改曲吹烟後、蕭瑟催心學雨辰。松風侵秋韵。

【大意】 常磐なる松の聲も、秋風が烟霧を吹いてより、響をかへて秋（商）の調子となり、松風の雨の音にまがふ時は、物さびしくて自然に秋の心を催す。

千丈凌雪應喻嵇康之姿、百步亂風誰破養由之射。柳化爲嵇康賦。紀納言。

【語釋】 ○嵇康之姿 晉の嵇康の風姿は曲々として孤松の獨立する如しとある。○養由之射 養由は楚人で、支那古代の弓の名人。百歩を隔て、柳の葉を射て、百發百中したといふ。【大意】 千丈の老松が、霜雪を凌いで屹立してゐるさまは、嵇康の堂々たる姿にも喩へるべく、また百歩の外にある柳の、風に亂れ動くとも、誰か養由の射を妨げえようぞ。

九夏三伏之暑月、竹含錯午之風、玄冬素雪之寒朝、松彰君子之德。

【語釋】 ○九夏 夏九十日をいふ。○錯午之風 風が涼味を送つて、暑さと涼しさと交錯する



をいふ。○玄冬素雪 多の色は黒。玄は黒色をいひ、素は白色をいふ。  
【大意】 三伏の盛夏の時には、竹が涼風を含んで暑熱を忘れ、嚴冬積雪の候には、松が君子が時變によつて徳をかへないやうな節操をあらはす。

十八公榮霜後露 一千年色雪中深。  
【語釋】 ○十八公 松をいふ。三字を合はすれば松の字になる。○一千年色 松は千年の壽ありといふ。

含雨嶺松天更霽 燒秋林葉火還寒。  
【大意】 嶺の松は風が雨の音を帯びてゐるが、空はからりと霽れ、林の葉は秋を燒く火のやうに紅いが、その火は却つて寒い。

あまくだるあら人神のあひおひをおもへば久しすみよしの松。  
【語釋】 ○すみよし 攝津國住吉郡住吉。今の大阪市住吉區。

あまくだるあら人神のあひおひをおもへば久しすみよしの松。安法

【語釋】 ○あら人神 この世に在つた人の、死後神に祭られたもの。こゝは住吉神が人代の神功皇后の時に現れたのでいふ。○あひおひ 相生ひの意。

【大意】 この住吉の浦の松は、この神の此處に鎮座し給うたと共に、生ひ出でたことを思へば、久しく年経た松であるぞ。

宗千 源氏。光  
孝天皇の皇子是  
忠親王の御子。  
從四位下右京大  
夫に至る。天慶  
二年卒した。

安法 傳未詳。  
拾遺集の作者。

竹

煙葉蒙籠侵夜色 風枝蕭颯欲秋聲。  
【語釋】 ○煙葉 烟を含んだ竹葉。○蒙籠 ほの暗いこと。

【大意】 竹の葉は烟氣濛々として、夜めいた氣色があり、涼風枝に吹けば、颯々として秋かと疑はれる聲がある。

阮籍嘯場人步月 子猷看處鳥栖煙。  
【語釋】 ○阮籍嘯場 阮籍は竹林七賢の一人だから、竹林を嘯場といつた。○子猷看處 王子猷は非常に竹を愛した人だから、竹林を看處といつた。

【大意】 阮籍が嘯く處、子猷が看る處の竹林には、その風情を愛して、人は月下に逍遙し、鳥

章孝標 字は道  
正。唐の人。



は竹林をこめる翠烟に棲む。

晉、騎兵、參軍王子猷、裁稱此君。唐、太子賓客白樂天、愛爲吾友。

修竹冬青序。  
篤茂。

【語釋】○騎兵參軍 騎兵の軍謀に參與する職。○稱此君 子猷は非常に竹を愛し、庭前に竹を栽ゑ、これを指して「可一日無此君耶」といつた。○太子賓客 唐の官職。

進 筍未抽鳴鳳管。

盤根纒點臥龍文。

禁庭植竹。  
前中書王。

【語釋】○進筍 勢鋭く地上にぬけ出た筍。○鳴鳳管 笛。笛は鳳凰の聲に象つて作つたといふ。

【大意】 筍は勢よく生え出て居れど、まだ笛を作るほどには伸びてゐず、その蟠つた根は地下に臥して、潜んだ龍の模様を成したばかりである。

世にふればことの葉しげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞなく。

【語釋】 ○うきふしごとに 竹の節毎にといふに、人の物憂き折毎にといふ意を兼ねた。

【大意】 世の中にあると、人に彼是いはれるのがつらくて、その度毎に、竹の葉がくれに鳴く

鶯のやうに、わが身も泣いてゐる。

時雨ふる音はすれどもくれ竹のなとよと、もに色もかはらぬ。 素性

【語釋】 ○よとよもに よは竹の節と節との間をいひ、それに世の意を兼ねた。

【大意】 時雨には草木が色をかへる習であるのに、この庭前の竹むらには、頻りに時雨のふる音がするのにな、どうして少しも緑の色が變らないのか。

草

沙頭雨染斑々草。水面風驅瑟瑟波。

早春憶微之。  
白。

【大意】 春雨は、汀の砂の上に、斑に萌え出た草を緑に染め、春風は、水面に瑟瑟（ひたひた）と音するさざ波をたてる。

西施顔色今何在。應在春風百草頭。

春詞。  
元稹。

【大意】 吳王夫差に愛せられた西施の美しい顔色は今何處にあるかといへば、野邊に萌え出た若草のなよやかに美しいのが即ちそれであらう。



瓢箪屢空草滋顏淵之巷。 藜藿深鎖雨濕原憲之樞。申文。直幹。

【語釋】 ○瓢箪屢空云々 論語にある顏淵の故事。箪は飯を入れる器。○藜藿深鎖云々 高士傳にある原憲の故事。藜藿はあかさ。顏淵も原憲も孔子の門人。

【大意】 一瓢の飲物も一箪の食物も屢と缺乏して、草は顏淵の住む陋巷に繁り、あかさは盛に生え茂つて、雨は原憲の戸樞を濕す。と、作者は自分を顏淵・原憲の貧乏に擬へた。

草色雪晴初布護。 鳥聲露暖漸綿蠻。春日山居。後江相公。

【語釋】 ○布護 ゆき渡る。○綿蠻 鳥のゆるくと鳴くさま。

華山有馬蹄猶露。 傳野無人路漸滋。遠草初含露。慶保胤。

【語釋】 ○華山有馬 華山は周の武王が馬を放牧した處。○傳野無人 傳野は傳險の野で、殷王武丁が賢人傳説を得た處。

【大意】 萌え出した草はまだ高く伸びないので、放牧の馬の蹄もあらはに見え、又世治つて野に遺賢もないから、野中の徑はやうく草が繁く生えるであらう。

かの岡に草かるをの子しかな刈りそ、ありつゝも君がきまさむみ秣にせむ。 人丸

【大意】 あの岡に草刈る男よ、さう刈つてしまふな、その草をそのままあらせて、君がお出でになる時の、御馬の飼葉にしよう。

おほあらしきの森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし。

【語釋】 ○おほあらしきの森 大荒木の森。山城國乙訓郡、又大和國宇智郡。

【大意】 大荒木の森の下草も、盛りを過ぎて、老いて葉が硬くなれば、馬も好いて食はず、刈り用ゐる人もない。

やかずとも草はもえなむ春日野をたゞ春の日にまかせたらなむ。 忠見

【語釋】 ○もえなむ 燃えを萌えにかけた。○春日の日 日に火をよせた。○まかせたらなむ 打任せてあつてほしい。

鶴

嫌小人而踏高位。 鶴有乘軒。 惡利口之覆邦家。 雀能穿屋。

王鳳風一賦。賈島。

【語釋】 ○鶴有乘軒 衛懿公は鶴を愛して軒に乗せ、士を重んじなかつたので、國人の怨を



買ひ、遂に狄に亡された。

【大意】 鶴が車に乗つたやうに、小人が高位に登るのを嫌ひ、雀が何時か屋を損ずるやうに、口巧者が國家を破滅させることを悪む。

同李陵之入胡、但見異類。似屈原之在楚、衆人皆醉。鶴覆群雞賦。皇甫曾

【語釋】 ○李陵 前漢の將軍。匈奴を討つて利あらず、匈奴に降つた。

【大意】 一羽の鶴が群雞の中にあれば、李陵が胡國に入つて、異形の胡人に交るが如く、又屈原が衆人の皆醉へる中に、獨り醒めて卓然たるやうである。

聲來枕上千年鶴 影落盃中五老峯。題元八溪居。

【大意】 千年の鶴の聲は枕許に聞え、五老峯(廬山中の峻峯)の影は倒さに盃中に映ずる。

清唳數聲松下鶴 寒光一點竹間燈。在家出家。

【語釋】 ○清唳 鶴の鳴く聲の清亮なのをいふ。

雙舞庭前花落處 數聲池上月明時。贈鶴詩。劉禹錫

【大意】 雙び舞ふも、數はなくも、鶴の趣である。

鶴歸舊里丁令威之詞可聽 龍迎新儀陶安公之怨在眼。

神仙策。都良香

【大意】 丁令威が鶴に化し、舊里に歸つて郷人を戒めた詞は耳に存し、陶安公が赤龍に乗り、新に儀容を作つて登仙した、その龍駕も眼に在る。

饑飈性躁念々乳 老鶴心閑緩々眠。晚春題天台山。都良香

【語釋】 ○饑飈云々 語はムサ、ピ。性躁急なのに、饑ゑてゐるので益々あわてるのである。○念々乳 念々は思々に同じい。乳は子をはぐくむをいふ。

叫漢遙驚孤枕夢 和風漫入五絃彈。霜天夜聞鶴聲。順

【大意】 鶴は霜さゆる夜は空高く傷みなくて、獨り寝の夢を驚かし、その哀れな聲、風に和しては、そゞろに白樂天が五絃彈の詩にいつた、「夜鶴憶子籠中鳴」といふ感を起させる。

和歌の浦に潮みちくればかたをなみ蘆べをさしてたづ鳴き渡る。赤人

皇甫曾 唐の人、丹の子。仕へて侍御史に至る。



【大意】 和歌の浦の干潟に多くの鶴が遊んで居たが、俄に潮が満ちて来て、干潟がなさに、群れ立って、岸の蘆洲をさして鳴いてゆく。

おほ空にむれゐるたづのさしながら思ふ心のありげなるかな。 伊勢

【大意】 大空に群れ遊ぶ鶴もさながら、君が千歳の齡あらんことを願ふやうであるとの意。賀の歌である。

あまつ風ふけひの浦にゐるたづのなか雲ゐにかへらざるべき。 清正

【語釋】 ○あまつ風ふけひの浦 あまつ風吹くを、ふけひの浦にいひかけた。ふけひの浦は和泉國泉南郡。

【大意】 今は浦におりた鶴も必ず空に飛び還る、そのやうに一旦地下人となつたとて、再び殿上に立返るに相違ないとの意を含めた。

猿

瑤臺霜滿一聲之玄鶴唳天。 巴峽秋深五夜之哀猿叫月。 清賦。謝觀。

【語釋】 ○瑤臺 仙人の居所。○玄鶴 黑鶴。鶴二千年を経れば黒色に變ると。○巴峽 四川省。揚子江の上流にある。巫峽・瞿塘江と共に三峽といふ。

【大意】 仙家に霜さえて、玄鶴が一聲高く天空に鳴き、巴峽に秋深うして、猿が悲しげに五更の月に叫んだ。

江從巴峽初成字。 猿過巫陽始斷腸。 送蕭處士遊黔南。白

【語釋】 ○江 揚子江。○初成字 江流が初めて巴字の渦紋をなす。○巫陽 巫峽の山下。

三聲猿後垂鄉淚。 一葉舟中載病身。 夜舟贈内。白

【語釋】 ○三聲猿 「巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳」の古語による。

【大意】 妻君に贈つたもので、三峽に哀猿を聞いて、思はず望郷の涙を落し、一葉の舟に覺束なくも病身を托してゐる。

胡雁一聲秋破商客之夢。 巴猿三叫曉霑行人之裳。 山水策。江澄明。

【語釋】 ○胡雁 雁は北地の鳥で、胡國の方から来る。○商客 行商人。○巴猿 巴峽の猿。

人煙一穗秋村僻。 猿叫三聲曉峽深。 秋山開望。紀納言。

【大意】 邊僻の秋の村里に、一筋の炊煙が立ち昇り、奥深い曉の山のかひに、猿がしばく叫



よ。

曉峽蘿深猿一叫。暮林花落鳥先啼。

山中感懷  
江相公

【大意】 曉の山かひの、蘿の生ひ茂つてゐる處に、猿が一聲叫び、夕暮の林に花の散る頃、啼を急ぐ鳥が啼いてゐる。

谷靜纔聞山鳥語。梯危斜踏峽猿聲。

送歸山僧  
江相公

【語釋】 ○梯 谷より谷にかけ渡した棧道。

わびしらに猿な鳴きそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ。

躬恒

【大意】 宇多法皇大堰川御幸の折によんだ歌で、猿よ、さうわびしげに鳴くなよ、辱くも法皇の御幸を得て、この山のかひといふ生き甲斐のある今日ではないか。

管絃 附舞妓

一聲鳳管秋驚秦嶺之雲。數拍霓裳曉送緱山之月。

連昌宮賦  
公乘傳

【大意】 樂人が奏する一聲の簫の音は、秦嶺（長安の南にある）にたなびく秋の雲を停めんとし、幾拍子かの霓裳（舞曲の名）の舞は夜ふけを忘れしめて、緱山（河南省）の上に傾く月を見る。

第一第二絃索々秋風拂松疎韻落。第三第四絃冷々夜鶴憶

子籠中鳴。第五絃聲最掩抑瀧水凍咽流不得。

五絃彈  
白

【語釋】 ○索々 物の消え盡きようとするさま。○秋風拂松疎韻落 一二の絃の響が、秋風が松の梢を拂ふやうに、落莫として物さびしい響を發するをいふ。○冷々 音の清亮なさま。○夜鶴憶子云々 三四の絃の響が、夜鶴が子を憶うて籠中に鳴くやうに物哀れなのをいふ。○掩抑 掩はれ抑へられる。○瀧水凍咽云々 第五絃は瀧の水の氷に閉ぢられて、快く流れないやうに、滯つた響を發する。

隨分管絃還自足。等閑篇詠被人知。

重答劉和州  
白

【語釋】 ○隨分 身分相應。

【大意】 身分相應の拙い技倆の絲竹なれど、自ら足れりとして樂み、なげやりに作つた詩文は却つて世人に知られた。



頓令燈下裁衣婦 誤剪同心一片花

開夜笛 章孝標

【語釋】○同心一片花 梅の異名を同心花といふ。又笛に落梅曲といふのがある。

【大意】 燈下に衣を裁つてゐる女をして、笛の音に心をとられて、誤つて一片の梅の花紋を裁ち切らしめる。

羅綺之爲重衣 妬無情於機婦 管絃之在長曲 怒不關於伶人

春娃無氣力 昔

【大意】 美人のなよ／＼した様子は、羅の衣もなほ重くして堪へ難い状態れば、これを織つた機織の女の心なきをにくみ、奏樂が長いと、久しく舞ふに堪へないで、心切かに伶人の早く管絃を終らないのを怒るであらう。

落梅曲舊唇吹雪 折柳聲新手掬煙

花間理管絃 昔

【語釋】○落梅・折柳 何れも曲の名。

【大意】 花間に管絃を奏して、落梅の曲を永く吹奏する時は、梅花が雪の如く、奏者の唇邊に落ちるかと思はれ、又新に折柳の曲を彈奏する時は、奏者の手に柳の枝の緑を握るかと思はれる。

相如昔挑文君得 莫使簾中子細聽

聽彈琴 惟高親王

【語釋】○相如 司馬氏。前漢の文人。○文君 卓氏。蜀の富豪の娘。

【大意】 司馬相如が琴曲を以て文君を挑んで、遂に意を遂げた例もあるから、今も、簾中の婦人たちに、子細に琴曲を聞かせて、文君のやうな過をさせるな。

ことの音に峯の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけむ

齊宮 女御

【語釋】○いづれのを 峯のをに琴の緒を通はせた。峯のをとは、峯の足の緩く引いた處。

文詞 附遺文

沈辭佛悅若遊魚銜鉤而出重淵之底 浮藻聯翩若翰鳥纓織而墜曾雲之峻

文選文賦 陸士衡

【語釋】○沈辭 意味深長な文詞。○佛悅 佛は心に思うて未だ考へ出さないこと、悦は漸く思ひ出すこと。○浮藻 浮華艶麗な文思。○織 いくるみ。矢に絲をつけて、鳥の體に巻

惟高親王 惟喬親王の誤。文徳天皇の皇子。貞觀十四年出家、寬平九年薨去せられた、壽五十四。

陸士衡 陸倕の字。



つくやうにしかけたもの。

【大意】沈痛莊重な文辭の心に浮べ難いのは、人に釣られる魚の釣を含みながら、容易に引き上げられないやうであり、浮華艶麗な文思は、ひらくと鳥のいくるみにかゝつて、空より墜ちるやうに、速に心に浮び、文字に表はすことが出来る。

遺文三十軸。軸々金玉聲。龍門原上土。埋骨不埋名。

題元少尹集。

【語釋】○龍門 山西省。

【大意】元稹の遺文三十卷、每卷の文字は悉く金玉の聲を發する傑作ばかりだ。さればその骨は龍門原上の土に埋れても、その文名は永遠に傳はつて埋れないであらう。

言語巧偷鸚鵡舌。文章分得鳳凰毛。

贈薛濤。

【大意】蜀の妓薛濤の、言語の巧妙なことは、滑らかな鸚鵡の舌をもつて來、その文章の光彩あることは、美しい鳳凰の羽毛を分け得たやうである。

錦帳曉開雲母殿。白珠秋瀉水精盤。

讀薛侍郎及第詩。

【大意】その詩の華麗なことは、雲母を以て飾つた殿舎に張りつめた錦のとばりを曉方に開けば、旭光一時にさし入つて、きら／＼と目も眩くやうで、その高潔なことは、澄み渡つた秋の空に、白珠を水晶の盤に注ぐやうである。

昨日山中之木材。取諸己。今日庭前之花詞。慙於人。

雨來花白濕詩序。鶴茂。

【語釋】○昨日山中之木 莊子にある故事。

【大意】予が資性の淺劣なことは、莊子の所謂昨日の木のやうで、不材の爲に纔に事なきを得るに、今日この庭前の花に對して、文雅の諸君が集つて、金玉の詩を作るにあつて、その詩序を作るといふは、實にはづかしい事である。

王朗八葉之孫。撫徐詹事之舊草。江淹一時之友。集范別駕之

遺文。

敬公集序。源順。

【語釋】○王朗 三國の魏の人。○八葉 八代。○徐詹事 傳詳かでない。詹事は官名。○江淹 梁の人、字は文通。○范別駕 名は羲、別駕は官名。

陳孔璋詞空愈病。馬相如賦只凌雲。

題英明集答源亞將。橘尊敬。



【語釋】○陳孔璋 魏の人。太祖嘗て病中孔璋の文を読んで、忽ち病が癒えたといふ。○馬相如 司馬相如。漢の武帝その賦を読んで、「飄々として凌雲の氣あり、天地の間に遊ぶに似たり」といつた。

【大意】 孔璋が文才は人の病を治し、相如が文辭も、讀む者をして、飄々として雲を凌ぎ、天地の間に周遊する如き想あらしめたけれど、なほ我が英明の文才には及ばない。「空」只」といつたのはその意である。

贈爵新恩銘刻石 獲麟後集世知丘

獲麟後集世知丘

過晉丞相廟一拜安樂寺以言

【語釋】 ○贈爵新恩 正曆四年菅原道眞に左大臣正一位を贈られたのをいふ。○獲麟後集 菅原道眞集（道眞の謫居後の詩文を集めたもの）をいつた。○丘 孔子の名。○安樂寺 菅公の墓所。筑前國筑紫郡にある。

【大意】 菅公の御墓に詣づるに、新に贈爵の恩典を下し給うたしるしの文は、碑石に刻まれて後世に遺り、又孔子が獲麟の事に筆を絶つた春秋のやうな菅家後集は、世に孔子が尊ばれるやうに用ゐられる。

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことの葉嬉しからまし。

讀人不知

酒

新豐酒色清冷鸚鵡盃之中

長樂歌聲幽咽鳳凰管之裏

送友人歸大梁賦 公乘億

【語釋】 ○新豐 酒の名所。○鸚鵡盃 鸚鵡の嘴の如き形の盃。○鳳凰管 鳳管に同じ。管。【大意】 貴方の歸る處は、新豐の酒の色は、鸚鵡盃の中できれいに澄み、長樂宮の歌聲は管の音に伴なうてほのかに咽ぶ。

晉建威將軍劉伯倫嗜酒作酒德頌傳於世 唐太子賓客白樂

天亦嗜酒作酒功贊以繼之

酒功贊序

【語釋】 ○劉伯倫 名は伶。名高い酒客で、嘗て酒の功德をたゞへて酒德頌を書いた。

臨風杪秋樹

對酒長年人

醉貌如霜葉

雖紅不是春

醉中對紅葉 白

【語釋】 ○杪秋 暮秋。【大意】 風に臨んだ暮秋の樹木と、酒を飲んでゐる老翁とを見れば、その色は共に紅なれど、人は少年の春でなく、紅葉もうるはしい春の花ではない。



生計拋來詩是業 家園忘却酒爲鄉

送蕭處士遊黔南

茶能散悶爲功淺 萱導忘憂得力遲

賞酒之時

【大意】茶と憂を忘れるといふ萱草とは、共に憂悶を散ずるけれど、その力が微弱で、酒の力に及ばない。

若使榮期兼解醉 應言四樂不言三

琴酒

【語釋】○榮期三樂 榮啓期は、人と生まれたこと、男と生まれたこと、長壽を得たことを三樂といつた。○兼解醉 その上に酒の味を識るをいふ。○四樂 三樂に酒の一樂を加へた。

醉鄉氏之國、四時獨誇溫和之天。酒泉郡之民、一頃未知互陰之地。

暖寒從飲酒時序。江匡衡

【語釋】○醉鄉 酔うて樂境に入るのを醉郷に入るといふ。○酒泉郡 この地に清い池があつて、その水の味は酒の如しといふ。

【大意】 醉郷に在る人の國は、四時共に溫和の天地であることを誇り、酒泉郡の人民は、しば

らくの間も寒い處を知らないであらう。

果則上林苑之所獻、含自消。酒是下若村之所傳、傾甚美。

内宴詩序。後江相公

【大意】 漢高祖が上林苑を作つた時、群臣や遠い國々から名果異樹を多く獻じた。その苑の名果だから口に含めば自然にとろける。酒は安吉州の下若村の名水で醸したもので、飲めば非常に旨い。

先逢阮籍爲鄉導 漸就劉伶問土風

入醉郷贈納言。橋相公

【大意】 醉郷の國に入るには、まづ酒仙の阮籍に逢うて道案内となし、酒客の劉伶に就いて、その土地の風俗を學ぼう。

邑隣建德非行步 境接無何便坐忘

同前。後中書王

【語釋】○建德 その住民皆無慾恬淡であるといふ、莊子にある想像の國。○無何 これも莊子にある無何有郷即ち何も無い郷で、寂絶無爲の境をいふ。○坐忘 全く雜念なく、我を忘れる。これも莊子の語。

橋相公 橋廣  
相。左大辨。寬  
平二年卒した、  
年五十四。從三  
位中納言を贈ら  
れた。



【大意】 醉郷は、莊子の所謂建徳の國に隣してゐるから、歩かずして、すぐそこに至り、その國人の如く無慾恬淡となり、また無何有の郷に接してゐるから、一度醉郷に入れば、坐ながら一切を忘れて楽しむ。

王勣郷霞縈浪脆 嵒康山雪逐流飛 醉看落花 慶保胤

【語釋】 ○王勣郷霞 醉郷の花の意。王勣は大酒家で、嘗て五斗先生傳、及び醉郷記を書いた。○嵒康山雪 これも醉郷の花の意。嵒康の醉ふや、「愧俄として玉山の頽れんとするが如し」と蒙求にある。

【大意】 酔うて水邊の花を見るに、花は霞と靡いて、忽ち水上に落ち、浪を旋つてはかなく、或は雪と見えて、流に隨うて飛ぶ。

有明のこゝちこそすれさかづきにひかげもそひて出でぬと思へば。 能重

【語釋】 ○さかづき 盃に月をいひかけた。○ひかげ 女蘿のかづらに日影をかけた。

【大意】 この盃は女蘿を添へて出したから、有明の光は空にありながら、やがて日影も出て夜も明けようとするに似てゐる。

山

賀蘭通傳未詳

黛色迥臨蒼海上 泉聲遙落白雲中 題百丈山 賀蘭通

【語釋】 ○黛色 翠の色。○泉聲 瀑布の聲。

勝地本來無定主 大都山屬愛山人 遊雲居寺贈穆三十六地主 白

夜鶴眠驚松月苦 曉颺飛落峽煙寒 題遙嶺暮烟 都在中

【大意】 夜更けて、峯の松が枝に宿つた鶴の眠さめる頃は、月の光はさやかに松の木の間を照らすであらうし、曉に颺をあさる颺が枝上より飛び下りる頃は、山峽の烟が寒氣を帯びるであらう。

紈扇拋來青黛露 羅帷卷却翠屏明 遠山暮烟斂 後中書王

【大意】 婦人が顔を隠してゐた白い練絹で張つた扇（紈扇）を抛つと共に肩があらはれ、羅の帷を巻き去ると共に屏風が見えるやうに、暮烟が収まると共に並び立てる遠山の姿が明かに見える。

衆籟曉興林頂老 群源暮叩谷心寒 秋聲在山 以言

雜



【大意】 曉に盛んに風の音（衆籟）が起つて、林の梢も秋に老いて散り失せ、夕暮に多くの溪流（群源）は巖にあたつて、谷間は身にしむほど寒い。

名のみして山はみ笠もなかりけり朝日ゆふ日のさすにまかせて。 貫之

【大意】 三笠山といへど、朝日夕日のさすに任せて、その日影を覆ひかくしもせねば、御笠といふは、たと名ばかりである。「さす」は、笠をさすに、日の刺すをかけた。

雲のあるこしの白山老いにけりおほくのとしのゆきつもりつゝ。 忠見

【語釋】 ○こしの白山 越の國の白山で、加賀の白山のこと。○ゆきつもり 行き積り。行きに雪を寄せた。

見渡せば松の葉しろきよしの山いく世つもれる雪にかあるらむ。 兼盛

山水

泰山不讓土壤故能成其高。 河海不厭細流故能成其深。

史記、李斯上三秦王書。

【語釋】 ○泰山 支那の名山、山東省。○不讓土壤 僅の土くれでも餘所へはやらない。

巴猿一叫停舟於明月峽之邊。 胡馬忽嘶失路於黃砂磧之裏。

愁賦。公乘億。

【大意】 遠く都を離れて楚國に入つたものゝ、巴峽に哀猿の鳴くのを聞いて、明月峽（揚子江の上流）のあたりに舟をとどめる時、又は胡國に入つたものゝ、胡馬が頻りに北風に嘶えて、望郷の意を表はす折、その北風が砂漠の黃砂をまき起して、進むことも出来ない時などは、その愁に堪へない。

礙日暮山青簇々。 浸天秋水白茫茫。

【語釋】 ○礙日暮山 山が重疊して、落日を遮り隔てる意。○簇々 物の群がり重なるさま。

漁舟火影寒燒浪。 驛路鈴聲夜過山。

秋夜宿臨江驛。杜荀鶴。

【語釋】 ○寒燒浪 漁火の波に映つたのが、波を燒くやうだ。寒とは秋のことだからいつた。○驛路鈴 昔他國に行く官人に、天子より賜ふ、しるしの鈴で、これを驛鈴といつた。



山似屏風江似簾。叩舷來往月明中。

泛舟。劉禹錫。

【語釋】○似簾 席を敷いたやうだ。

草木扶疎春風梳山祇之髮。魚鼈遊戲秋水字河伯之民。

山水策。江澄明。

【語釋】○扶疎 枝の四方に分布するをいふ。○山祇之髮 草木をいふ。山祇は山の神。晏子春秋に「山祇は草木を以て髮となす」とある。○河伯之民 魚鼈をいふ。河伯は河の神。晏子春秋に「河伯は水を以て國となし、魚鼈を以て民となす」とある。

韓康獨往之柄花藥如舊。范蠡扁舟之泊煙波惟新。

同前。

【大意】 昔後漢の韓康が世を遁れた山中の栖處は、今もなほ藥草の花が咲いてる、又越の范蠡が扁舟に棹さした湖上のもやと波は、いつもかはらず目新しい。

山復山何工削成青巖之形。水復水誰家染出碧潭之色。

同前。

【語釋】○青巖 青苔の生えた巖。○碧潭 緑の淵。

山郵遠樹雲開處。海岸孤村日霽時。

春日送別。直幹。

【大意】 雲の開けた處から、山間の驛(郵)の樹木が遠く見え、日の霽れた時は、海岸の孤村がかすかに見える。

山成向背斜陽裏。水似迴流迅瀨間。

春日山居。後江相公。

【大意】 向うの山は、斜にさす日影に、一面はなほ日の光をうけ、他面は已に日陰となつて、裏表をなし、山水の迅瀨の間を流れる時は、激して渦まぐで、却つて上流の方へ逆流するかと思はれる。

神なびのみむろのきしやくづるらむ立田の川の水のにされる。

高向草春。

【語釋】○神なびのみむろ 大和國平群郡の神南備山。○立田川 大和川の一部の名。

水 附漁夫

邊城之牧馬頻嘶平砂渺々。江路之征帆盡去遠岸蒼々。

曉賦。謝觀。

【大意】 邊境の城の牧場の、馬は頻りに嘶いて、四邊は唯平沙がはる／＼とし、江上を遠く行

高向草春 醍醐天皇の御代の人といへど、傳詳でない。



く帆船は皆出盡して、遙かの岸のみが蒼々としてゐる。

洲芳シウシテ 杜若抽シテ心長ナカゴラフ 沙暖カニシテ 鴛鴦舖翅眠イテ

樂府、昆明春水滂詩。

【大意】 長安の京の昆明池には、池の中洲に、芳ばしい香を放つて、杜若(藪生葎)は新芽を伸ばして生ひ出で、汀の沙の暖かなあたりに、鴛鴦は翅を敷いて眠る。

帆開ハ青草湖中去ニ 衣濕ハ黃梅雨裏行ウチニ

送客之湖南。

【語釋】 ○青草湖 湖南省。○黃梅雨 梅雨。

水驛路穿兒店月ニ 花船棹入女湖春ニ

送劉郎中赴任蘇州。

【大意】 水驛の路は兒店の水に映つた月を穿つて漕ぎ、花やかな飾舟の棹は女觀湖の春にさして入る。

菰蘆杪酌春濃酒ニ 舴艋舟流夜漲灘ニ

戲贈漁家。

【大意】 閑暇な時は、菰蘆(ゆふがほ)の杪で、春酒の濃いのを酌んで楽しみ、働く時は、舴艋(小舟)を夜の急灘に流して魚を捕る。

閑居屬於誰人紫宸殿之本主也 秋水見於何處朱雀院之

新家也ナリ 閑居樂秋水序。

【語釋】 ○紫宸殿之本主 本主は舊主で、先帝をさし奉る。こゝは宇多上皇の御事。○朱雀院之新家 宇多上皇は御讓位の後、朱雀院に移り給うた。

垂釣者不得魚暗思浮遊之有意 移棹者唯聞雁遙感旅宿之

隨時ヘルコトニ 同前。

【大意】 水を楽しむのが本意であるから、釣を垂れる者は、魚を得なくても失望することなく、却つて魚の水に浮かんで遊んでゐるのを、心の中に魚も亦心あつて水を楽しむやうに思ひ、舟を泛べて棹を操る者は、遙かに雁の鳴き渡るを聞いて、この假の旅寢の風物の、面白い折に逢うたのを喜ぶ。

沙頭刻印鷗遊處 水底摸書雁度時

題洞庭湖。

【大意】 沙の平かなあたり、鷗の遊んでゐる足痕が、印を刻んだやうに、はつきりと残り、波の靜かな時、大空を渡る雁の影が水面に映じて、文字を摸したやうに見える。



平佐幹 從五位  
下三河守。

日脚波平孤島暮 風頭岸遠客帆寒

海濱書懷。平佐幹。

【語釋】○日脚 日影のさすあたり。○風頭 風の吹くあたり。

年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふらむ。伊勢

【大意】 鏡は塵がかゝると曇るが、年経て、花をうつす鏡と澄む水は、その花のちりかゝるのを、曇るといふであらうか。塵かゝるに、散りかゝるをかけた。

みなかみのさだめてければ君が代にふた、びすめるほり川の水。好忠

【語釋】○みなかみの 水上に、その昔からの意をかけた。○すめる 水の澄めるに、住むをいひかけた。○ほり川 京都にある。これは圓融天皇が堀川院に二度行幸のあつた時の歌。

禁中

鳳池後面新秋月 龍闕前頭薄暮山

題東北舊院小奇亭。白。

【語釋】○鳳池 鳳凰池の略で、中書省をいふ。○龍闕 天子の居をいふ。

秋月高懸空碧外 仙郎靜翫禁闕間

八月十五日夜、開崔大員外翰林獨直對酒翫月、因懷禁中清景。白。

【語釋】○仙郎 仙人の男。禁中を仙境に譬へて、そこに待衛する人をいふ。○禁闕 禁中。【大意】 仲秋の月は高く青空に懸つてゐる。仙人たる崔氏は禁中にあつて、靜かにこの明月を翫ぶであらう。

三十仙人誰得聽 含元殿角管絃聲

及第日報破東平。章孝標。

【語釋】○含元殿 唐の時、宮城の正南の丹鳳門内にあつた。

【大意】 考試に應じた仙人(同輩をいふ)は三十人もゐたが、含元殿角の管絃の聲を聞き得るものは、おれ一人である。殿試に及第したものには、殿中で宴樂を賜ふからである。

雞人曉唱聲驚明王之眠 鳧鐘夜鳴響徹暗天之聽

漏刻策。都良香。

【語釋】○雞人 雞冠型の帽をかぶつて、時刻を報ずる吏。○鳧鐘 鐘のこと。昔鳧氏の人が鐘を作つたからいふ。

【大意】 雞人が曉になつたことを唱へ知らせる時は、明王は爲に朝寢し給ふことなく、又深夜に時を告げる鐘聲は暗中にも鳴り響いて、人の怠りを戒める。

朝候日高冠額拔 夜行砂厚履聲忙

聯句。

【語釋】○朝候 諸官の毎朝出仕するをいふ。○冠額拔 朝參に遅刻した人が、急いで、冠の拔

好忠 曾根氏。  
丹後掾となつた  
ので、世人曾舟  
と呼んだ。歌人。



け落ちようとするに氣のつかぬ體。○夜行 近衛司の宿直まをしに出るをいふ。○履聲忙 近衛司の夜行の時、禁庭の砂上に、その履を引くありさまの忙しいのをいふ。

みかき守るゑじのたくひにあらねども我も心のうちにこそたけ。 中務

【大意】 宮中の御垣を守る衛士は、篝火を焚くが、その輩でない自分も、心の中に戀の火を焚くことである。

こゝにだにひかりさやけき秋の月くもの上こそ思ひやられるれ。 經臣

【語釋】 ○くもの上 禁中をいふ。

經臣 藤原氏。  
肥前守。

古京

綠草如今麋鹿苑。 紅花定昔管絃家。  
過平城古京。管三品。

【大意】 綠の草の繁つてゐるところは、今鹿の棲處となり、紅の花の咲いてゐるあたりは、多分、昔大官人が管絃を弄んだ家の跡であらう。

いそのかみふるき都をきて見ればむかしかざし、花さきにけり。 中務

【語釋】 ○いそのかみ 大和國山邊郡の地名。そこに布留といふ小字があるので、ふるきの枕詞とした。○むかしかざし、昔大官人が頭にさしかざした。

故宮 附故宅

陰森古柳疎槐春無春色。 獲落危牖壞宇秋有秋聲。  
連昌宮賦。公乘傳。

【語釋】 ○陰森 樹木の茂つて、暗く物すごいさま。○獲落 うつろなさま。

【大意】 古い柳や疎らな槐が生ひ茂つて物凄く、春が来ても春の色はなく、傾いた窓や破れた家からりとして、秋になると、哀れな秋風の音がする。

臺傾滑石猶殘砌。 簾斷眞珠不滿鉤。  
題于家公主舊宅。白。

【大意】 臺が傾いて磨いた礎石がなほ砌に残り、簾がちぎれて飾の眞珠が散り失せ、簾をかける鉤に懸け足りない。

强吳滅兮有荆棘、姑蘇臺之露瀼々。 暴秦衰兮無虎狼、咸陽宮之煙片々。  
河原院賦。源順。



【語釋】 ○強吳 吳王夫差の強大であつたのをいふ。○有荆棘 刺のある灌木などが叢生してゐる。○姑蘇臺 夫差の父闔閭の築いて壯麗を極めたもの。○漢々 露の多いさま。○無虎狼 秦が連りに他國を侵略したので、その強暴を虎狼に比した。○咸陽宮之煙 咸陽宮は秦の始皇帝の宮殿で、輪奐の美を極めたが、項羽が火を放つた時、三月の間も煙が絶えなかつたといふ。煙片々は一片の煙となつたのをいふ。○河原院 左大臣源融の第。

老鶴從來仙洞駕 寒雲在昔妓樓衣 嵯峨舊院即事 菅

【釋語】 ○嵯峨院 京都嵯峨にあつた。今の大覺寺の地。

【大意】 庭の老鶴は無論仙洞様(上皇の稱)の御乗物で、空の雪げの雲は、昔舞妓がゐた高殿にかけた衣であらう。

孤花裏露啼殘粉 暮鳥栖風守廢籬 題后妃舊院 良春道

【大意】 一輪の花は露にうるほうて、美人が白粉くづれのした顔で泣く如く、夕暮の鳥は風の吹く處に巢喰うて、壞れた垣を守るやうに見える。

荒籬見露秋蘭泣 深洞聞風老檜悲 秋日過仁和寺 源英明

【大意】 荒れた籬におく露は秋蘭の花の泣くので、奥まつた洞に聞える風は古い檜の悲しむ聲である。

向晚簾頭生白露 終宵床底見青天 屋舍壞 三善宰相

【大意】 軒も傾き屋根も破れ、日の暮れようとする頃は、簾に露がおり、終夜床の上にもながら、青空を見る。

君なくてあれたる宿の板間より月のもるにもそではぬれけり。

【大意】 主人もなくて荒れた家の屋根の板間から、露ばかりか、月影の洩るにも、榮えた昔が思ひやられ、涙で袖をぬらした。

君なくてけぶり絶えにし鹽釜のうらさびしくも見えわたるかな つら

【語釋】 ○君 この歌は河原院でよんだので、君は源融をいふ。○けぶり絶えにし鹽釜 融は河原院に鹽釜の浦を摸し、難波から潮水を運ばせて、鹽を焼いてゐた。○うらさびしく 心さびしくの意を鹽釜の浦寂しくとかけた。

いにしへはちるをや人のをしみけむ今は花こそむかしこふらし 一條

三善宰相 三善清行のこと。前出。

一條攝政 藤原伊尹。攝政太政大臣となり、天祿三年薨じた。天祿四年十九。謙徳公と諡された。



【大意】 今はその人は死んで、この世にないから、その惜しんだであらう花が、却つてその人の在世の頃を戀しく思ふであらう。

仙家 附道士・隱倫

○道士は、老・莊・佛氏の學を修むるもの。隱倫は、賢人の、世をそむいて山谷に隠れたもの。

壺中天地乾坤外 夢裏身名旦暮間

幽栖元積

【語釋】 ○壺中天地 費長房が老翁と壺の中に入つて歡樂を極めたといふ故事。○乾坤外 この世の外。乾坤は天地。

【大意】 壺中の天地は仙界の事で、この世の外であるから、その楽しみも際限なく、夢のやうな身命や名利は、一寸の間に盡きてはかない。

藥爐有火丹應伏 雲碓無人水自舂

尋郭道士不遇

【語釋】 ○藥爐 丹藥を煉る爐。○丹應伏 藥爐の内に丹藥が煉り出されてあるだらう。○雲碓 雲母を擣く水臼。○水自舂 人はゐなくて、たゞ水臼が自ら雲母を舂くを見るばかりである。

山底採薇雲不厭 洞中栽樹鶴先知

ト山居 溫庭筠

三壺雲浮七萬里之程分浪 五城霞峙十二樓之構插天

神仙策 都良香

【大意】 渤海中にあるといふ三壺の城山は七萬里の程を隔て、浪の間に雲の如く浮び、仙人の居る五城は霞の立つ如く屹立し、十二樓の結構は天外に聳えてゐる。

奇犬吠花聲流於紅桃之浦 驚風振葉香分於紫桂之林

阿蘭

【大意】 世に見馴れない犬が、人を見て驚き吠える聲が、遠く桃花の流を傳うて聞え、颯と吹く風が木の葉を振ひ動かすと共に、よい香が立つのは、紫桂の林にはひとつたのである。

謬入仙家雖爲半日之客 恐歸舊里纔逢七世之孫

二條院 潘 花籠 舞衣

序 後江相公

【語釋】 ○上句は、晉の王質が山に入つて、半日童子の圍碁を見、歸つて來ると、已に數百年を経てゐたといふ故事。下句は、漢の劉晨・阮肇が山中に迷うて、山路を彷徨し、やつと歸つて來ると、七代目の孫に逢つたといふ故事。

丹竈道成仙室靜 山中景色月華低

山中有仙室 晉三品



【語釋】○丹竈 不死の藥たる丹藥を煉る竈。以下八句は一篇の律詩。

【大意】この仙人は術成つて昇天したと見えて、人影は見えず、たゞ一輪の月光の低く、山の端に懸つてゐるのみである。

石床留洞嵐空拂。玉案拋林鳥獨啼。同胸句也。

【大意】風は空しく石の床の塵を拂ひ、玉の机も林中に投げ棄てられて、鳥の聲のみおとづれる。

桃李不言春幾暮。烟霞無跡昔誰栖。同腰句也。

【大意】仙人が昇天してから幾春を経たかと花に向へど、諺に「桃李不言下自成蹊」とある如く、花は答へることなく、烟霞は年毎にたなびけど、跡を留めることもないから、誰の住んだ跡とも知れない。

王喬一去雲長斷。早晚笙聲歸故溪。同結句也。

【大意】仙人王子喬が一たび昇天して、再び歸ることがないから、何日かまた、もと住んだ溪に歸つて、笙を翫ぶのを聞くことが出来よう。

商山月落秋鬚白。潁水波揚左耳清。山中自述。後江相公。

【語釋】○商山 漢の四皓の隠れた山。○月落 わが齡の傾いたのによそへた。○潁水波揚云 云 許由が堯が天下を譲らうといふのを聞いて、耳が汚れたとて、潁水（川の名）で耳を洗つたといふ故事。○左耳 いやな事は左の耳で聞く。

虛澗有聲寒溜咽。故山無主晚雲孤。山無主隱士。紀納言。

【大意】今は山野に遺賢がないから、人の居ない澗に、寒泉の咽ぶ音のみ残り、主のない故の山に、一片の夕雲の停まつてゐるのを見るのみである。

通夢夜深蘿洞月。尋蹤春暮柳門塵。遠念賢士風。菅三品。

【大意】高士に逢つて語る中に、蘿にとざされた洞を照らせる月影の更けたのを見、賢者の跡を尋ねあるうちに、春かれて、陶潜が家かと思はれる柳の門に、柳の花の塵と散るのを見る。陶潜は五柳先生と號したのである。

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千とせを我は經にけむ 素性

【大釋】上句は、山路をたどつて、菊の露にぬれた衣をほす、その露を、僅の間といふ意の露



の間と續け、下句は、その儘の間であるのに、いつの間にか、自分は千年を経たのであらうと、王質(一七一頁既出)の故事をよんだ。

山家

遺愛寺鐘欵枕聽。香鑪峯雪撥簾看。寺近香鑪峯下。

【語釋】○遺愛寺 廬山の中にある。○香鑪峯 廬山の一峯。

蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中。廬山草堂雨夜獨宿。

【大意】友人達は蘭省(尙書省)に奉職して、春の花の咲き誇る時、天子の錦帳の下に侍してゐるが、自分は今廬山の草庵に獨りわびしく、夜のさびしい雨聲を聞いてゐる。

漁父晚船分浦釣。牧童寒笛倚牛吹。登石壁水閣。杜荀鶴。

【大意】漁人の日暮の船はあちこちの浦に分れて釣り、牛飼童の吹えた笛は牛背に倚つて吹いてゐる。

王尙書之蓮府麗則麗恨。唯有紅顏之貧。嵇中散之竹林。

幽則幽嫌殆非素論之士。尙書會詩序。曹三品。

【語釋】○王尙書之蓮府 齊の吏部尙書王儉の府(役所)の下役庾杲之を、或人が評して、その麗しいこと、緑水に泛ぶ蓮のやうだといつたので、世人が王儉の府を蓮花池と稱したといふ故事。○紅顏之貧 年少の客。○嵇中散 嵇康のこと。中散大夫であつたからいふ。○素論之士 白髮の老人。論は倫とおなじい。○尙齒會 老人をたふとぶ會。

【大意】王儉が蓮府は實に麗しかつたけれど、庾杲之のやうな、年少の客のみであつたのが遺憾であり、又、嵇康が遊んだ竹林はまことに幽邃ではあるが、同遊の七賢は、白髮の老人でないのが残念である。

南望則有關路之長。行人征馬絡繹於翠簾之下。東顧亦有林塘之妙。紫鴛白鷗逍遙於朱檻之前。白河院秋花逐露開詩序。源順。

【語釋】○關路之長云々 京から逢坂の關へゆく路をいふ。○征馬絡繹 旅人の乗つた馬が、絶えず往來する。○林塘 林のある堤。○朱檻 朱塗の欄干。○白河院 山城國愛宕郡。

山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲。澗戸鳥歸遮眼者竹煙松霧。



之色ナリ 暮春遊覽賦序。紀齊名

【語釋】 ○樵歌牧笛 樵夫の歌ふ歌と、牧童の吹き鳴らす草刈笛。○澗戸 谷の入口。

花間ニ覓ム友ト鶯ノ交ハ語ヲ 洞裏ノ移シ家ノ鶴ト隣ニ ト山居。紀納言

晴後レ青山ハ臨ミ牖ニ近ク 雨ノ初メ白水ハ入リ門ニ流ル 田家之早秋。都良香

【大意】 雨がやみ、雲が収まれば、青山は近く窓の前に見え、雨が降り初めれば、濁水はまづ門に入つて流れる。

觸ル石ハ春ノ雲ノ生ル枕上 銜ム峯ノ曉ノ月ハ出ル窓中 春宿山寺。橋直幹

【大意】 谷間の石を衝いて起る雲は、自分が寝てゐる枕許から生ずるが如く、峯にかゝつてゐる曉の月は、窓の中から出たかと思はれる。

山里は物の寂しきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけり。 よみ人しらず

やま里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば。 宗子

【大意】 山里は何時もしさびしいが、殊に冬は、草も枯れ、花紅葉のために折々は來てゐる人も離れて見えなくなつたと思へば、とりわけ寂しく感ぜられる。枯れに離れをかけた。

田家

碧毯ニ線頭ニ抽キ早稻 青羅裙ヲ帶ヒ展キ新蒲 春題湖水。白

【大意】 青い毛氈を敷きつめたと見える、その線端を見れば、早苗の抽んでたのであり、又青い羅の裳の紐と見えたのは、蒲の若葉の生ひ出たのである。

守家ハ一犬ヲ迎ム人ハ吠ス 放野ニ群牛ヲ引キ犢ヲ休ム 田家早秋。都良香

野酌ハ卯時ノ桑葉露ヲ 山畦ニ甲日ノ稻花風 田家秋意。紀齊名

【語釋】 ○野酌 野邊で酒を酌む。○卯時 今の午前六時。諺に、卯時に酒を飲めば樂になるといふ。○桑葉露 酒の一名。○山畦 山に沿うた田畝。○甲日 立秋後の甲の日の風で、百穀が熟するといふ。

蕭索ニ村風ヲ吹ク笛處 荒涼ニ隣月ヲ擣ツ衣程 同前。高林如



齊宮内侍 傳未詳。

【語釋】○蕭索 物さびしく興盡きたさま。○荒涼 すさまじく興さめたさま。

春の田を人にまかせてわれはたゞ花にこゝろをつくる頃かな。 齊宮内侍

【語釋】○心をつくる 心を著くるに、作るの意を添へた。

時過ぎば早苗もいたく老いぬべし雨にも田子はさはらざらなむ。 貫之

【大意】 植えるべき時が過ぎたなら、早苗も甚しく伸び過ぎるであらうから、雨に拘らないで、田子(農夫)は早く植えてほしい。

きのふこそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風のふく。

【語釋】○早苗とりしか 早苗をとるとは早苗の植え付けをするをいふ。

隣家

明月好同三逕夜、 綠楊宜作兩家春。 興元八二ト絶句。

【語釋】○三逕 三つの小みち。前漢の蔣詡が庭に三逕を開いて、一二の親友とのみ遊んだといふ故事。○兩家春 次の詩の陸張を見よ。次の句と共に一首の絶句。

何獨終身數相見、 子孫長作隔牆人。 同前。

【大意】 明月には兩人手を把つて三逕に徘徊し、又一株の青柳に、兩家春色を分つて、互に樂しまう。何ぞ只一生互に度々逢ふばかりか、子孫も長く垣隣に住む人とならう。

池邊別業是何人、 聞道陸張昔卜隣。 暹隣家、菅三品。

【語釋】○聞道 傳へ聞く。○陸張 陸惠曉と張白融の二人で、隣に住み、その間に池があり池上に柳があつたといふ。次の句と合はせて一首の七絶である。

落枕波聲分岸夢、 當簾柳色兩家春。 同前。

【大意】 この池邊の別莊は誰の住居か知らぬが、傳へ聞いた陸・張の二人が池を挟んで隣に住み、池上に一株の柳を植えた風流に似てゐる。枕に近く聞える波の聲は、各々彼方此方の岸に聞き分けて眠り、兩家の簾に當る柳の色は、兩家をして一時に春の恩をなごしめる。

春煙遞讓簾前色、 曉浪潛分枕上聲。 暹隣家、直幹。

【大意】 芽柳のぼつとした春色は、互に他家の簾前にありと見られ、曉にたつ池の浪音は、幽かに兩方の岸に眠つてゐる枕邊におのゝ聞える。



君がやどわが宿わくるかきつばたうつろはぬまに見む人もがな。 貫之  
【語釋】 ○わくるかきつばた 分くる垣に、燕子花をかけた。

山寺

千株松下雙峯寺、一葉舟中萬里身。  
香山寺隱居。

【語釋】 ○雙峯寺 廬山の峯にある香山寺と遺愛寺。○萬里身 萬里の遠きに謫せられた身。

更無俗物當人眼。但有泉聲洗我心。  
宿靈岩寺上院。

不改朝天之門、便作求車之所。不變閔水之橋、以爲到岸之途。  
慈恩寺初會詩序。

野相公

【語釋】 ○朝天之門 朝廷に出仕する時に出入する門で、我が家の門をいつた。○求車 佛經に「牛車に乗つて火宅を出づ」「牛車を求めて火宅を出づ」などあるによつて、佛法を求むる意にいつた。○閔水之橋 門前の小川に架けた橋をいつた。○到岸 眞如の彼岸に到る。

【大意】 昔朝廷に出仕した門を改めないで、直に一切衆生を導く道場となし、門前の小橋を、

すぐに世間の迷夢を脱して、眞如の彼岸に到る途とした。

策馬來時、只思風煙之可翫。逢僧談處、漸覺世俗之皆空。

遊圓成寺上方。源英明

【大意】 洛東の圓成寺に、馬に鞭うつて來る時は、只野外の風やもやの、楽しみ翫ぶべきを思ひ、又寺僧に逢うて、世間の諸法は皆空である理を聞けば、世俗の事皆執着するに足らざるを覺つた。

人如鳥路穿雲出、地是龍門趁水登。  
遊龍門寺。菅丞相

【大意】 大和の龍門寺に詣づる人は、恰も鳥の通ふ路の雲を分けて出づる如く、又山の名を龍門といふので、支那の龍門に、龍にならうとして魚が上るやうに、人もこの山には瀧の流を逐うて登る。

三千世界眼前盡、十二因緣心裏空。  
竹生島作。都良香

【語釋】 ○三千世界・十二因緣 共に佛語。

【大意】 竹生島の山上から、琵琶湖を見下せば、水天渺茫として際涯がないので、三千世界の



廣さも眼前に見え盡きて残す所なく、十二因縁の諸々の迷の雲も消え去つて、心裏に一物も留めない。

泉飛雨洗聲聞夢。

葉落風吹色相秋。

題石山寺。高相如。

【語釋】○聲聞 悟ること猶淺く、阿羅漢を極果とする佛弟子。○色相 有爲有漏の法の、色形にあらはれたことをいふ。

【大意】 石山寺を見れば、瀧の水音の雨に似たのが、まだ悟ることの浅い聲聞等の夢を驚かして、その迷の心を洗ひ、木の葉を誘ふ嵐は、その色相凋落の秋を吹いて、この世の無常を悟らせる。

山寺のいりあひの鐘のこゑごとに今日もくれぬと聞くぞ悲しき。

このもとをすみかとするればおのづから花見る人になりにける哉。

花山院

【大意】 僧となつての樹下の住居をすれば、知らずく咲き匂ふ花もながめられて、花にあくがるゝ人のやうになつてしまふことよ。

佛事

月隱 重山兮、舉扇喻之。

風息 大虛兮、動樹教之。

止観第一文。

【大意】 天台の教義を説いた止観の句で、月が重疊たる山岳に隠れると、凡夫は月が無くなつたかと迷ふ故に、團扇を舉げて月の存在に喩へ、大空に風がやむと、凡夫は風がなくなつたかと迷ふ故に、樹をゆり動かして、なほ風の存在することを教へる。

願以今生世俗文字之業、狂言綺語之誤、ハツハツコソヤウセ 願爲當來世々讚佛

乘之因轉法輪之緣。

香山寺。白。

【語釋】 ○當來世々 現當・未來の二世。○讚佛乘 佛道に入り、佛法を歡喜して、その功德をほめること。○轉法輪 佛法の、よく一切の煩惱を破碎すること、恰も轉輪王の輪寶の、よく一切の障礙を碎いて進むに比していふ。

【大意】 願ふは、自分の犯したこの世の文字を誦ぶ罪業、たは言や虚飾の語を作した誤を以て、轉じて現在・未來の世々をかけ、佛法を讚し、法輪をめぐらす因縁となし給へ。

百千萬劫菩提種。八十三年功德林。

贈鉢塔院如滿大師詩。白。

【語釋】 ○劫 時の極めて長いのをいふ佛語。○菩提 さとり。梵語。  
【大意】 大師はよく未來永劫にわたる菩提の種を蒔かれ、八十三年の生涯に於て、無量の功德



を施された。

十方佛土之中、以西方爲望、九品蓮臺之間、雖下品應足、

極樂寺建立願文。慶保胤。

【大意】 十方の佛土の中では、西方阿彌陀佛の極樂淨土を望み、その極樂淨土には上品上生から下品下生まで九品の階級があるが、最下の下品の往生でも、満足すべきである。

雖十惡、猶引攝、甚於疾風披雲霧、雖一念、必感應、喻之、

巨海納消露、讚極樂寺一文。後中書王。

【大意】 阿彌陀如來が、假令十種の罪惡をなした者も、尙淨土に引取るとは、疾風が雲霧を吹き開くよりも甚しく、一回の念佛でも必ずこたへて驗あることは、大海が小流の滴をも受け入れるに喩へる。

昔、忉利天之安居九十日、刻赤梅檀、而摸尊容、今、跋提河之滅

度二千年、瑩紫磨金、而禮兩足、仁康上人奉造丈六釋迦願文。江匡衡。

【語釋】 ○忉利天 帝釋天の居所。佛語。○安居 一夏九十日の門、靜所にあつて、道心を修養すること。○刻赤梅檀云々 優填王が毘首羯磨をして、赤梅檀で佛像を刻ましたこと。

○跋提河之滅度二千年 跋提河は釋迦の入滅の地。釋迦入滅後二千年での意。○瑩紫磨金云云 紫磨金は黄金の美なるもので、紫色を帯びてゐる。兩足は兩足尊で、佛の別稱。この句は仁康上人が金丈六の釋迦像を造つたのをいつた。

浪洗欲消、鞭竹馬而不顧、雨打易破、鬪芥鷄而長忘、經云乃至歲子戲聚沙

爲佛塔一詩序也。保胤。

【大意】 沙を積んで佛塔を作るのは、無心の童子の遊戯で、出来た後は、竹馬に鞭を打たれ、雨に打たれてこわれても、長く忘れて顧みないけれども、これがやがて佛道に縁を結ぶ始である。

念極樂之尊、一夜山月正圓、先勾典之會、三朝洞花欲落、

勸修會詩序。紀齊名。

【語釋】 ○勾典之會 茅盈君といふもの勾典山に棲んで仙術を得、三月十八日昇天するのを、數百の仙人勾典山に相會してこれを送つたといふ。「先だてること三朝」とは、勾典會は三月



十八日で、この勸學會は三月十五日だからいつた。

【大意】 山寺の日暮れて、阿彌陀如來を念する夜、恰もその尊容を忍ばせて、圓滿なる十五夜の月、山の端に出で、仙境の春閑にして、茅盈君の句典の會より早いこと三日の今日、花は紛々として洞中に散らうとする。

玉磬聲思管絃奏、  
衲衣僧代綺羅人。

九條右丞相花亭法華會詩序。都良香。

【大意】 九條公は日頃は管絃を奏し、綺羅を飾つた美人を集めて、歡樂を盡くされるであらうが、今日は法華會を修せられるので、玉磬の音は管絃の聲に代り、法衣を著た僧が、綺羅を飾つた美人に代つてゐる。

眼蓮豈養清涼水、  
面月長留十五天。

贈阿難尊者詩。紀齊名。

【語釋】 ○眼蓮・面月 迦葉尊者が、阿難尊者を讚歎して、「面如淨滿月、眼如青蓮」といつた語によつた。迦葉も阿難も釋迦佛の弟子。

【大意】 尊者の眼蓮は、どうして世の常の冷たい水に養はれたものであらうぞ。尊者の面月は、いつも十五夜の空である。

以佛神通爭酌盡、  
經僧祇劫欲朝宗。

弘誓深如海詩。江以言。

【語釋】 ○僧祇劫 大多數量の劫。劫は非常に長い時間の稱。○朝宗 百川の海に注ぎ入ること。

と。○弘誓 佛のあらゆる衆生を救はんとの誓。

【大意】 弘誓の海の深いことは、佛の神通力といへども、どうして酌み干すことが出来よう。

されば、その海は百川の海に集まる如く、幾久しい時を経て盡きることにはなからう。

叩凍負來寒谷月、  
拂霜拾盡暮山雲。

採果汲水詩。慶保胤。

【大意】 釋尊が大乗の法華經を得るためには、氷を砕いて汲んだ水に映る冬の谷間の月をそのまま背に負うて歸り、或は霜を拂うて峯の果を採るに、その峯の雲ながら拾ひ盡すやうな難行をされた。この句は次に續く。

已終未習千年役、  
初得難逢一乘文。

同前。

【語釋】 ○千年役 釋迦求法の爲に、阿私仙に千年奉仕したのをいふ。○一乘文 法華經をいふ。

【大意】 十善の王位をすて、會て經驗したこともない千年の苦行に堪へて、漸う無量劫にも逢ひ難い、一乘法華の妙文を得られた。

この世にて菩提の種をうゑつれば君がひくべき身とぞ成りぬる。九條右相府  
【大意】 下句は、彌陀の引攝し給ふべき身となつたとの意。

九條右相府 藤原師輔。右大臣。天徳四年薨じた、年五十三。世に九條殿と稱した。



あのくたら三みやく三ぼだいの佛達我が立つ袖に冥加あらせ給へ。  
傳教大師

傳教大師 名は最澄。比叡山延暦寺を開き、天台宗を弘めた。弘仁十三年寂した、年五十六。

【語釋】 ○あのくたら三みやく三ぼだいの佛 無上正等正覺の佛。○我が立つ袖 袖木の材木を取ることを。立つはその事を取り立てるをいふ。○冥加 冥々の中に佛の加護するをいふ。これは延暦寺建立の時の作。

極樂ははるけきほどと聞きしかどつとめていたる處なりけり。 空也上人

空也上人 名は光勝。醍醐天皇の皇子。六波羅密寺を創立。天祿三年寂した、年七十。

いつしかと君にと思ひし若菜をば法のためにぞ今日は摘みつる。 村上

【大意】 御母後の年賀の御祝に摘まうと思うた若菜を、思の外にその御法事のために今日は摘むことよ。 御製

僧

蒼茫霧雨之晴初寒汀鷺立。 重疊煙嵐之斷處晚寺僧歸。

閑居賦。張讀

【大意】 ほの暗い霧雨の晴れた折、冬の汀に鷺の立つてゐるのが見え、又幾重にも重なつたもやの絶え間に、夕暮の寺に僧の歸るのが見える。

野寺訪僧歸帶月。 芳林携客醉眠花。

逢醍醐一條寺僧正歸宗。英明

堂有母儀莫以逗留於中天之月。 室有師跡莫以偃息於五臺

之雲。 饒入唐僧一序。保胤

【語釋】 ○中天 中天竺の略。○師跡 師匠。○偃息 臥し息ふ。○五臺 支那山西省の五臺山清涼寺。

【大意】 家には慈母があり、室には恩師があつて、朝夕、君の身を案じ煩うてゐられるのだから、よし求法のためとはいへ、久しく唐天竺に留まらず、速く歸つて来て、母や師の心を慰め給へ。

明鏡乍開隨境照。 白雲不著下山來。

以僧智一喻明鏡。野相公

【大意】 師の智識は明鏡の如き悟で、何處の境でも照らさぬことなく、従つて一方に執着しな